

本庄町遺跡

第10次調査

埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

神戸市教育委員会

序

本庄町遺跡は神戸市域の東端に位置し、1984年に第1次調査を実施して以来、数次にわたって調査が行われ、縄文時代後期から中世にかけての集落遺跡であることが明らかになっています。

今回報告する第10次調査においても、縄文時代晚期から中世にかけての遺構、遺物が発見されました。また、平安時代前期の墨書き土器や施釉陶器など官衙的因素をもつ遺物も発見され、今回の調査地の近辺に存在したと考えられている古代山陽道に付随する施設である「葦屋驛家」との関係が示唆されます。

本書が市民の皆様にとって地域の歴史と文化を学ぶ資料として、また、文化財保護への理解を深めて頂ける一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月
神戸市教育委員会

例　言

1. 本書は神戸市東灘区深江北町2丁目に所在する、本庄町遺跡第10次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は社屋（社員寮）建替工事に伴うもので、神戸市教育委員会が株式会社竹中工務店から委託を受けて、平成29年11月7日から平成30年3月30日の期間で実施した。発掘調査面積は1700m²である。調査は池田毅・中井菜加が担当した。出土遺物の整理作業は、平成30年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施し、阿部功が担当した。
3. 本書の作成は池田・中村大介・山田侑生の協力を得て中井が担当した。本文は第2章第3節（7）鉄製品を中村が、（9）木製品を山田が担当した。また、第3章の自然科学分析は、古環境調査に伴う花粉分析・珪藻分析については文化財調査コンサルタント株式会社の報告を元に中村が、木製品樹種同定については古代の森研究舎の報告を元に山田が編集した。この他については池田の協力のもと、中井が編集を行なった。
4. 現地での遺構写真は池田・中井が撮影した。遺物写真については写房 楠華堂 内田真紀子氏が撮影した。金属製品のX線透過像は中村が撮影した。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「西宮」、神戸市発行の2,500分の1地形図「深江」「深江北」「青木」「本山」を使用した。
6. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
7. 土器観察表中において、括弧内の数値は図上復元による推計値を、漁撈具観察表中において、残存率が低い遺物の法量を示している。また出土層の項目において、湿地堆積層からの出土に限り、層名ごとに①～③の番号を付けている。（組合せは図5に順ずる。）
8. 出土木製品について奈良文化財研究所の星野安治氏、浦蓉子氏からご教授を得た。
9. 空中写真撮影については（株）GEOソリューションズに委託した。
10. 木製品樹種同定は古代の森研究舎に、古環境調査に伴う花粉分析・珪藻分析については文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。
11. 出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
12. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、株式会社 竹中工務店に多大なるご協力を頂いた。記して感謝を申し上げます。

目 次

序

例 言

目 次

第1章	はじめに	1
第1節	本庄町遺跡の立地と歴史的環境	1
(1)	遺跡の立地	1
(2)	遺跡の歴史的環境	2
第2節	既往の調査	5
第3節	調査に至る経緯と経過	7
(1)	調査に至る経緯	7
(2)	調査組織	7
(3)	調査経過	8
(4)	調査日誌抄	8
第2章	調査成果	9
第1節	基本層序	9
第2節	遺構と遺物	12
(1)	第1遺構面	12
(2)	第2遺構面	12
第3節	出土遺物	15
(1)	1~3区出土土器	15
(2)	4、5区出土土器	22
(3)	転用硯・墨書き土器	25
(4)	漁撈具	26
(5)	瓦	28
(6)	石製品	28
(7)	鉄製品	28
(8)	灰色シルト層ほか出土土器	29
(9)	木製品	32
第3章	本庄町遺跡第10次調査における自然科学分析	43
第1節	本庄町遺跡発掘調査に伴う古環境分析	43
第2節	本庄町遺跡第10次調査で出土した木製品の樹種	51
第4章	まとめ	57

挿 図 目 次

図 1 本庄町遺跡の位置	1	図 4 調査区域図	9
図 2 本庄町遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)	3	図 5 調査区壁面土層断面図 (1)	10
図 3 本庄町遺跡調査地点 (S=1/2,500)	5	図 6 調査区壁面土層断面図 (2)	11

図 7 2区第1遺構面平面図	12	図 19 1区出土木製品 (2)	34
図 8 1～3区第2遺構面平面図	13	図 20 2区出土木製品	35
図 9 4区、5区東遺構平面図・断面図	13	図 21 3区出土木製品 (1)	36
図 10 4、5区第2遺構面平面図	14	図 22 3区出土木製品 (2)	37
図 11 1～3区出土土器 (1)	15	図 23 5区出土木製品 (1)	38
図 12 1～3区出土土器 (2)	17	図 24 5区出土木製品 (2)	39
図 13 1～3区出土土器 (3)	18	図 25 調査レンチ平面図	43
図 14 4、5区出土土器	23	図 26 試料採取地点断面図	43
図 15 4、5区出土墨書き土器・転用硯	25	図 27 花粉ダイアグラム	44
図 16 漁撈具・瓦	30	図 28 珪藻ダイアグラム	45
図 17 石・鉄製品、灰色シルト層ほか出土土器	31	図 29 珪藻総合ダイアグラム	45
図 18 1区出土木製品 (1)	33		

表 目 次

表 1 既往の調査一覧	6	表 10 灰色シルト層ほか出土土器観察表	29
表 2 1～3区土器観察表 (1)	19	表 11 器種があいまいな木製品の分類基準	32
表 3 1～3区土器観察表 (2)	20	表 12 木製品観察表 (1)	40
表 4 1～3区土器観察表 (3)	21	表 13 木製品観察表 (2)	41
表 5 4、5区土器観察表	24	表 14 微化石概査結果	44
表 6 4、5区墨書き土器・転用硯観察表	26	表 15 花粉組成表	45
表 7 漁撈具観察表、漁撈具形状分類表	27	表 16 珪藻組成表	46
表 8 瓦観察表	28	表 17 器種分類ごとの樹種同定結果	52
表 9 石製品観察表	28		

挿 図 写

写真 1 花粉・珪藻写真	50
写真 2 本庄町遺跡出土木製品の顕微鏡写真1	53
写真 3 本庄町遺跡出土木製品の顕微鏡写真2	54

真 目 次

写真 4 本庄町遺跡出土木製品の顕微鏡写真3	55
写真 5 本庄町遺跡出土木製品の顕微鏡写真4	56

写 真 図 版 目 次

図版1 4、5区空中写真 (俯瞰モザイク)	
1区第2遺構面（南から）	
2区第1遺構面（東から）	
図版2 2区第2遺構面（東から）	
2区西第2遺構面（東から）	
4区、5区東第2遺構面（北東から）	
図版3 4区第2遺構面（東から）	
4、5区東第2遺構面空中写真 (北から)	
5区第2遺構面空中写真（西から）	
図版4 4区第2遺構面（北東から）	
4区第2遺構面（南東から）	
4区東SK403（南から）	
図版5 4区東、5区第2遺構面（北東から）	
5区第2遺構面（西から）	
5区西端部浜堤面断ち割り状況（北西から）	
図版6 1～3区出土土器 (1)	
図版7 1～3区出土土器 (2)	
図版8 1～3区出土土器 (3)	
4、5区出土土器	
縄文土器	
瓦器・黒色土器	
図版9 墨書き土器・転用硯	
漁撈具	
図版10 瓦	
石製品	
羽釜	
図版11 農耕土木具	
図版12 施設材	
容器・食事具	
祭祀具	
図版13 その他木製品 (1)	
その他木製品 (2)	
鉄製小刀	
鉄製小刀X線透過像	

第1章 はじめに

第1節 本庄町遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

本庄町遺跡は、神戸市東灘区本庄町1丁目、2丁目、深江北町2丁目、3丁目に所在する。北側に聳える六甲山地に源を発して南流する芦屋川の扇状地が遺跡の東に、高橋川の扇状地が西に存在している。縄文海進後に形成された浜堤と、繰り返される土石流堆積による地形に立地しており、遺跡の現地表面の標高は約2.0m～5.0m、遺構面の標高は約0.5m～3.3mで、主に浜堤と堤間湿地上に広がる遺跡である。^{[1][2]}

これまでの発掘調査結果から縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになっているが、堤間湿地部分での調査が多くなったためか、水田の検出が多く見られた。遺跡周辺は現在市街地化されているが、明治18年測量の仮製地形図によると、当時耕作地が多く残っていることが確認でき、急速に市街地化したことがわかる。

調査地の南側には、古代山陽道に付随する施設である「葦屋驛家」の推定地と考えられている深江北町遺跡が隣接していることから、今回の調査においては、従来の本庄町遺跡の様相と若干異なり、深江北町遺跡の様相に近い平安時代前期の遺構、遺物が数多く確認できた。

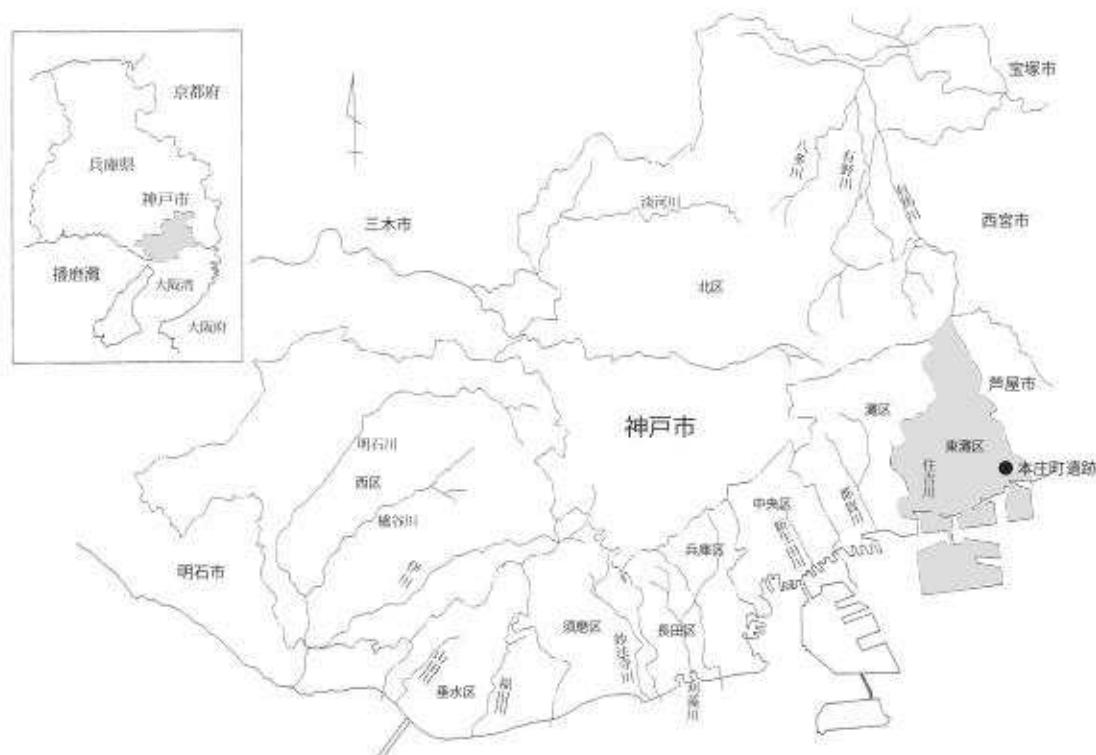


図1 本庄町遺跡の位置

(2) 遺跡の歴史的環境

旧石器時代 六甲山南麓部においては、旧石器時代の遺構は未だ確認されていない。遺物は後期旧石器時代のナイフ形石器が本山遺跡（15）^[3]、西岡本遺跡（20）^[4]、滝ノ奥遺跡^[5]から、翼状剥片石器が芦屋市津知遺跡（5）^[6]から発見されている。

縄文時代 滝ノ奥遺跡では、草創期の有茎尖頭器と同時期の土器も発見されており、一定期間の生活の場であったと推測されている^{[5][7]}。また、本山遺跡からも早期の土器が出土している^[3]。西岡本遺跡^[4]では、前期の高山寺式の時期に属する竪穴建物が発見されている。本庄町遺跡（1）では、前期末から中期前半、後期初頭～前葉にかけての土器と、後期初頭の貯蔵穴が確認されている^[8]。

弥生時代 縄文時代末期から集落が継続する本山遺跡では、前期初頭の土器とともに農耕具等の木製品が発見され、農耕文化の開始期における稻作集団の定着を示している^{[9][10]}。以後、本山遺跡は当該地域の拠点的集落として発展していく。北青木遺跡（2）では前期中葉の土器とともに農耕具や斧柄、石包丁が出土している。芦屋市寺田遺跡でも前期後半に集落が形成されている。

中期は本山遺跡、北青木遺跡の他、森北町遺跡（6）や住吉宮町遺跡（21）でも集落が形成される。中期後葉になると東山遺跡（12）^[11]、保久良神社遺跡（17）^[12]、金鳥山遺跡（18）^[13]、滝ノ奥遺跡、荒神山遺跡（19）^[14]、芦屋市会下山遺跡^[15]などの高地性集落が営まれる。また、この地域は桜ヶ丘銅鐸・銅戈、保久良神社銅戈、本山銅鐸、北青木銅鐸、森銅鐸、生駒銅鐸などの青銅器祭器の埋納地が密集しているのも特徴的である。

後期になると、郡家遺跡や芦屋市三条岡山遺跡（9）などで集落が形成される。深江北町遺跡（4）では、古墳時代初頭まで円形周溝墓が造られた。また、魚崎中町遺跡（14）でも同時期の円形周溝墓が^[16]、住吉宮町遺跡では、方形周溝墓が確認されている。また、森北町遺跡では、前漢鏡片が出土している。

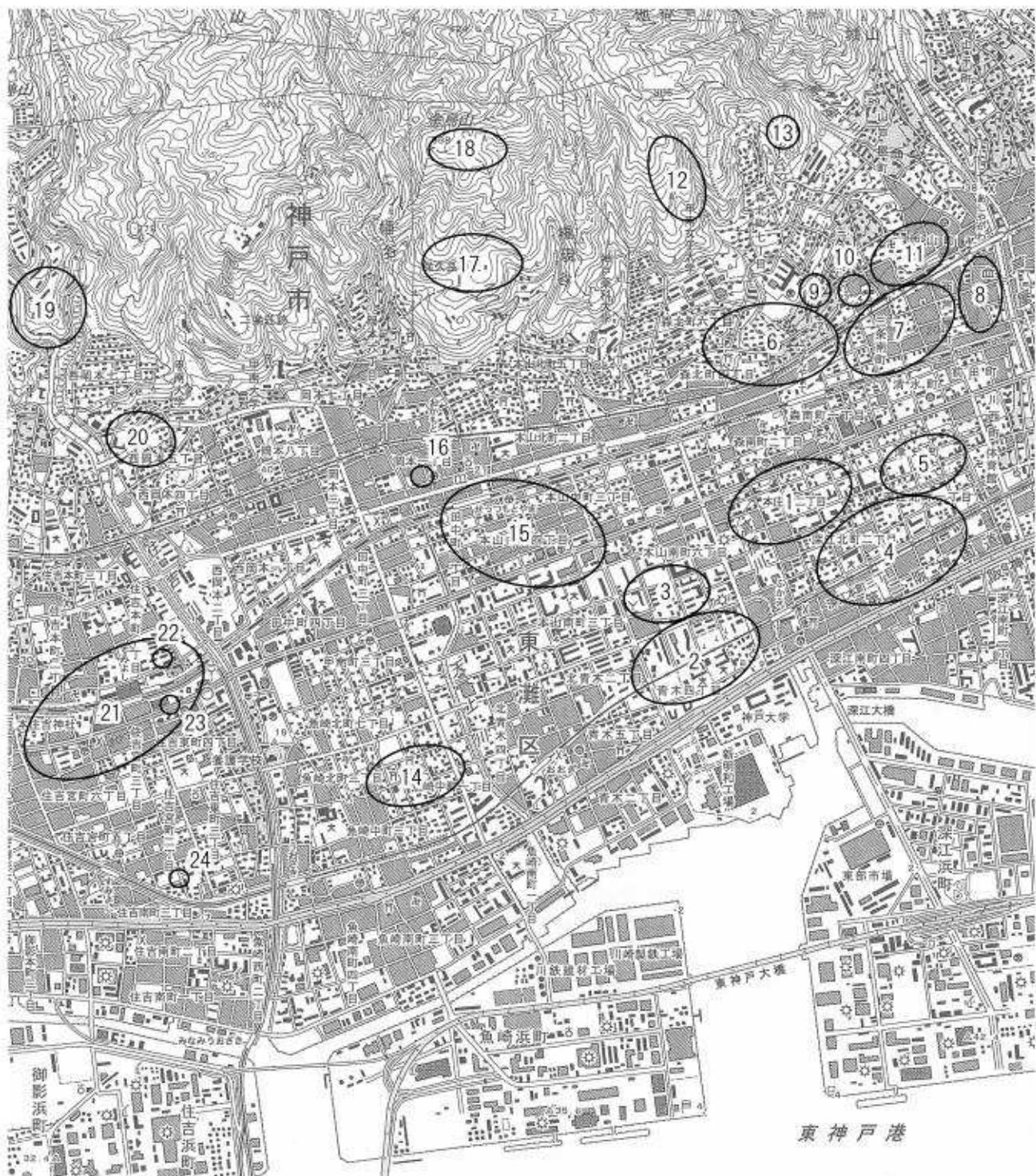
古墳時代 前期においては、西求女塚古墳を始めとして前方後方墳である処女塚古墳^[17]、前方後円墳である東求女塚古墳（24）^[18]、同じく前方後円墳である扁保曾塚古墳（16）^[19]の順に古墳が築造される。

中期には、前方後円墳である坊ヶ塚古墳（22）^[20]と帆立貝形をした住吉東古墳（23）^[21]を盟主墳とする住吉宮町古墳群の形成が始まるとされてきた。しかし、平成29年に行われた住吉宮町遺跡52次調査で、住吉宮町古墳群形成の初期と考えられる5世紀初頭の様相を示す古墳が発見された。盟主墳とされる坊ヶ塚古墳との関係については、今後の調査が期待される。

後期の古墳としては、郡家遺跡^[22]、西岡本遺跡、岡本梅林古墳、生駒古墳、野寄群集墳などが知られている。

集落としては、弥生時代後期から継続している遺跡も多く、郡家遺跡・森北町遺跡・住吉宮町遺跡などがあげられる。

中期は、芦屋市月若遺跡（8）で竈を伴う竪穴建物が発見され、滑石製模造品も多数出土している^[23]。郡家遺跡では、韓式系土器が出土しており、渡来系氏族との関連が示唆される^[24]。また、森北町遺跡でも韓式系土器が出土している^[25]。



1. 本庄町遺跡
2. 北青木遺跡
3. 小路大町遺跡
4. 深江北町遺跡
5. 津知遺跡
6. 森北町遺跡
7. 寺田遺跡
8. 月若遺跡
9. 三条岡山遺跡
10. 三条九ノ坪遺跡
11. 芦屋廃寺遺跡
12. 東山遺跡
13. 会下山遺跡
14. 魚崎中町遺跡
15. 本山遺跡
16. 篠保曾塚古墳
17. 保久良神社遺跡
18. 金鳥山遺跡
19. 荒神山遺跡
20. 西岡本遺跡
21. 住吉宮町遺跡
22. 坊ヶ塚古墳
23. 住吉東古墳
24. 東求女塚古墳

図2 本庄町遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

奈良・平安時代 律令制度が施行されると、当該地域周辺は摂津国菟原郡に属するようになる。

郡家遺跡を菟原郡衙の所在地と推定する説もある^[26]。一方、芦屋市寺田遺跡(7)では奈良時代の倉庫遺構と、郡司の等級を表す「大領」「小領」と書かれた墨書き土器が発見されていることから、菟原郡の郡領氏族との関係が示唆されている。さらに、寺田遺跡の近くには、「壬子年」という干支銘木簡が出土した三条九ノ坪遺跡(10)^[27]と、白鳳期に創建された芦屋廃寺遺跡(11)も存在している^[28]。

また、六甲山南麓を通る古代山陽道の草屋驛家は、深江北町遺跡・芦屋市津知遺跡の付近に設けられた可能性が高いが、明確な遺構は確認されていない。

そのほか、小路大町遺跡(3)では農耕祭祀が行われたと考えられる遺構が発見されており、馬鍔が出土している^[29]。

註

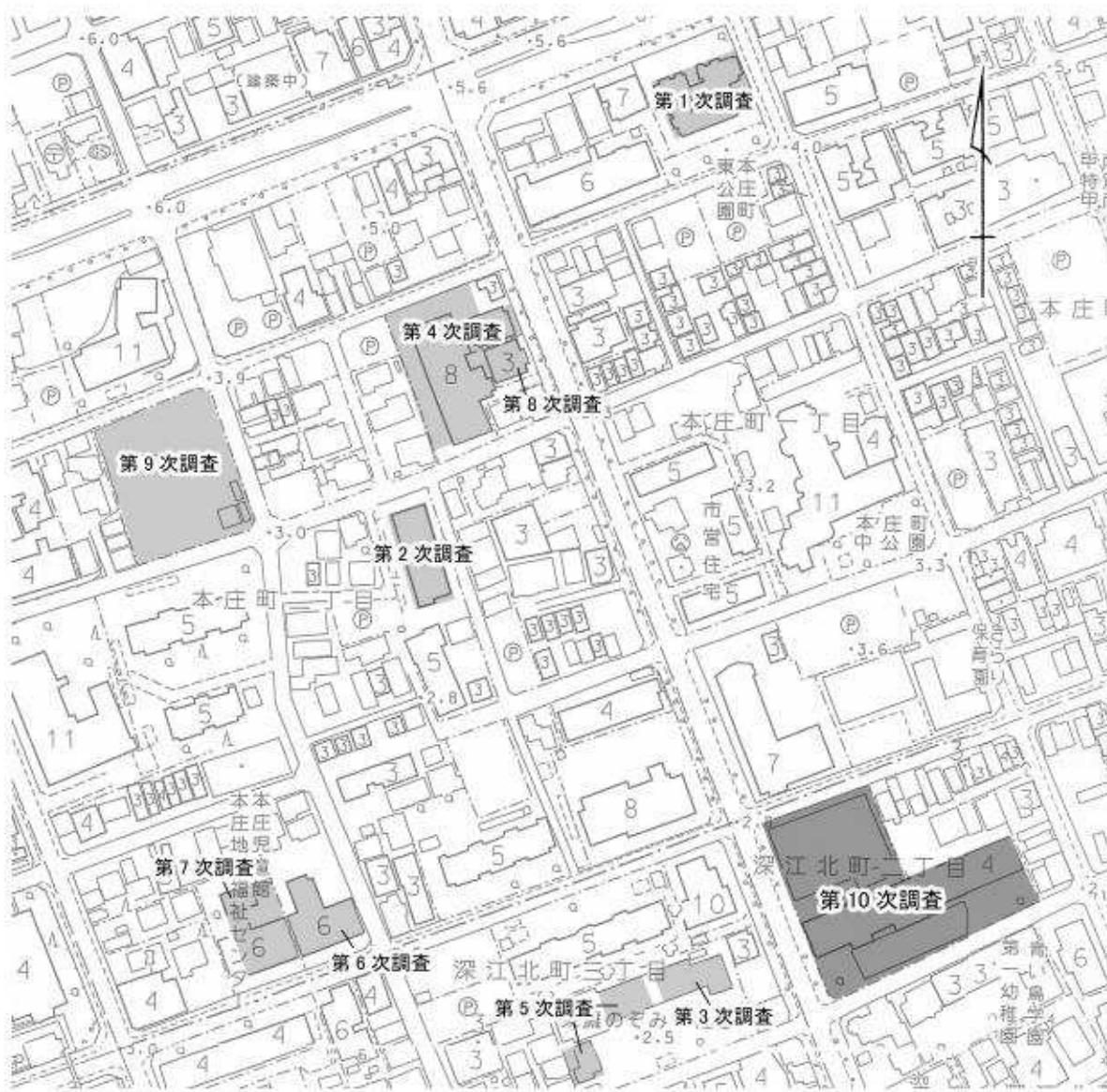
- [1] 田中眞吾 2004「大地の成り立ち」『本庄村史 地理編・民俗編一神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみー』本庄村史編纂委員会
- [2] 増田富士雄 2003「神戸市本庄町遺跡で観察された浜堤の形成過程を記録した地層」『本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- [3] 安田滋・藤井整 1999「本山遺跡第20次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [4] 浅岡俊夫 2001「西岡本遺跡」六甲山麓遺跡調査会
- [5] 黒田恭正・阿部敬生 1994「滝ノ奥遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [6] 和田秀寿 1994「よみがえる津知の歴史Ⅱ（原始・古代編）—津知遺跡が語るものー」『なりひら 芦屋市立美術博物館VOL.17'94/12』芦屋市立美術博物館
- [7] 森田稔 1983「滝ノ奥遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [8] 別府洋二 1991『兵庫県文化財調査報告第92冊 一郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－本庄町遺跡』兵庫県教育委員会
- [9] 安田滋 1998「本山遺跡第17次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [10] 神戸市教育委員会 1997『「発掘された日本列島'97」地域展示ひょうご復興の街から』
- [11] 宮本郁雄 1987「本山町東山遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [12] 新修神戸市史編集委員会編 1989「保久良神社遺跡」『新修神戸市史』歴史編1自然・考古
- [13] 新修神戸市史編集委員会編 1989「金鳥山遺跡」『新修神戸市史』歴史編1自然・考古
- [14] 阿久津久 1970『荒神山遺跡調査報告』神戸市教育委員会 1970
- [15] 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985『増補会下山遺跡』芦屋市教育委員会
- [16] 岩田明広 1996『神戸市東灘区魚崎中町遺跡（第3次調査）』神戸市教育委員会
- [17] 神戸市教育委員会 1985『史跡処女塚古墳』
- [18] 渡辺伸行 1985『東求女塚古墳』『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [19] 梅原未治 1925「武庫郡本山村マンバイのヘボソ塚古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書第二輯』兵庫県
- [20] 渡辺昇・高瀬一嘉 1989『坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群II）』兵庫県教育委員会
- [21] 丹治康明・東喜代秀・須藤宏・橋詰清孝 1994「住吉宮町遺跡第9次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [22] 山口英正 1994「郡家遺跡下山田地区第4次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [23] 森岡秀人・木南アツ子 1995『芦屋市内遺跡発掘調査要報告書一月若遺跡（第19地点）』芦屋市教育委員会
- [24] 丸山潔 1989「郡家遺跡城の前地区第23次調査」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
丸山潔 1990「郡家遺跡城の前地区第24次調査」『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
石島三和 2008「郡家遺跡 第83次調査」神戸市教育委員会
- [25] 黒田恭正 1988「森北町遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- [26] 神戸市教育委員会 1979「郡家大藏遺跡」「現地説明会資料」
- [27] 高瀬一嘉ほか 1997『兵庫県文化財調査報告書第168冊一被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－三条九ノ坪遺跡』兵庫県教育委員会
- [28] 芦屋市教育委員会 1989「芦屋廃寺跡（第62地点）発掘調査」「現地説明会資料」
- [29] 井尻格 2003『小路大町遺跡第4次調査報告書』神戸市教育委員会

第2節 既往の調査

本庄町遺跡は、昭和59年の古代学協会による第1次調査以降、今回の調査を含めて10次にわたる調査が実施され、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになっている。

本庄町遺跡で人の生活痕が確認できるのは、縄文時代後期初頭からである。第2次調査で北白川上層式1期の貯蔵穴を検出しておらず、一部の貯蔵穴内からはイチイガシやアカガシなどのドングリや縄文土器が出土している。第8次調査では、第2次調査と同時期の土坑を検出している。また、調査地内の傾斜変換点から北側の後背湿地からは、廃棄されたと考えられる同時期の土器などの遺物が多数出土している。

本庄町遺跡は、前述の通り、弥生時代から中世にかけての水田遺構が多数発見されている生産遺跡でもある。第1次調査では弥生時代前期の水田畦畔、排水溝、水溜遺構が確認されている。また、畦畔の方向に平行して北西から南東・南東から北西に、畦畔を越えて連続で歩行する並びのヒトの足跡、古墳時代後期の獣足跡も確認された。第2次調査では、弥生時代後期、第6次調査で古墳時代後期、第3・5・7次調査で中世の水田が確認された。第3次調査では古墳時代の田下駄や杭などの木製品も出土している。



集落の痕跡は、第9次調査で弥生時代後期～古墳時代前期初頭と推定される竪穴建物が2棟、掘立柱建物が1棟検出している。鎌倉時代については、ピットや水田は検出しているが、建物の痕跡は、未だ確認されていない。

次 数	調査 年度	調査機関	面積 (m ²)	主な調査内容	文献
1	昭和58年度 (1983)	(財)古代学協会	700	縄文時代晚期の土器、弥生時代前期の水田、古墳時代後期の獣足跡	[1]
2	昭和61年度 (1986)	兵庫県教育委員会	480	縄文時代後期初頭の貯蔵穴、弥生時代後期以降の水田、鎌倉時代の水田	[2]
3	平成4年度 (1992)	神戸市教育委員会	100	縄文時代晚期の土器、古墳時代の田下駄、杭等の木製品	[3]
4	平成4年度 (1992)	高山歴史学研究所	300	縄文時代後期の溝・落ち込み、古墳時代後期の溝、平安時代のピット	[4]
5	平成8年度 (1996)	神戸市教育委員会	160	古代の木製品、中世の水田	[5]
6	平成9年度 (1997)	神戸市教育委員会	450	古墳時代後期の水田	[6]
7	平成10年度 (1998)	神戸市教育委員会	800	古墳時代後期、中世の水田、縄文時代後期から晩期の土器・サヌカイト・石鏡・翡翠製玉	[7]
8	平成10年度 (1998)	神戸市教育委員会	137	縄文時代後期後半の土器溜まり	[8]
9	平成14年度 (2002)	神戸市教育委員会	2,250	縄文時代中期の土器片、古墳時代前期初頭の溝・竪穴住居、古墳時代後期の溝	[9]
10	平成29年度 (2017)	神戸市教育委員会	1,700	湿地状の落ち込み、平安時代前期の溝、施釉陶器、木製品	本書

表1 既往の調査一覧

- [1] 片岡肇編 1985『神戸市東灘区本庄町遺跡発掘調査報告書』財團法人古代学協会
- [2] 別府洋三編 1991『本庄町遺跡：郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- [3] 斎木巖 1992「本庄町遺跡第3次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [4] 高山正久他 2001『兵庫県神戸市 本庄町遺跡』高山歴史学研究所
- [5] 斎木巖 1995「本庄町遺跡第5次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [6] 小栗明彦・藤井保夫 2000「本庄町遺跡第6次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [7] 富山直人 1997「本庄町遺跡第7次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [8] 谷正俊編 1998「本庄町遺跡第8次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [9] 中居さやか 2003『本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会

第3節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、社屋（社員寮）建設工事に伴うものである。埋蔵文化財試掘調査承諾書に基づき、試掘調査を平成29年3月13日に行った。4ヶ所設定した試掘坑で遺物包含層が確認され、弥生土器、土師器、黒色土器が出土したことから、発掘調査が必要な旨を、3月17日付教育長名で回答した。

発掘調査が必要な当該敷地のほぼ全域が施工対象となるが、既存建物基礎による攪乱箇所も多いことから、1～5区の調査範囲を設定して、調査を進めた。

(2) 調査組織

第10次調査の現地発掘および整理、報告書刊行作業にあたって、神戸市教育委員会の体制は次の通りである。

神戸市文化財保護審議会（歴史（考古学）担当）

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館館長

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授

現地調査		出土遺物整理・報告書作成	
平成29年度		平成30年度	
神戸市教育委員会事務局		神戸市教育委員会事務局	
教育長	雪村新之助	教育長	長田 淳
社会教育部長	日下 優	総務部長	浜本泰幸
文化財課長	千種 浩	教育施策推進担当部長	荒牧重孝
埋蔵文化財センター担当課長	安田 滋	文化財課長	千種 浩
埋蔵文化財係長	前田佳久	埋蔵文化財センター担当課長	安田 滋
文化財課担当係長	松林宏典	埋蔵文化財係長	前田佳久
同（保存科学・整理担当）	中村大介	文化財課担当係長	東 喜代秀
事務担当学芸員	山口英正	同	斎木 巍
同	井上麻子	同	松林宏典
同	山田侑生	同（保存科学・整理担当）	中村大介
調査担当学芸員	池田 毅	事務担当学芸員	池田 毅
同	中井菜加	同	阿部敬生
遺物整理担当学芸員	谷 正俊	同	井上麻子
同	佐伯二郎	報告書作成担当学芸員	中井菜加
		遺物整理担当学芸員	阿部 功
		保存科学担当学芸員	山田侑生

(3) 調査経過

試掘調査の結果を受けて、平成29年11月7日より発掘調査を開始した。調査開始時、3区付近から南側一帯の既存建物が解体工事中であったことから広範囲での調査は困難だったため、解体工事完了区域を北東から西に向かい順次調査を進めた。最初に掘削を始めた調査区の北東端を1区としている。調査区は南北で大きく2つに分かれ、北側に1区・2区・2区西・3区・4区東、南側に4区・4区東・5区が含まれる。(調査区の位置は後述の第2章第1節基本層序の図4を参照)

11月21日、22日、30日には、近隣の保育園・幼稚園児童の既存建物の解体現場見学に伴い、埋蔵文化財発掘調査現場も見学することになったため、簡易な説明会を行った。また12月25日には、神戸市立六甲アイランド高等学校の校外実習として9名を受け入れ、発掘調査体験等を行った。

調査の効率化を図るため、ドローンによる空中写真撮影を3月2日に4区・4区東で、3月20日に5区で行った。

平成30年3月30日に、現場資材等を搬出し、コンテナハウスの撤去を行い、現地による発掘調査を終了した。その後、平成30年4月2日から出土遺物の整理事業、発掘調査報告書作成の作業を行った。

(4) 調査日誌抄

平成28年		1月18日	2区西重機掘削
11月7日	1区の東端から重機掘削開始	1月23日	2区西全景写真
11月21日	のぞみ幼稚園104名見学	1月24日	2区西調査終了
11月22日	きらり幼稚園25名見学		4区掘削続き
11月30日	青い鳥幼稚園80名見学	2月1日	4区東重機掘削開始
12月5日	1区全景写真撮影	2月5日	4区全景写真撮影
12月7日	1区調査終了		3区機械掘削開始
	3区東機械掘削開始	2月20日	3区全景写真撮影
12月12日	2区機械掘削開始	2月28日	5区東端より重機掘削開始
12月13日	3区東全景写真撮影	3月1日	4区、4区東全景写真撮影
12月14日	3区東調査終了	3月2日	4区、4区東ドローン空撮
12月25日	六甲アイランド高校発掘体験実習	3月7日	4区東と5区が繋がる
12月27日	2区3/4全景写真	3月9日	4区、4区東下層確認
	残り1/4は途中まで掘削	3月20日	5区ドローンによる空撮
平成29年		3月23日	4区東と5区の境界のみ砂層まで掘り下げ
1月9日	2区残り1/4掘削		
1月10日	4区重機掘削開始	3月29日	調査終了
1月12日	2区全景写真	3月30日	現場撤収
1月15日	2区下層確認		
1月16日	2区調査終了		

第2章 調査成果

第1節 基本層序

既存建物建設以前は、当該地の大半が耕作地であったため、攢乱箇所以外については盛土直下に現代耕土が遺存する。場所によって差異があるが、現代耕土以下、洪水砂層、近世耕作土層、中世耕作土、中世遺物包含層（褐灰色砂質シルトほか）、平安時代前期遺物包含層（暗灰色シルト・黒灰色シルトほか）、遺構面ベース層の層順で、中世遺物包含層の下層（平安時代前期遺物包含層）上面が第1遺構面、平安時代前期遺物包含層下層上面が第2遺構面となる。第1遺構面として遺構が存在する箇所は2区の北半部のみで、それ以外の区域は第2遺構面（平安時代前期遺構面）のみを確認した。

2区北半部の第1遺構面は標高約1.3mであるが、第2遺構面は5区東端が約1.2m、3区東の南端が約-0.5mと調査区内で約1.7mの比高差をもつ。これは、第2遺構面の多くが湿地状地形の中に位置し、1～3区の南半部が深い湿地状の落ち込みとなっているためである。

出土した遺物は、褐灰色砂質シルト層などでは鎌倉時代前期、暗灰色シルトおよび黒灰色シルト層などでは平安時代前期が主体となるが、含まれる遺物に時期幅があるため、湿地層が堆積した年代は判然としない。

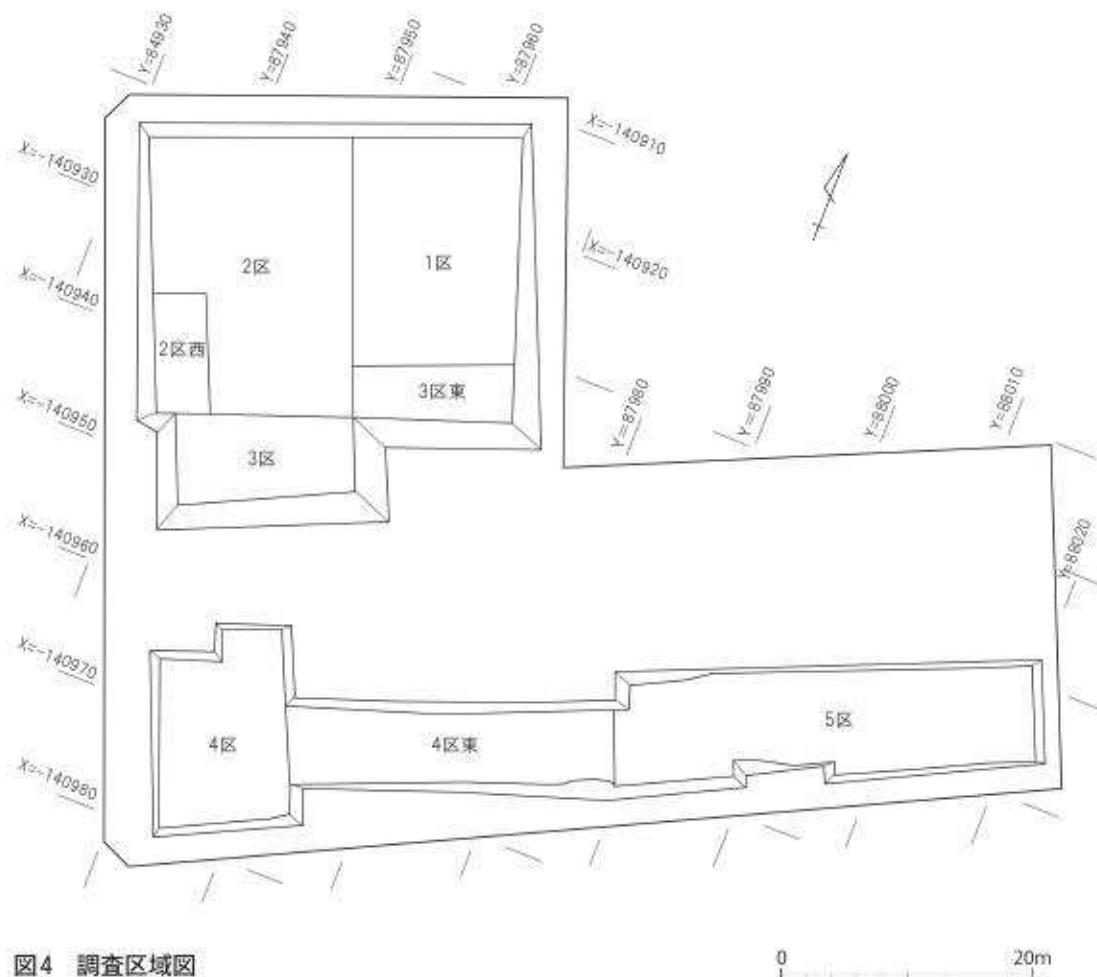


図4 調査区域図

0 20m

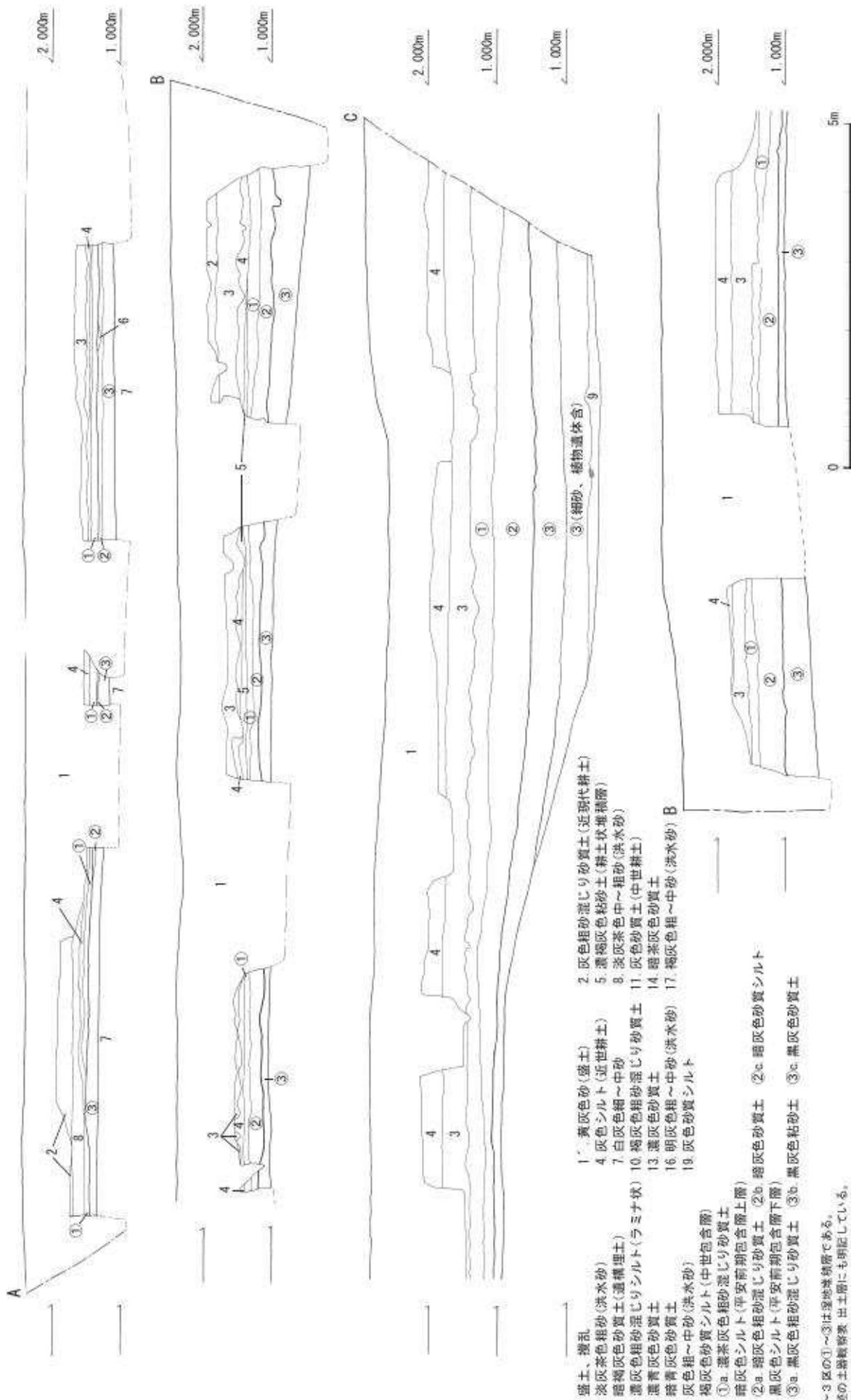


図5 調査区壁面土層断面図(1)

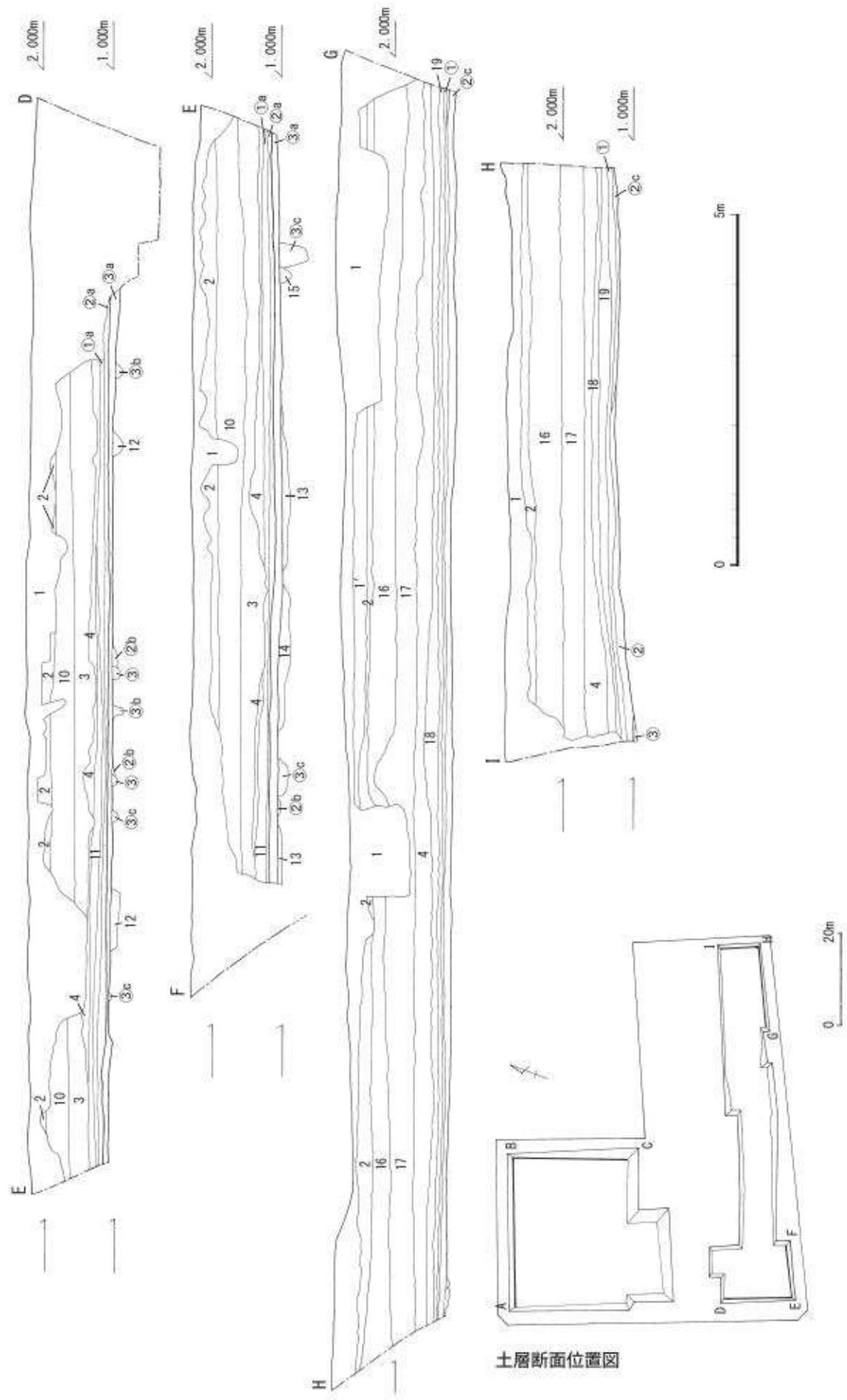


図6 調査区壁面土層断面図(2)

第2節 遺構と遺物

(1) 第1遺構面

1～3区について、第1遺構面で遺構が確認できたのは、調査区の北西端である2区北半部のみであった。2区南半部と1、3区については地形的にやや低くなり、遺構は確認できなかった。ピット数基、溝4条などが検出されたが遺構内からの遺物の出土はなく、詳細は不明であるが、遺構面直上の層位等の状況から、鎌倉時代頃と考えられる。

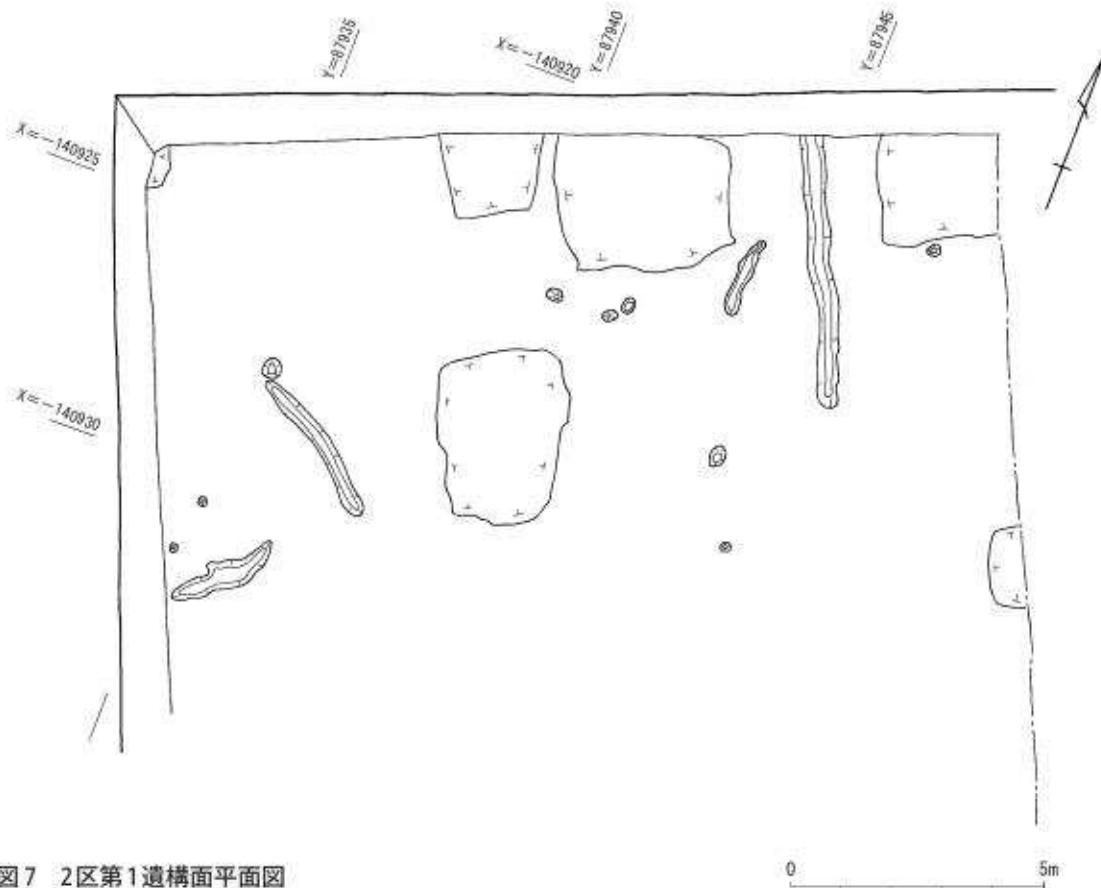


図7 2区第1遺構面平面図

0 5m

(2) 第2遺構面

1～3区については、多くの箇所が湿地層にあたり、3区東あたりが最も深くなっている。西半部において、小規模な溝、ピット、落ち込みを確認した。遺構埋土内からの遺物の出土はなく詳細は不明であるが、直上の堆積層の状況から、平安時代前期頃のものである可能性が高い。

4、5区は1～3区と比較して遺構面の標高もやや高く、比較的安定性のある微高地の浜堤層がひろがり、多くの遺構を確認した。遺構は、溝、ピット、土坑、落ち込み等で、SX401、SD402など比較的大規模なものも存在している。SK401、SP401、SP405などは遺物も含んでいたが、いずれも遺構埋土からの出土遺物は小片であるため、詳細な時期は不明である。直上の遺物包含層等の状況から、概ね平安時代前期頃のものと推察される。SK403は土坑底部に石積みがされていたため、石組み井戸と推測できるが、南半部が擾乱されており、かつ遺物の出土も少量なため断言はできない。

遺構面にあたるベース層は、5区の中央部がやや低く、全体的に南から北へ若干の下り傾斜が見られ、3区において確認した深い落ち込みに連続するものと考えられる。5区西部を下層確認のため浜堤面を掘り下げた際、黒灰色シルト層から縄文時代晚期の船橋式突帯文土器が1点出土した。

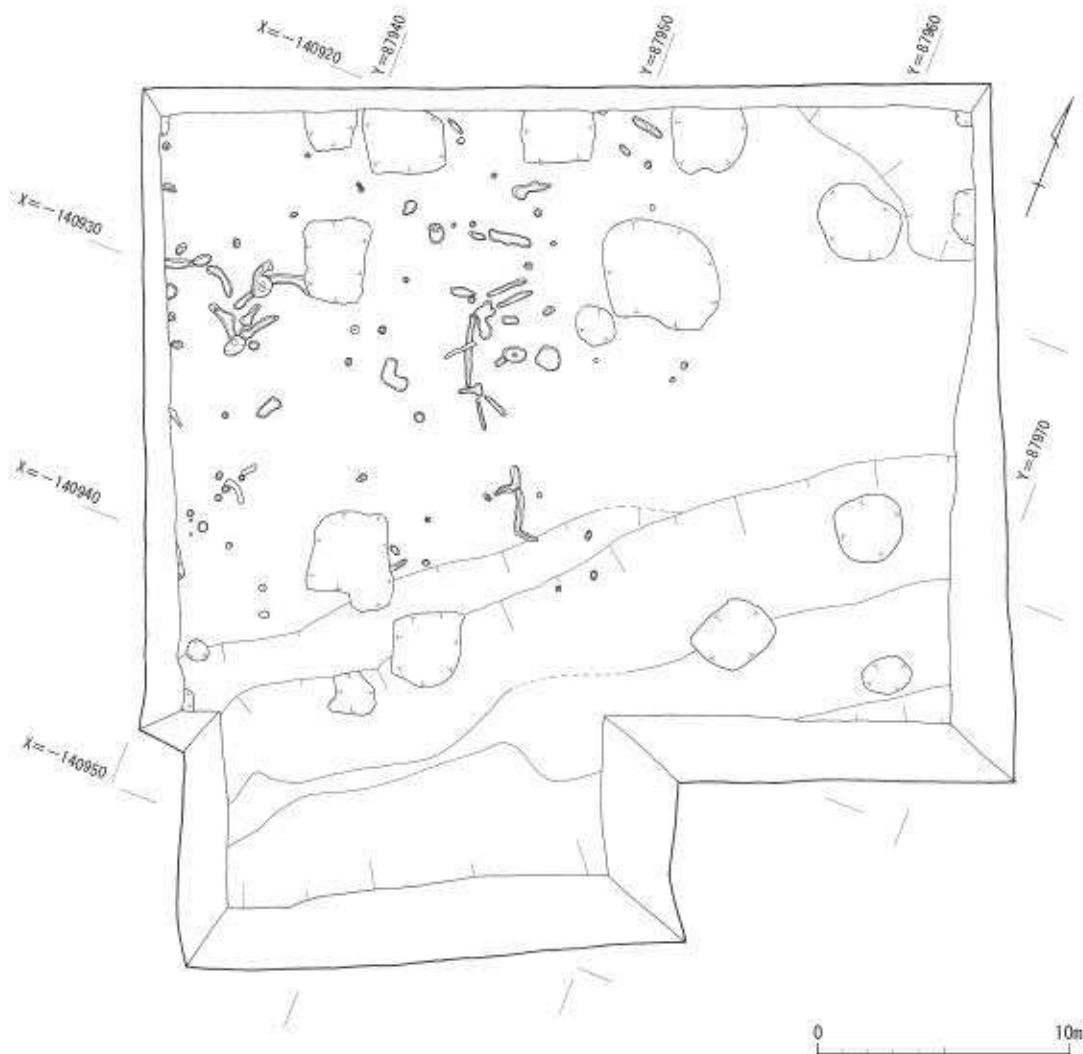


図8 1~3区第2遺構面平面図

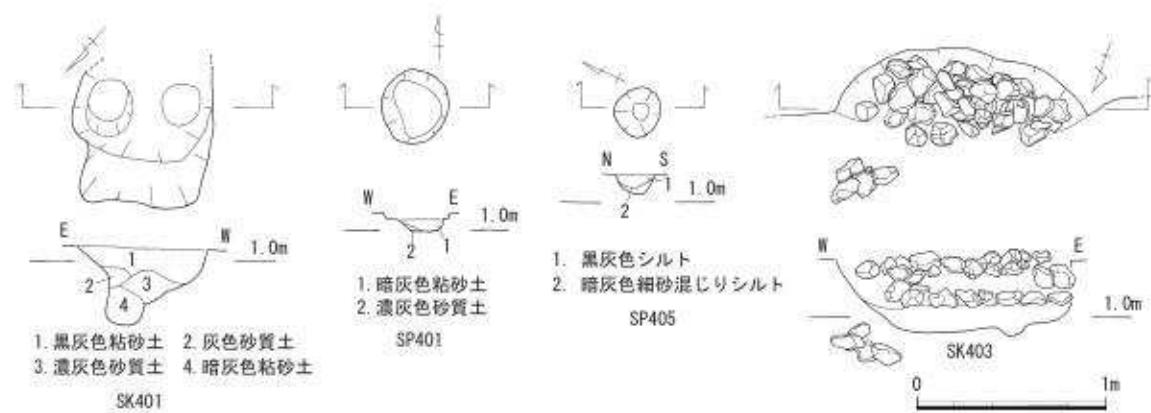


図9 4区、4区東遺構平面図・断面図



図10 4、5区第2遺構面平面図

第3節 出土遺物

縄文時代晩期～鎌倉時代の遺物を確認した。遺構からの遺物は少なく、小片のため図示し得なかった。図示できたのは全て遺物包含層からの出土である。

(1) 1～3区出土土器

1～16は弥生時代中期から古墳時代前期頃に属すると考えられる。

1は甕の口縁部から体部で、外面はハケおよびヘラナデによる調整、内面はヘラナデが施されている。2は壺の口縁部で、口縁端部外面がヨコナデにより面をもち、口縁端部を丸くおさめる。3～5は甕の口縁部で、3、4は頸部が「く」字状に屈曲して立ち上がる。3～5はいずれも口縁端部がヨコナデにより面をもつ。6～11は壺または甕の底部の破片である。6は外面に3本/cmのタタキが施されている。7は底面に凹みがある。8は外面周囲に指ナデ、底部内面にヘラナデ痕が残る。11は底部外面にヘラ磨きの痕、底部内面に指ナデが残る。12、13は壺の口縁部で、12は直線的に、13はやや外反して立ち上がり、いずれも端部を丸くおさめる。14は特殊壺の体部だと考えられる。小片のため正確な形状は不明だが3mm幅の粘土帯が6本1組で確認できる。15は壺の口縁部で、器壁が厚く、端部が内湾気味に立ち上がる。16は布留式甕の口縁部である。頸部からわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部に面をもつ。

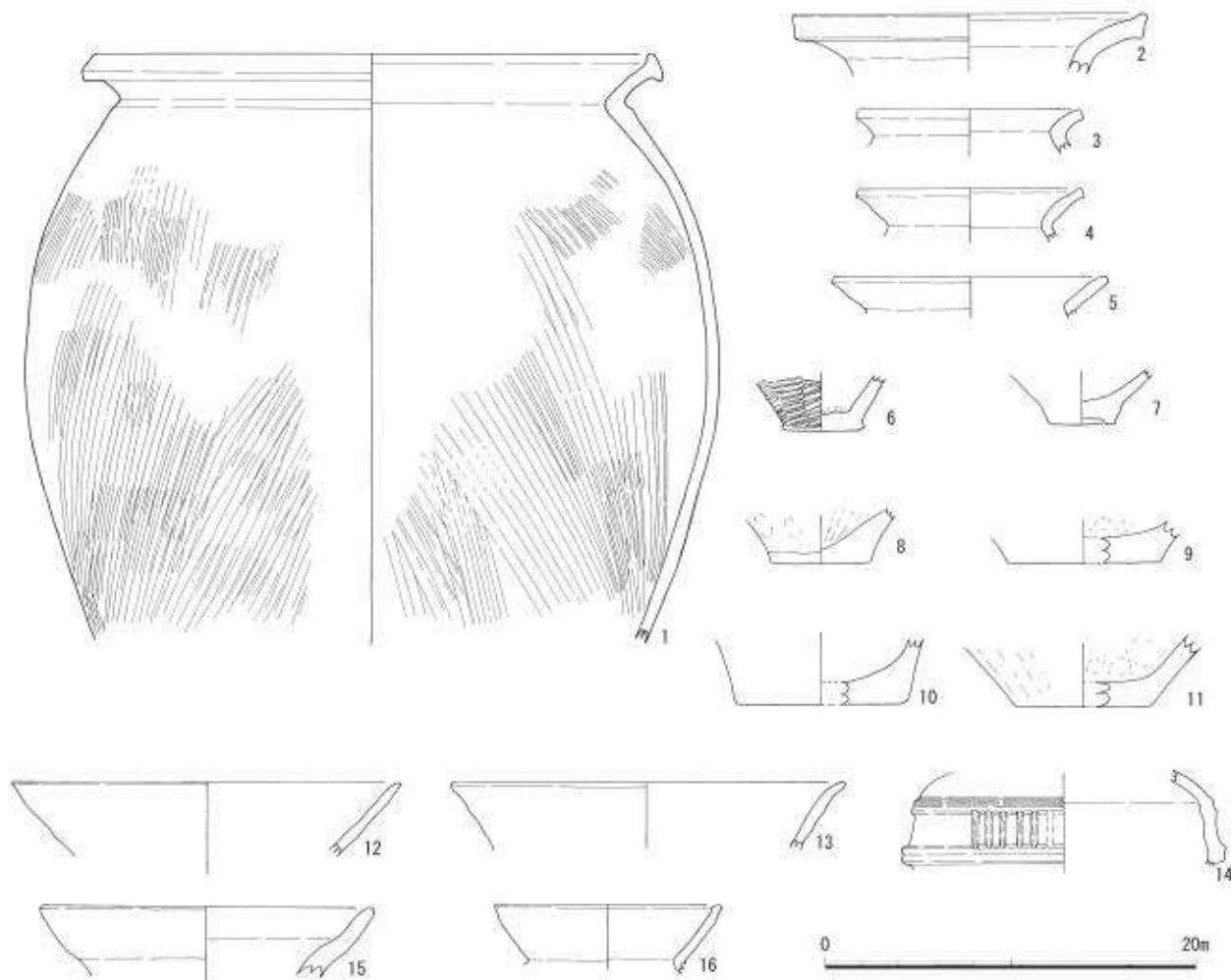


図11 1～3区出土土器 (1)

17～43は古墳時代～奈良時代に属すると考えられる。

17～38は須恵器である。17～23は杯蓋で、17は田辺昭三氏の編年によるTK23型式に併行すると考えられる。^[1]18～22は6世紀中頃から7世紀末頃に属すると考えられる。^[1]23は返りをもつタイプで、立ち上がりが短い。24～29は返りをもつ杯身である。30～37は返りをもたない杯身で、36は高台をもち、口縁端部はやや外向きに広がる。38は古墳時代の大型甕の口縁部で、頸部からゆるやかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部上位外面に櫛描波状文が2帯、肩部に4条/cmのカキ目が施され、肩部内面には青海波文が残る。39～43は土師器の坏である。39は内面に放射線状の暗文を施している。口縁端部内面には浅い沈線がめぐる。40は内面に左下がりの暗文が施されている。41は口縁部がわずかに外反する。42は底部内外面に指頭圧痕が残る。43は口縁部がわずかに外反し、内面に暗文が施されており、口縁端部内面に沈線がめぐる。

44～61は平安時代に属すると考えられる。

44～46は須恵器である。44は塊である。45は底部内面に段をもつ、底部ヘラ切りの平高台の塊である。46は京都篠窯産と考えられる鉢で、玉縁状の口縁部の形状から石井清司氏による分類の鉢Cに該当し、10世紀中頃の資料と考えられる。^[2]

47～51は土師器の坏で、52～60は高台付土師器の塊または鉢と考えられる。61は摂津型の土師器の羽釜である。体部は直線的に立ち、口縁端部近くに水平にのびる锷が付けられ、锷先端部は凹線状にくぼんでいる。

62～66は平安時代後半～鎌倉時代に属すると考えられる。

62～64は東播系須恵器である。62は塊である。体部はわずかに内湾し、口縁端部内面に面をもつ。口縁部外面に、一部自然釉が残る。63はやや小型の鉢である。体部はほぼ直線的で、口縁端部はわずかに内側に折り込まれ、上面にやや面をもつ。また、表面に重ね焼きの痕跡が残る。64は鉢の口縁部で、体部は斜めに立ち上がり、強いロクロナデにより成形されている。口縁端部外面はヨコナデにより面をもち、端部は丸くおさめる。

65は土師器で、口縁部がやや肥厚している。底部外面に回転糸切り痕を残す。66は瓦器皿で、内面に横方向の簡素なミガキが3条確認できる。炭素の吸着が安定しなかったためか、内面の一部が素地と同色である灰白色を呈している。

67、68は黒色土器である。67は両黒（B類）のタイプで、体部から口縁部にかけ、内外面に横方向の緻密なヘラ磨きが施されており、口縁端部内面に沈線がめぐる。68は内黒（A類）のタイプで、内面と口縁部外面に炭素の吸着が見られる。内面に緻密な横方向のミガキが施され、口縁端部内面に沈線がめぐる。

69は灰釉陶器の皿の底部と考えられる。高台部内外面に施釉されているが、底部内面は施釉後、釉を削り取っている。70は緑釉陶器の塊もしくは皿の底部である。削り出しの蛇の目高台をもち、全面濃暗緑色の釉で施釉されている。

71は白磁碗である。削り出しの輪高台をもち、置付は研磨により平滑に仕上げられている。高台および高台部内面を除き、内外面ともに白色の釉で施釉されている。

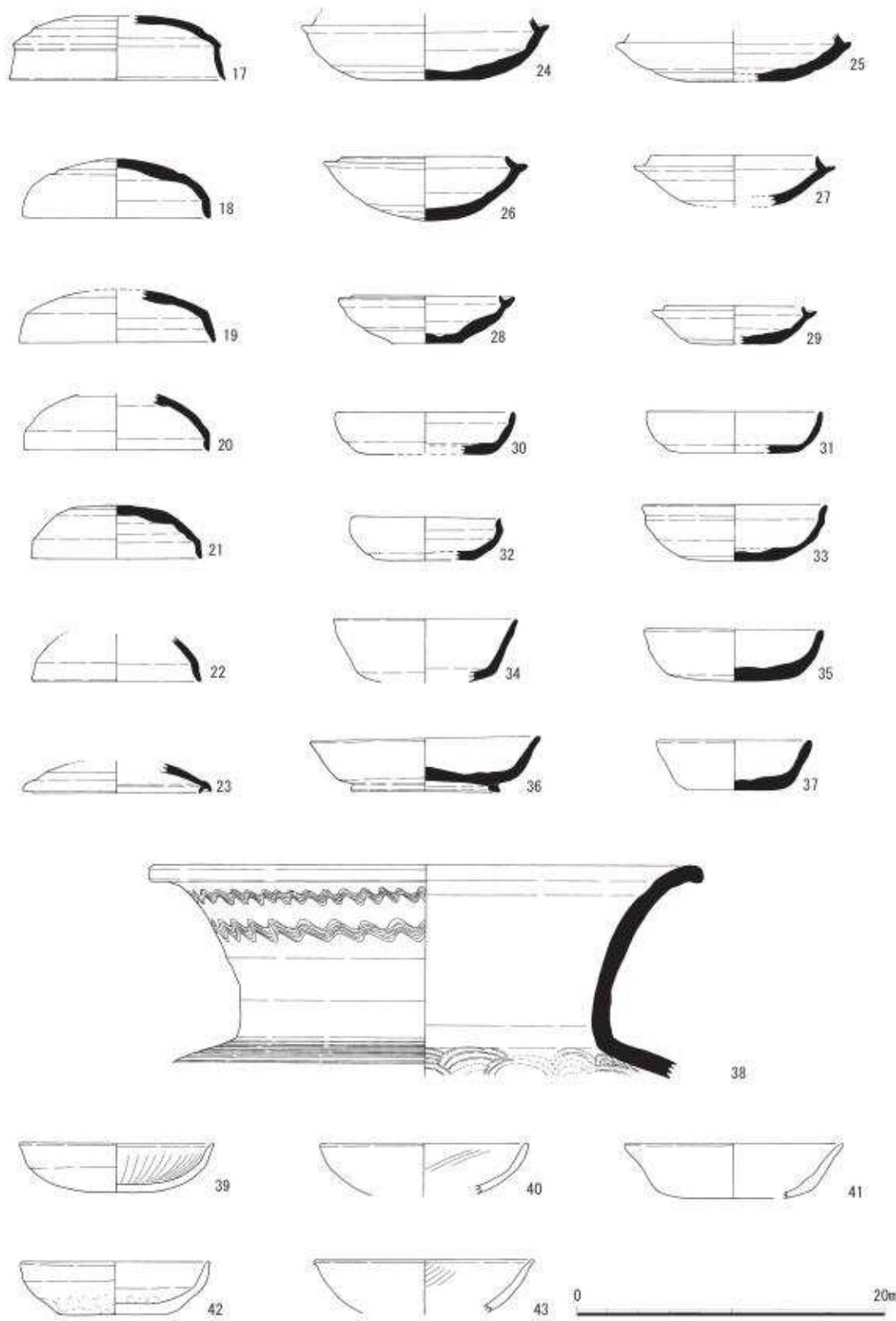


図12 1~3区出土土器 (2)

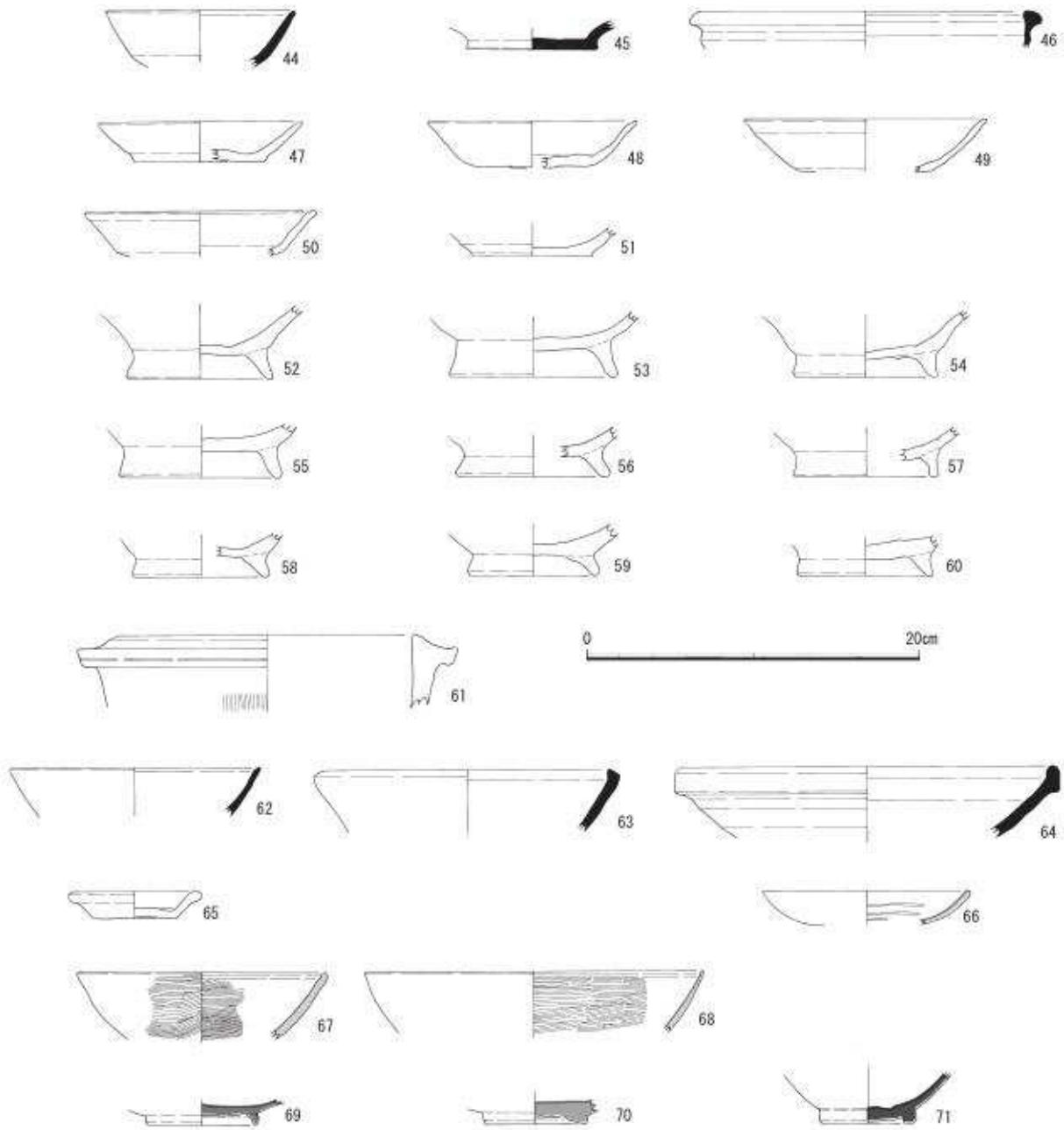


図13 1~3区出土土器 (3)

番号	出土地区	器種	出土層	法量(cm)	胎土	色調	調整	残存率	実測番号	備考
1	1区西側 北半部	弥生土器 壺	②暗灰色シルト	口径 (31.1) 体部 (37.1)	やや粗 0.5~1mm程 の白色砂粒を含む、 くさり礫もやや含む	外:茶灰色 ~茶褐色 内:明茶灰色	外:口縁部ナデ、体部全体 上位6~7本/cmのハケ、下 位縱方向の丁寧なヘラナデ 内:丁寧なヘラナデ	口縁 1/8	135	外面体部 一部黒斑
2	1区	弥生土器 壺	②暗灰色シルト	口径 (19.0)	密 0.5~2mm程の白 色砂粒を含む	外:明茶灰色 内:茶褐色	ヨコナデ	口縁 1/8	111	
3	1区	壺	②暗灰色シルト	口径 (12.0)	やや粗 0.5~2mm程 の白色砂粒を含む	灰茶白色	ヨコナデ	口縁 1/8	110	
4	1区南側	壺	②暗灰色シルト	口径 (12.2)	粗 0.5~1mm程の白 ~灰色の砂粒、くさ り礫を多く含む	茶灰色	ヨコナデ	口縁 1/6	133	
5	1区	壺	③黒灰色シルト	口径 (14.8)	0.5~1mm程の白色砂 粒を含む	明茶褐色	ヨコナデ	口縁 1/12	128	
6	1区西側 南半部	壺or甕	②暗灰色シルト	底径 (4.4)	0.5~3mmの白色砂粒 を多く含む	外:明茶褐色 内:明茶灰色	ヨコナデ 外:3本/cmのタタキ目 内:底部指オサエ	底部 2/3	101	外面一部 黒斑
7	1区南側	壺or甕	②暗灰色シルト	底径 (3.6)	0.5~4mmの白色砂粒 を含む	明茶白色	ナデ 内:底部指オサエ	底部 完形	119	
8	1区	壺or甕	②暗灰色シルト	底径 (5.4)	やや粗 0.5~1mm程 の白色砂粒を含む	茶灰色	外:ナデ、指ナデ 内:ヘラナデ	底部 1/2	105	
9	1区	壺or甕	②暗灰色シルト	底径 (8.0)	粗 1~2mm程の白~ 暗灰色砂粒を含む	茶褐色	ナデ 内:底部指オサエ	底部 1/3	106	
10	1区	壺or甕	②暗灰色シルト	底径 (9.2)	粗 1~2mmの白色砂 粒を多量に含む	明茶灰色	ナデ 摩減酷く調整詳細不明	底部 1/6	108	
11	3区	壺or甕	③黒灰色シルト	底径 (7.2)	密 0.5~3mm程の白 色砂粒を多く含む	暗灰~黒灰色	外:底部ヘラ磨き 内:底部指ナデ	底部 1/4	134	
12	1区南側	壺	②暗灰色シルト	口径 (21.5)	0.5~1mm程の白色砂 粒をやや含む	外:明茶灰色 ~暗灰色 内:明茶灰色 ~黒灰色	ヨコナデ	口縁 1/12	117	
13	1区	壺	②暗灰色シルト	口径 (21.0)	密	外:明茶灰色 内:明茶褐色	ヨコナデ	口縁 1/12	109	
14	1区西側 北半部	特殊壺	②暗灰色シルト	最大径 (17.3)	0.5mm程の白色砂粒、 雲母を含む	断面:暗茶褐色 外:灰茶白色	ヨコナデ 外:3mm幅の粘土帯が6本1 組	最大 径部 1/8	309	
15	1区	壺	②暗灰色シルト	口径 (18.0)	0.5~1mm程の白色砂 粒を含む	明茶灰色	ヨコナデ	口縁 1/12	107	
16	1区	甕	②暗灰色シルト	口径 (12.2)	密 0.5~1mm程の白 色砂粒を含む	茶褐色	ヨコナデ	口縁 1/8	102	
17	1区 1区西側 北半部 2区西側	須恵器 环蓋	①褐灰色砂質シルト ②暗灰色シルト 灰色シルト	底径 (14.0)	密 1mm以下の白色 砂粒をやや含む	明灰色	ロクロナデ 外:天井部ヘラ削り	底部 1/6	7	天井部に 別個体の 破片が付 着
18	2区 2区 1区西側 南半部	須恵器 环蓋	灰色シルト ①褐灰色砂質シルト ②暗灰色シルト	底径 (12.2) 器高3.8	密 1mm以下の白色 砂粒をやや含む	明茶灰色	ロクロナデ 外:天井部ヘラ削り 内:天井部横方向のナデ	底部 1/4	8	
19	1区	須恵器 环蓋	②暗灰色シルト	底径 (12.6)	密 1mm前後の白色 砂粒をやや含む	外:暗灰色 内:明茶灰色	ロクロナデ 外:天井部ヘラ削り	底部 1/12	6	
20	1区	須恵器 环蓋	①褐灰色砂質シルト	口径 (12.0)	密 0.5~3mmの白色 砂粒を含む	灰色	ロクロナデ 外:天井部ヘラ削り	口縁 1/6	18	
21	1区西側 南半部 2区	須恵器 环蓋	①褐灰色砂質シルト ②暗灰色シルト	底径 (11.0) 器高3.4	やや密 1mm以下の白 色、黒色砂粒を含む	明茶灰色	ロクロナデ 外:天井部ヘラ削り	全体 50%	9	
22	2区西	須恵器 环蓋	③濃褐色 砂質シルト	口径 (11.0)	密	外:明灰色 内:灰白色	ロクロナデ	口縁 1/8	21	
23	1区西側 北半部	須恵器 环蓋	②暗灰色シルト	最大径 (12.2)	密	灰白色	ロクロナデ 外:天井部ヘラ削り	底部 1/12	29	
24	1区 2区西側	須恵器 环身	灰色シルト ①褐灰色砂質シルト ②暗灰色シルト	最大径 (16.0)	密 1mm程の白色砂 粒を含む	明灰色	ロクロナデ 外:底部ヘラ削り	底部 1/4	4	
25	1区西側 北半部	須恵器 环身	②暗灰色シルト	最大径 (15.2)	密 0.5mm程の白色 砂粒を若干含む	外:暗灰色 ~灰色 内:灰色	ロクロナデ 外:底部ヘラ削り	最大 径部 1/4	26	
26	1区西側 南半部 2区 2区西側	須恵器 环身	灰色シルト ①褐灰色砂質シルト ②暗灰色シルト ③黒灰色シルト	最大径 (13.1) 器高4.1	密 0.5mm程の白色 砂粒をやや含む	明灰白色	ロクロナデ 外:底部ヘラ削り	全体 70%	17	
27	1区西側 1区南側 2区 2区東側	須恵器 环身	灰色シルト ①褐灰色砂質シルト ③黒灰色シルト	最大径 (13.0)	密 0.5mm程の白色 砂粒を含む	明茶灰色	ロクロナデ 外:底部ヘラ削り	全体 33%	24	

表2 1~3区土器観察表 (1)

番号	出土地区	器種	出土層	法量(cm)	胎土	色調	調整	残存率	実測番号	備考
28	1区西側 南半部 2区	須恵器 环身	灰色シルト ①褐色砂質シルト ②暗灰色シルト	口径 (11.4) 器高3.1	密 3~5mmの白色 砂粒をやや含む	明灰色	ロクロナデ 外:底部へラ起こし 下部へラ削り	全体 90%	12	
29	1区西側 南半部 2区西側	須恵器 环身	灰色シルト上面精査 ②暗灰色シルト	最大径 (10.6) 底径 (6.0)	密 0.5mm程の白色 砂粒を含む	灰白色	ロクロナデ 外:底部へラ削り	底部 1/3	27	
30	1区	須恵器 环身	②暗灰色シルト ③黒灰色シルト	口径 (11.6) 器高2.7	密	外:黒灰色、 灰白色 内:灰白色	ロクロナデ 外:底部へラ起こし 内:底部ナデ	全体 25%	14	
31	1区	須恵器 环身	②暗灰色シルト ③黒灰色シルト	口径 (11.4) 器高2.7	密	外:体部黒灰色 内:明茶白色 口縁黒灰色	ロクロナデ 外:底部へラ起こし	底部 1/3	28	
32	1区西側 南半部	須恵器 环身	②暗灰色シルト	底径 (9.8) 器高2.8	密 1mm以下の白色 砂粒を若干含む	灰色	ロクロナデ、一部ナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 1/6	10	
33	1区西側 南半部	須恵器 环身	②暗灰色シルト	底径 (12.0) 器高3.6	密 1mm以下の白色 砂粒をやや含む	明灰色	ロクロナデ 外:底部へラ起こし	底部 1/4	11	
34	1区 2区	須恵器 环	灰色シルト ②暗灰色シルト	口径 (11.8)	密 0.5~3mmの白色 砂粒を含む	明灰色	ロクロナデ	口縁 1/4	13	
35	1区西側 南半部	須恵器 环身	①褐色砂質シルト ②暗灰色シルト	口径 (11.6) 器高3.4	やや密 1mm程の白 色砂粒、微細な黒の 砂粒を含む	明灰色	ロクロナデ 外:底部へラ起こし	全体 70%	3	
36	1区西側 南半部 西端 南端	須恵器 环身	②暗灰色シルト ③黒灰色シルト	口径 (14.9) 底径 (9.6) 器高3.5	密 0.5mm~2mmの白 色砂粒をやや含む	外:暗灰色 内:明灰色	ロクロナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 2/3	16	
37	1区	須恵器 环身	②暗灰色シルト ③黒灰色シルト	口径 (10.0) 底径 (5.4) 器高3.2	密 1mm前後の白色 砂粒を含む	明灰色	ロクロナデ 外:底部へラ切り	底部 1/4	5	
38	1区西側 南半部 1区南端 2区 2区西	須恵器 壺	灰色シルト ①濃褐色砂質シルト ②褐色砂質シルト ③暗灰色シルト	口径 (36.0)	1mm前後の白色砂粒、 2mm程の白、灰色の 礫を含む	明灰色	外:口縁上部に6条2帯の 横描波状文肩部外面に4条 /1cmのカキ目内面に青海波 文	口縁 1/4	15	
39	1区	土師器 环	②暗灰色シルト	口径 (12.5)	密 0.5mm程の白色 砂粒を含む	外:茶褐色 内:明茶白色	ヨコナデ 内:口縁部に沈線 幅約6mmの暗文 丁寧なナデ	口縁 1/12	114	
40	1区西側 南半部	土師器 壺	②暗灰色シルト	口径 (13.4)	やや粗	灰茶色~暗灰色	ヨコナデ 内:暗文	口縁 1/8	125	
41	1区	土師器 环	②暗灰色シルト	口径 (14.0)	密 0.5mm程の白色 砂粒をやや含む	外:明茶白色 内:明茶色	ヨコナデ	口縁 1/8	113	
42	1区	土師器 环	②暗灰色シルト ③黒灰色シルト	口径 (12.2)	0.5~1mm程の白色砂 粒を含む	明茶灰色	ヨコナデ 内外:底部指ナデ 不明瞭な暗文	口縁 1/8	115	
43	1区	土師器 壺	①褐色砂質シルト ②暗灰色シルト	口径 (14.1)	密 0.5mm程の白色 砂粒を含む	茶灰色	ヨコナデ 内:口縁部に沈線、暗文	口縁 1/6	112	
44	3区	須恵器 壺	①褐色砂質シルト	口径 (11.5)	密 0.5~1mm程の白 色砂粒を含む	灰白色	ロクロナデ	口縁 1/12	30	
45	2区	須恵器 壺	①濃褐色砂質シルト	底径 (7.8)	密 0.5~1mmの白色 砂粒を含む	灰色	ロクロナデ 平高台 外:底部へラ切り	底部 1/4	22	
46	1区 2区西側	須恵器 环	灰色シルト ①褐色砂質シルト	口径 (21.0)	密	灰色	ロクロナデ	口縁 1/12	20	織窓座?
47	1区南側	土師器 环	②暗灰色シルト	口径 (12.2) 底径 (7.8)	0.5~1mm程の白色砂 粒を含む	明茶灰色	ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 1/5	123	
48	1区南側 2区	土師器 环	灰色シルト ①褐色砂質シルト ②暗灰色シルト	口径 (12.6) 底径 (7.0)	0.5~1mm程の白色砂 粒を含む	外:明灰色 内:明橙灰色	ヨコナデ 外:底部へラ切り	底部 1/12	122	
49	1区西側 北半部 2区 2区東側	土師器 环	灰色シルト ①褐色砂質シルト ②暗灰色シルト	口径 (14.6) 器高 (2.6)	0.5~4mmの白色砂粒 を多く含む	明橙茶色	ヨコナデ 外:底部へラ切り	口縁 1/8	103	

表3 1~3区土器観察表(2)

番号	出土地区	器種	出土層	法量(cm)	胎土	色調	調整	残存率	実測番号	備考
50	1区南側	土師器 壺	①褐色砂質シルト	口径 (14.0)	密 0.5mm 程の白色 砂粒を含む	明茶白色	ヨコナデ	口縁 1/4	120	
51	1区南側	土師器 壺or皿	②暗灰色シルト	底径 (7.2)	0.5~3mmの白色砂粒 を含む	明茶白色	ヨコナデ 外:底部へラ切り	底部 1/4	118	
52	1区	土師器 高台付 壺or鉢	②暗灰色シルト	底径 (8.8)	やや粗 0.5~2mm程 の灰、白色砂粒を多 く含む	橙茶色	回転ナデ、ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	全体 50%	360	
53	3区東	土師器 高台付 壺or鉢	②暗灰色シルト	底径 (10.0)	密 0.5mm 程の白色 砂粒を含む、くさり 礫を多量に含む	明茶白色 ~明赤茶白色	回転ナデ、ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 ほぼ 完形	351	
54	1区	土師器 高台付 壺or鉢	①褐色砂質シルト	底径 (8.6)	密 0.5mm 程の白色 砂粒を含む 0.5mm 程のくさり礫を若干 含む	明茶白色	回転ナデ、ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 3/4	354	
55	1区西端 南半部	土師器 高台付 壺or鉢	②暗灰色シルト	底径 (9.8)	密 0.5mm 程の白色 砂粒を含む 1~3mm のくさり礫を多く含 む	明茶白色 ~明赤茶白色	ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 1/12	352	
56	2区	土師器 高台付 壺or鉢	①褐色砂質シルト	底径 (9.2)	粗 0.5~1mm程の白 色砂粒、0.5~5mmの くさり礫を含む	明灰茶色 底面一部黒灰	回転ナデ、ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 1/3	361	
57	1区西側 南半部	土師器 高台付 壺or鉢	①褐色砂質シルト ②暗灰色シルト	底径 (8.6)	密 0.5mm 程の白色 砂粒、くさり礫を若 干含む	明茶白色	回転ナデ、ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 1/8	355	
58	1区	土師器 高台付 壺or鉢	①褐色砂質シルト	底径 (8.2)	密 0.5~1mm程の白 色砂粒、くさり礫を やや含む	灰白色	回転ナデ、ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 1/3	358	
59	1区南端	土師器 高台付 壺or鉢	②暗灰色シルト	底径 (7.8)	密 0.5mm 程の白色 砂粒を含む 0.5~4 mmのくさり礫をやや 含む	明茶白色	回転ナデ、ヨコナデ 外:底部へラ切り後未調整	底部 1/4	353	
60	1区西端 南半部	土師器 高台付 壺or鉢	②暗灰色シルト	底径 (8.1)	やや粗 0.5mm 程の 白色砂粒、くさり礫 を含む	外:茶灰色 内:茶褐色	回転ナデ、ヨコナデ 外:底部へラ切り後ナデ	底部 ほぼ 完形	357	
61	2区	土師器 羽釜	③褐色砂質シルト	最大径 (22.8)	粗 0.5~1mm程の白 色砂粒、くさり礫を 含む	茶褐色	ヨコナデ 外:8本/cmのハケ目	口縁 1/8	132	
62	1区南側	東播系 須恵器 壺	④褐色砂質シルト	口径 (15.2)	密	外:明灰~灰色 内:灰色	ロクロナデ 外:口縁部外面一部自然釉	口縁 1/12	31	
63	1区南側	東播系 須恵器 小型鉢	①褐色砂質シルト	口径 (18.4)	やや粗 0.5mm 程の 白色砂粒を含む	口縁部付近:灰 色 その他:明褐色	ロクロナデ	口縁 1/12	32	外面に重 ね焼いた 痕跡
64	1区南側	東播系 須恵器 鉢	①褐色砂質シルト	最大径 (23.0)	密 0.5~4mmの白色 砂粒を含む	口縁表面のみ暗 灰色 他灰色	ロクロナデ	口縁 1/12	25	
65	1区 1区南側	土師器 皿	①褐色砂質シルト	口径 (8.0)	密	乳白色	ヨコナデ 外:底部回転糸切り	底部 1/4	130	
66	3区	瓦器 皿	③褐色砂質シルト	口径 (12.4)	やや粗 0.5~1mmの 白色砂粒、3mmの細礫 を含む	断面灰白色 黒灰色 内面一部灰白色	ヨコナデ 内:簡素なヘラ磨き	口縁 1/12	302	
67	1区	黑色土器 壺	②暗灰色シルト	口径 (15.0)	密	黒灰色 断面灰色	内外:ヨコナデ後緻密なヘ ラ磨き 内:口縁部に沈線	口縁 1/12	303	内黒
68	1区西側 南半部	黑色土器 壺	②暗灰色シルト	口径 (20.2)	やや粗 0.5~2mmの 白色砂粒を含む	外:茶褐色内面 外面部口縁部黒灰色	内:緻密なヘラ磨き 口縁部に沈線	口縁 1/8	301	内黒
69	1区南	灰釉陶器 壺or皿	②暗灰色シルト	底径 (6.6)	密	素地:明灰色 釉色:灰緑色	ロクロナデ 張り付け高台 高台外面と内面に施釉、底 部内面は施釉後削り取り 外:底部へラ切り	底部 4/5	2	
70	1区	綠釉陶器 壺or皿	②暗灰色シルト	底径 6.0	密	素地:明茶灰色 釉色:濃暗緑色	ロクロナデ 削り出し蛇の目高台 全体に施釉	底部 完形	1	
71	1区南側	白磁碗	①褐色砂質シルト	底径 (5.8)	密	素地:灰色 釉色:灰白色	ロクロナデ 裏胎の削り出し輪高台	底部 1/12	33	

表4 1~3区土器観察表(3)

(2) 4、5区出土土器

72は縄文時代晚期、船橋式と考えられる突帯文土器で、5区西部第2遺構面下層より出土している。(第2節(2)参照)突帯は口縁端部から少し下った位置に上下両側から摘むようにして貼り付けられており、突帯上の刻目は5mmから7mmの横O型で施されている。

73～95は奈良時代～平安時代に属すると考えられる。

73、74は須恵器の壺蓋で、天井部はヘラ削りを施し、器高は低い。口縁端部はほぼ直角に折り曲げて端面をつくる。73は天井部がやや丸く、74は平坦につくられ、段状に屈曲した口縁をもつ。

75、76、77は高台をもつ須恵器の壺である。いずれも底部ヘラ切り後、高台を底部の端部に貼り付けている。76は斜めにまっすぐのびる体部をもち、底面が中央部で接地する。

78、79、80は須恵器の甕である。78は大型甕の頸部から口縁部の破片である。頸部は体部からまっすぐに立ち上がり、口縁部内側はナデによりやや外反させる。肩部内面は同心円文タタキの後、ナデが施されている。79は頸部からくの字状に屈曲し、口縁端部に面をもつ。口縁部外面には右下がりの、内面には縦状のヘラ書き痕が確認できる。頸部の屈曲部にも痕が確認できることから、ヘラ書き後、口縁部を折り曲げて成形されたと考えられる。80はわずかに残存している肩部外面に自然釉が見られ、頸部内面に指オサエ痕が残る。

81～91は須恵器の壺である。81～83は口縁部片で、いずれも大きく外に開いた口縁の端部を上につまみあげている。81は口縁部下位に6条/cmのカキ目が施されている。84～88は壺の底部片で、84～86はやや外側に踏ん張る高台部を、87はまっすぐにおりる高台部をもつ。84、86はやや内湾しながら立ち上がる体部を、85、87は直線的な体部をもつ。88は体部がゆるやかなS字状に立ち上がる。89は壺の体部から頸部と考えられる。肩部に断面三角形の突帯をめぐらせ、その上から耳を貼り付ける。耳は板状にした粘土紐の両側面を指で挟んで体部に接着させ、上下端に指オサエ、指ナデを施す。相生窯で見られる壺に近い形状をもつが、頸部から先を欠いているため詳細は不明である。91は壺の底部と考えられ、表面に自然釉状の釉の付着が見られるが、遺存が悪い。施釉陶器の可能性も考えられるが、詳細は不明である。

92、93は高台付土師器の底部である。塊または鉢と考えられるが、口縁部から体部が欠損しており、不明である。92が逆台形、93が三角形の断面をもつ。

94、95はともに糸切りの平高台で、底部内面に段をもつ。94の体部は丸く立ち上がり、高台は外側へ踏ん張りをみせる。95の体部は斜めにまっすぐ立ちあがる。94は壺と考えられるが、95は不明である。

96、97は黒色土器である。96は表面が摩滅した両黒の黒色土器と考えられる。器種は貼り付け高台をもつ塊である。97は外黒の黒色土器の口縁部片である。外面と口唇部内面に炭素の吸着が見られる。外面は緻密な横方向のヘラ磨きが施されている。

98、99は施釉陶器である。98は灰釉陶器の段皿と考えられる。内外面に段を有し、内面のみ光沢のある薄緑色の釉をハケヌリしていると考えられる。

99は緑釉陶器の皿の底部と考えられる。削り出し輪高台をもつ。ほとんど摩滅しているが底部外面にも施釉の痕跡が確認できる。

その他、碎片のため図化できなかったが、製塩土器の小片が15点出土している。

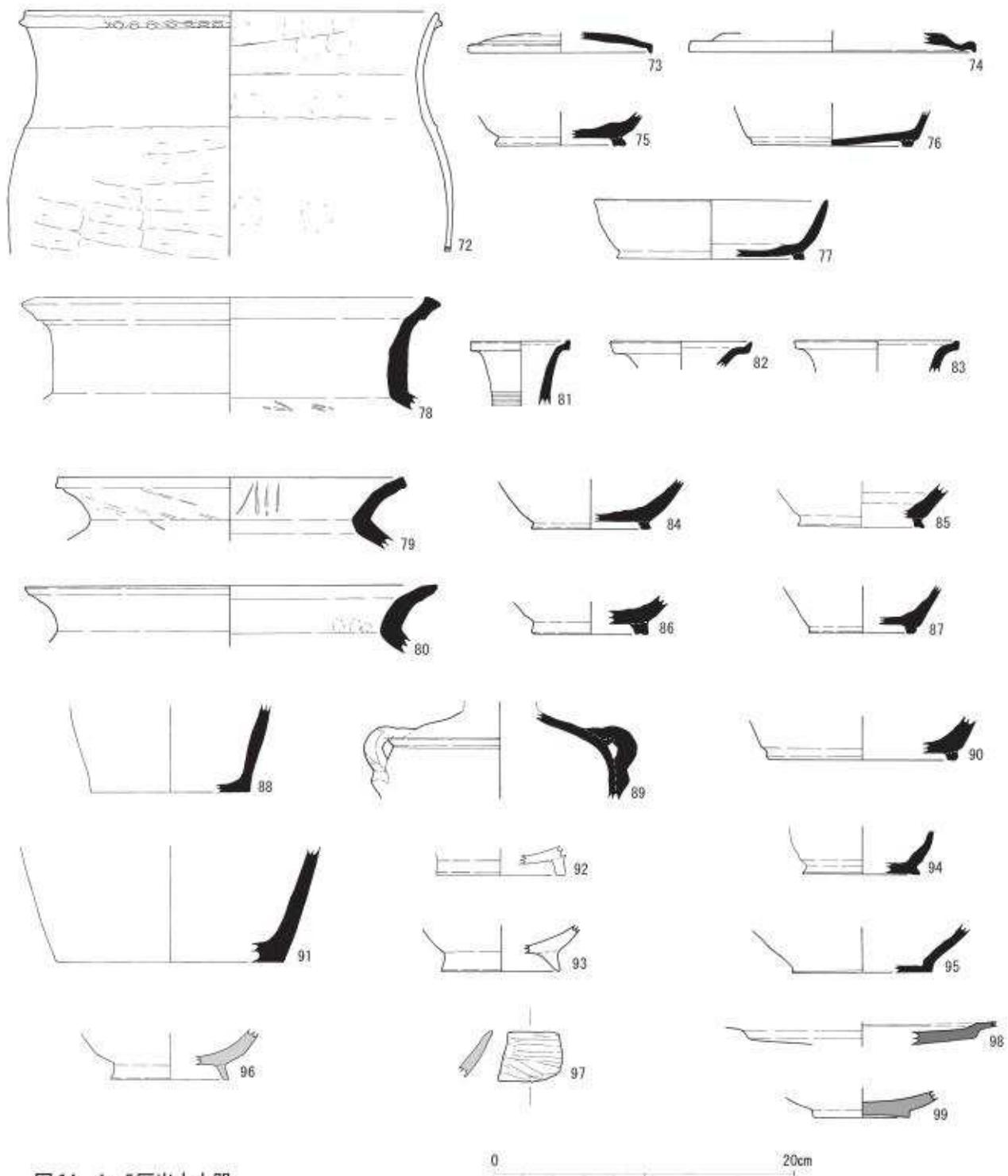


図14 4、5区出土土器

番号	出土地区	器種	出土層	法量(m)	胎土	色調	調整	残存率	実測番号	備考
72	5区 西端	縄文土器 深鉢	黒灰色シルト (浜堤断ち割り内)	最大径 (28.2)	粗 0.5~1mmの白色砂粒、微量の雲母を含む	暗茶~暗茶褐色	外: 口縁部に接した位置に断面下さがり三角形の突帯1条、刻目横O形(5mm~7mm)。体部はナデにより段状に仕上げ、下部はヘラ削り 内: 口縁部付近ユビオサエ、体部ナデ	口縁 1/12	400	
73	4区	須恵器 壺蓋	黒灰色シルト	口縁 (12.2)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ 外: 天井部ヘラ削り	口縁 1/8	55	
74	4区	須恵器 壺蓋	濃褐灰色 砂質シルト	口縁 (19.0)	密 0.5mm程の白色砂粒を微量に含む	灰色	ロクロナデ 外: 天井部ヘラ削り	底部 1/16	56	
75	4区	須恵器 壺	黒灰色シルト	底径 (8.6)	密 0.5~1mm程の白色砂粒、くさり織を微量に含む	灰色	ロクロナデ内: 底部ロクロナデ後一方向のナデ 外: 底部ヘラ切り後ナデ	底部 1/6	34	
76	5区	須恵器 壺	黒灰色シルト	底径 (10.5)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ 内: 底部ロクロナデの後ナデ 外: 高台貼り付け後回転ナデ 底部ヘラ切り痕ナデ	底部 1/5	41	
77	5区	須恵器 壺	黒灰色シルト	口縁 (15.4) 底径 (12.4)	密 0.5mmの白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ	底部 1/4	43	
78	5区	須恵器 壺	黒灰色シルト	最大径 (28.0)	密 0.5~1mm程の白色砂粒を微量に含む	灰色 ~暗灰色	ロクロナデ 内: 脊部同心円文タタキの後ナデ	口縁 1/6	44	
79	5区	須恵器 壺	黒灰色シルト	底径 (23.0)	密 0.5~1mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ ヘラ状工具で下から上に書いた線状の跡	口縁 1/12	42	
80	4区東	須恵器 壺	黒灰色粗砂 混じり砂質土	口径 (27.2)	密	灰色	ロクロナデ 内: 頸部に指頭圧痕	口縁 1/8	36	外面肩部 に自然釉
81	4区	須恵器 壺	黒灰色シルト	口縁 (6.6)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	灰色	外: ロクロナデ 頸部下部6条/cmのカギ目	口縁 1/4	53	
82	4区	須恵器 壺	黒灰色シルト	口縁 (9.4)	密 0.5~1mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ	口縁 1/8	51	
83	4区	須恵器 壺	黒灰色シルト	口縁 (11.0)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	暗灰色 ~灰色 断面セビア色	ロクロナデ	口縁 1/8	52	
84	5区	須恵器 壺	褐灰色粗砂 混じり砂質土	底径 (7.8)	密 0.5mm程の白色砂粒をやや含む	灰色	ロクロナデ外: 体部下部ヘラ削り、貼付高台後ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	底部 1/3	37	
85	4区	須恵器 壺	黒灰色シルト	底径 (8.4)	密	白灰色	ロクロナデ	底部 1/8	35	
86	4区	須恵器 壺	黒灰色シルト	底径 (7.6)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ 外: 底部ヘラ切り、貼り付け高台	底部 1/4	54	
87	5区	須恵器 壺	褐灰色粗砂 混じり砂質土	底径 (7.0)	密 0.5mm程の白色砂粒を微量に含む	灰白色	ロクロナデ 底部の調整は摩滅して不明	口縁 1/4	38	
88	4区	須恵器 壺	黒灰色シルト	底径 (10.6)	密 0.5~3mm程の白~灰色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ 外: 底部ヘラ削り	底部 1/6	46	
89	4区東 5区	須恵器 壺	暗灰色粗砂 混じり砂質土 暗灰色シルト	最大径 (18.0)	密 0.5~1mm程の白色砂粒を含む	灰色	体部ロクロナデ 耳はユビオサエで取り付ける	突帯 1/8	57	
90	5区	須恵器 壺	褐灰色粗砂 混じり砂質土	底径 (12.3)	粗 0.5~1mm程の白色砂粒を含む	明灰色	ロクロナデ 外: 底部ヘラ切り後ナデ	底部 1/6	39	
91	4区	須恵器 壺	濃褐灰色砂質シルト	底径 (15.2)	密 0.5~2mm程の白色砂粒を含む	灰白色	ロクロナデ 外: 底部ヘラ切り 表面と底に暗緑色の自然釉?がやや残存	底部 1/8	45	
92	5区	土師器 高台付塊or鉢	褐灰色粗砂 混じり砂質土	底径 (8.6)	0.5~2mm程の白色砂粒、くさり織を含む	灰茶白色	摩滅し、調整不明	底部 1/4	364	
93	4区東	土師器 高台付塊or鉢	黒灰色粗砂 混じり砂質土	底径 (7.8)	0.5~2mmの白色砂粒、くさり織を含む	灰茶白色	摩滅し、調整不明	底部 1/4	363	
94	4区	須恵器 壺	黒灰色シルト	底径 (7.8)	密 0.5~1mm程の白色砂粒を含む	灰白色	ロクロナデ 外: 回転糸切り未調整	底部 1/3	47	
95	4区	須恵器 壺or壺	黒灰色シルト	底径 (9.2)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ 外: 回転糸切り未調整	底部 1/5	48	
96	5区	黒色 土器	黒灰色シルト	底径 (7.8)	密 1mm程の白色砂粒、くさり織を若干含む	茶灰色	ヨコナデ 外: ほとんど摩滅 内: 黒色がやや残存	底部 1/6	307	黒色土器 の表面が 摩滅?
97	5区	黒色土器 壺	黒灰色シルト	口縁 (16.6)	密	外: 黒灰色 内: 茶褐色~茶灰色	ヨコナデ 外内: 繖密なヘラ磨き	口縁 1/24	306	外黒
98	5区	灰釉陶器 段皿	褐灰色粗砂 混じり砂質土	底径 (15.0)	密	素地: 灰白色 釉色: 淡緑色	ロクロナデ 内: 口縁部に沈線 外: 底部ヘラ削り後ナデ、表面と体部表面の一部に淡緑色の釉	口縁 1/5	49	
99	4区 4区東	绿釉陶器 皿	黒灰色シルト 黒灰色粗砂 混じり砂質土	底径 (6.4)	密	素地: 灰色 釉色: 暗緑灰色	ロクロナデ 外: 削り出し高台	底部 1/2	308	内面の釉 薬が摩滅

表5 4、5区土器観察表

(3) 転用硯・墨書土器

4区、4区東、5区から出土した。100～102、105、106、112が墨書土器、103、104、107～111が転用硯である。

100は土師器の坏または塊の口縁部の破片である。外面に文字のような筆跡が確認できるが、判読できない。

101は須恵器の坏蓋の小片である。内面に文字の一部のような筆跡が確認できるが、判読できない。

102は須恵器の坏の底部である。体部外面に試し書きのような墨跡が1条、底部と体部内面に薄い墨跡が2条残る。

103は須恵器の坏である。体部内面に墨跡が残る。

104は須恵器の坏の底部である。内面と外面に墨跡が残る。

105は須恵器の小片である。焼成が悪く、器種不明。試し書きのような墨跡が残る。

106は須恵器の坏蓋である。内面に文字の一部か試し書きのような墨跡が残る。

107は須恵器の坏蓋の小片である。内面に墨跡が残る。

108は須恵器の坏である。底部内面に墨の痕跡がみられる。

109は須恵器の坏の底部である。底部内面に墨跡が残る。

110は須恵器の坏蓋である。内面に墨跡が残る。

111は須恵器の甕の体部である。内面は同心円文叩きが施されているが、中央部は擦痕による摩滅が見られ、墨跡が残る。

112は須恵器の坏である。高台内部に試し書きのような墨跡が残る。

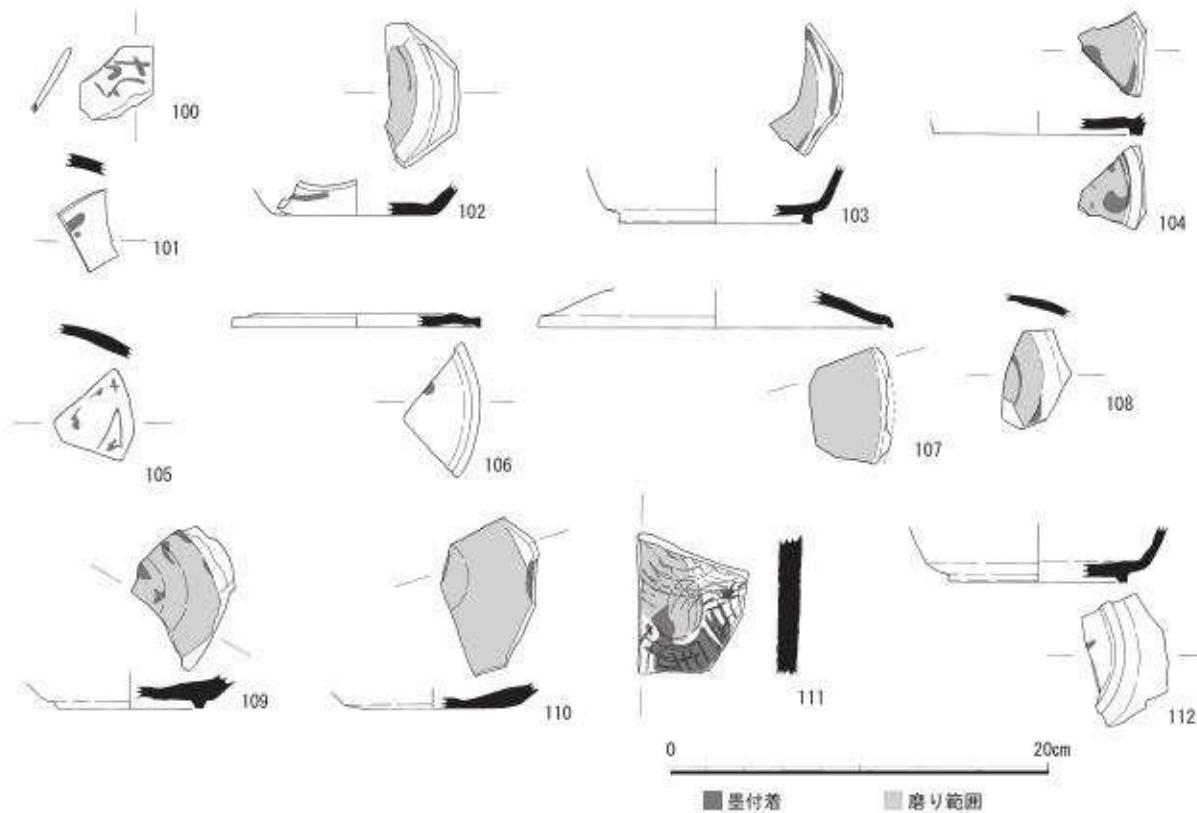


図15 4、5区出土墨書土器・転用硯

番号	出土地区	種類	器種	出土層	法量(cm)	胎土	色調	調整	残存率	実測番号
100	4区	墨書き土器	土師器	SX401直上 黒灰色シルト	—	密 0.5~1mmの白色砂粒を含む	明灰白色	ナデ	—	504
101	4区	帳用硯	須恵器 杯蓋	黒灰色シルト	—	密 0.5~1mmの白色砂粒を含む	明灰色	ロクロナデ	—	501
102	4区	墨書き土器	須恵器 杯身	黒灰色シルト	底径 (8.2)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	明灰色	ロクロナデ 外:底部へラ切り	底部 1/4	502
103	5区	帳用硯	須恵器 杯身	暗灰色シルト	底径 (10.2)	密	明灰色	ロクロナデ 外:底部へラ切り	底部 1/12	510
104	5区	帳用硯	須恵器 杯身	暗灰色シルト	底径 (11.0)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ 外:底部へラ切り	底部 1/8	512
105	4区東	墨書き土器	土師器	灰色砂質土	—	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	明灰白色	ナデ	—	506
106	4区東	墨書き土器	須恵器 杯蓋	灰色砂質土	底径 (13.2)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ	底部 1/6	505
107	4区東	帳用硯	須恵器 杯蓋	灰色砂質土	底径 (18.8)	密	灰茶白色	ロクロナデ	底部 1/12	509
108	4区	帳用硯	須恵器 杯蓋	黒灰色シルト	—	密 断面セビア色	明灰色	ロクロナデ	—	513
109	4区	帳用硯	須恵器 杯身	黒灰色シルト	底径 (7.8)	密 1mm程の白色砂粒を含む	明茶灰色	ロクロナデ	底部 1/4	511
110	4区東	帳用硯	須恵器 杯	暗灰色粗砂 混じり砂質土	底径 (9.6)	密	明茶灰色	ロクロナデ 外:底部へラ削り	—	507
111	4区東	帳用硯	須恵器 甕体部	黒灰色粗砂 混じり砂質土	—	密	外:明灰色 内:灰色	ロクロナデ 内:同心円状のタタキ	—	508
112	4区	墨書き土器	須恵器 杯身	黒灰色シルト	底径 (9.4)	密 0.5mm程の白色砂粒を含む	灰色	ロクロナデ	底部 1/5	503

表6 4、5区墨書き土器・転用硯観察表

(4) 漁撈具

管状土錘61点、棒状土錘19点、有溝土錘19点、飯蛸壺3点出土している。うち比較的残存率の高いものについて図化した。なお、土錘の分類については、真鍋篤行氏の分類（1993 真鍋）に準じた。

土錘は全て土師質である。**113～143**は胴部の中央がふくらむ形状の管状土錘（A I a類）で、**113、121、134**などは一部欠損がみられるが、他は使用による表面の摩滅や先端部の軽微な欠損があるものの、ほぼ完形に近い。**144、145**は釣鐘型の飯蛸壺で、**144**は土師質、**145**は須恵質で、ともに下半部を欠損する。**144**は上方に開けられた網通しの孔が擦れて酷く摩滅している。**146**は円筒状の管状土錘（A II b類）である。出土した管状土錘のうち、この形状のものは1点のみである。**147～150**は両端に紐通しの穴を有する棒状土錘（Ba類）で、**147、148**は完形だが、**149、150**は紐通しの穴の部分を欠く。**151～160**は紡錘形で、側面に溝を設ける有溝土錘（Ca類）で、長さは6.4～7.5cmを測る。**158**は一部欠損しており、他は使用による表面や溝の摩滅があるものの、ほぼ完形に近い。

いずれも遺物包含層からの出土であるため、時期の詳細は不明である。出土した土錘の種類では、A I a類の管状土錘が多数を占め、微高地である4、5区からの出土が多い。A I a類は刺網、投網に、Ba類Ca類は刺網に、A II b類は地曳網、船曳網などの袋網系で使用されたと考えられている。

番号	出土地区	出土層	種類	分類	残存長(cm)	最大幅(cm)	残存重量(g)	孔径、溝幅(cm)	実測番号
113	1区南側	①褐色砂質シルト	管状土錐	A I a	(4.0)	(1.3)	(6.00)	0.4	205
114	1区南側	②褐色砂質シルト	"	A I a	4.7	1.1	5.72	0.4	208
115	1区西側	③褐色砂質シルト	"	A I a	3.6	1.1	4.48	0.3	206
116	2区	④褐色砂質シルト	"	A I a	5.2	1.3	7.14	0.3	216
117	2区	⑤褐色砂質シルト	"	A I a	5.3	1.3	6.60	0.3	213
118	2区	⑥褐色砂質シルト	"	A I a	5.7	1.1	8.25	0.3	214
119	2区	⑦褐色砂質シルト	"	A I a	5.4	1.3	7.41	0.3	217
120	2区西	⑧濃褐色砂質シルト	"	A I a	6.0	1.5	9.11	0.35	220
121	3区	灰色シルト	"	A I a	(4.0)	(1.2)	(4.97)	0.35	228
122	1区西側南半部	⑨暗灰色シルト	"	A I a	3.1	1.0	3.10	0.4	204
123	4区	濃灰褐色砂質シルト	"	A I a	4.6	1.4	7.25	0.3	230
124	4区	濃灰褐色砂質シルト	"	A I a	5.0	1.0	5.26	0.35	231
125	4区	濃灰褐色砂質シルト	"	A I a	3.0	1.0	2.99	0.35	232
126	5区	褐色粗砂混じり砂質土	"	A I a	5.8	1.6	13.29	0.4	255
127	5区	褐色粗砂混じり砂質土	"	A I a	4.9	1.2	6.80	0.4	252
128	5区	褐色粗砂混じり砂質土	"	A I a	4.3	1.5	8.46	0.35	253
129	5区	褐色粗砂混じり砂質土	"	A I a	4.3	1.1	5.40	0.4	254
130	5区	暗灰色シルト	"	A I a	4.5	1.7	10.26	0.4	258
131	4区	黒灰色シルト	"	A I a	4.5	1.3	7.47	0.4	234-1
132	4区	黒灰色シルト	"	A I a	4.0	1.3	6.32	0.35	233
133	4区	黒灰色シルト	"	A I a	3.7	1.1	4.50	0.35	238
134	4区	黒灰色シルト	"	A I a	(4.7)	(1.5)	(9.20)	0.35	237
135	4区	黒灰色シルト	"	A I a	4.6	1.5	9.31	0.35	234-2
136	4区	黒灰色シルト	"	A I a	4.2	1.1	4.52	0.35	236
137	4区	黒灰色シルト	"	A I a	5.1	1.3	8.22	0.4	239
138	4区東	黒灰色シルト	"	A I a	4.9	1.2	6.19	0.35	235
139	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	A I a	4.5	1.3	5.49	0.35	245
140	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	A I a	3.9	1.2	4.83	0.35	242
141	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	A I a	3.5	1.2	4.88	0.4	243
142	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	A I a	4.5	1.4	7.36	0.35	241
143	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	A I a	5.0	1.3	7.03	0.3	244
144	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	飯蛸壺(土師質)	—	6.4	1.8(昂手部)	44.10	—	T1
145	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	飯蛸壺(須恵質)	—	5.8	1.5(昂手部)	60.66	—	T2
146	1区西側	⑩黒灰色シルト	管状土錐	A II b	7.5	3.8	113.29	1.8	207
147	5区	暗灰色シルト	棒状土錐	Ba	7.5	1.8	21.35	0.45	259
148	1区南側	暗灰色シルト	"	Ba	7.5	1.4	23.96	0.5	203
149	4区	黒灰色シルト	"	Ba	(6.5)	(1.2)	(11.67)	0.5	240
150	5区	黒灰色シルト	"	Ba	(5.5)	(1.1)	(9.75)	0.5	260
151	1区	⑪褐色砂質シルト	有溝土錐	Ca	(7.1)	(2.6)	(57.62)	0.2	202
152	3区	⑫褐色砂質シルト	"	Ca	(7.0)	(4.2)	(98.50)	0.2	222
153	1区西側南半部	⑬暗灰色シルト	"	Ca	6.7	3.2	72.74	0.3	201
154	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	Ca	7.1	2.8	67.89	0.2	248
155	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	Ca	7.2	3.8	92.62	0.3	250
156	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	Ca	7.2	3.8	110.04	0.2	249
157	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	Ca	7.0	3.2	64.05	0.2	246
158	5区	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	Ca	(7.5)	(3.2)	(70.61)	0.3	256
159	5区	濃褐色灰色シルト	"	Ca	6.4	3.2	69.65	0.34	257
160	4区東	黒灰色粗砂混じり砂質土	"	Ca	7.5	3.0	95.24	0.3	247

種類	分類	特徴	小分類	想定される漁網の種類	番号	平均重量(g)
A: 管状土錐	a類	0 < L ≤ 0.25, 1 < P < 7.0	A I a	刺網、投網	113~143	6.70
	b類	0.25 < L, 1 < P < 3.0	A II a	袋網系(地曳網、船曳網など)	—	該当なし
B: 棒状土錐	a類	0 < L < 0.6, 2 < P < 8.5	Ba	刺網	147~150	22.66
	b類	L ≤ 0.25	Ca	刺網	151~160	83.84
C: 有溝土錐	b類	L > 0.25	Cb	曳網系(地曳網、底曳網)	—	該当なし

L: 孔径または有溝土錐の溝幅の2乗値 P: 長さ + 最大幅

*分類は真鍋篤行(1993)による。

*平均重量は、残存率が高い漁撈具のみで算出している。

また、これらの漁撈具は欠損部の長さを想定して分類している。

表7 漁撈具観察表、漁撈具形状分類表

(5) 瓦

全て破片ではあるが、50点近くの瓦が出土した。古代の平瓦が大多数を占めており、そのうち製作技法が確認できた平瓦は全て1枚作りで製作されている。その他、中世瓦が1点(161)、古代の丸瓦が1点(162)出土している。比較的残存率が高いものについて図化した。

番号	出土地区	形態	出土層	厚さ(cm)	胎土	色調	凹面調整	凸面調整	実測番号	備考
161	5区	平瓦	褐色灰色粗砂 混じり砂質土	2.0	密0.5~3mm程の白色 砂粒を多量に含む	灰色	布目10×12cm	横方向のナデ こびき	K17	中世瓦
162	5区	丸瓦	黒灰色シルト	1.1	密0.5mm程の白色砂 粒を微量に含む	断面茶灰色 全体黒灰色 凸:一部赤橙色	布目10×10cm	摩滅し不明 ナデ	K14	
163	5区	平瓦	黒灰色シルト	1.1	密0.5mm程の白色砂 粒を微量に含む	暗茶灰色	布目6×6/cm 端部から幅4cm 程の間に斜め方 向のナデ 端部面取り	縱方向に4条/cmの 縫目 端部から幅4cm程の 間に斜め方向のナデ 一部に指オサエの痕 端部面取り	K9	
164	1区	平瓦	②暗灰色シルト	1.3	密0.5~2mmの白色砂 粒を微量に含む	断面灰白色 全体黒灰色 凸:一部灰白色 (表面摩滅による)	布目6×6/cm 端部面取り	縱方向に 3条/cmの縫目	K4	
165	4区	平瓦	黒灰色粗砂 混じり砂質土	1.5	密0.5~3mmの白色砂 粒、くさり繩を含む	明橙色	布目6×6/cm	縱方向に 3条/cmの縫目	K8	
166	4区 東	平瓦	黒灰色粗砂 混じり砂質土	1.1	密0.5~2mmの白色砂 粒を多く含む4~5mm の小石を含む	凹:赤茶色 凸:暗灰色~茶 灰色	布目6×6/cm	縱方向に 3条/cmの縫目	K16	

表8 瓦観察表

(6) 石製品

石製品は4点出土した。167は打製石鎌である。凹基式の無茎で、断面形は菱形である。168は打製石剣である。先端部と下部が折欠しているため、全長は不明である。ともにサヌカイト製である。169は碁石である。材質は石英である。170は粘板岩製の石包丁である。約半分折欠しているため、全長は不明である。2箇所片側から穿孔する。いずれも遺物包含層からの出土であるため、時期は不明である。

番号	出土地区	器種	出土層	法量(cm)	重量(g)	みかけの比重	実測番号	備考
167	3区東	打製石鎌 (凹基無茎)	③黒灰色シルト	全長:2.8 幅:1.5 厚さ:0.3	1.04	2.54	516	サヌカイト
168	5区	打製石剣	黒灰色シルト	長さ:3.7 幅:1.2 厚さ:0.4	5.13	2.59	517	サヌカイト
169	4区東	碁石	黒灰色粗砂混じり砂質土	全長:2.1 幅:1.8 厚さ:0.9	5.22	2.66	514	石英
170	4区東	石包丁	黒灰色粗砂混じり砂質土	長さ:5.8 幅:3.9 厚さ:0.7	23.83	2.61	515	粘板岩

表9 石製品観察表

(7) 鉄製品

3区濃褐色シルト層から金属製品が1点出土している。

171は鉄製小刀で、切先を欠く。柄および鞘は装着されていなかったようである。残存長は13.0cmを測り、刃部長10.5cm以上、身幅1.1cm、厚さ4.4mm、茎は関からの長さ2.6cm、幅6.1mm、厚さ2.3mmを測る。刃は片刃で、刃部半ば付近でやや折れ曲がっている。X線透過像の観察の結果、目釘等の存在は確認されなかった。関は両関であるが、背側が1.3mm、腹側が3.3mmと、背関の方が段差は大きい。茎は関から幅・厚さとともに直線的に減じ、茎尻に到る。茎尻の形状は腐食のため定かでない。

(8) 灰色シルト層ほか出土土器

遺物包含層直上の灰色シルト層（近世耕土層）、または灰色砂質土層（中世耕土層）からも遺物の出土が見られる。

172、173、174は、3区から出土した羽釜で、いずれも口縁端部よりやや下がった位置に粘土板を張りつけ鍔としている。172は、体部が僅かに内湾し、口縁部はナデにより緩く外反して直立し、口縁部内面はナデにより緩やかな段をもつ。口縁端部上面に面をもつ。鍔の断面はやや扁平な三角形であり、鍔を貼り付けた後は、上側はナデ消しているが、下側の調整が甘く、痕跡がやや残っている。173、174は体部から口縁部にかけてやや内湾しながら直立している。173は口縁端部上面に面をもつ。鍔の断面は三角形であり、鍔を貼り付けた後の調整が甘く、痕跡がはっきりと残っている。174は口縁端部上面にやや中央がくぼんだ凹型の面をもつ。鍔の断面は台形である。鍔を貼り付けた痕跡をナデ消している。^[3]

175、176、177は5区から出土している。

175、176は瓦器塊の口縁部の破片である。175は内外面ともに緻密なヘラ磨き痕が施されており、口縁端部内面に沈線がめぐっており、これらの特徴から樟葉型の資料と考えられる。176は内面に簡素なヘラ磨き痕が確認できる。和泉型の資料と考えられる。^[4] 177は灰釉陶器の皿の底部と考えられるが、詳細は不明である。貼り付け高台をもつ。

番号	出土地区	器種	出土層	法量	胎土	色調	調整	残存率	実測番号
172	3区	瓦質羽釜	灰色シルト	口径(20.8) 最大径/鍔部分 (23.4)	密 0.5~1mm程の白色砂粒を含む	黒灰色	ロクロナデ 外: 鍔部分の上側はナデ消しているが、下側は痕跡がやや残る	口縁 1/12	138
173	3区	土師質羽釜	灰色シルト	口径(23.4) 最大径/鍔部分 (27.0)	密 0.5mm以下の白色砂粒を含む	外: 黒灰色 内: 暗茶褐色	ロクロナデ 外: 鍔部分は未調整、貼り付けた跡がはっきり残っている	口縁 1/24	137
174	3区	土師質羽釜	灰色シルト	口径(30.1) 最大径/鍔部分 (33.2)	やや粗 0.5~1mmの白色砂粒を含む わずかに赤クサリ 礫を含む	外: 暗灰色 内: 暗茶褐色	ロクロナデ 外: 鍔部分を貼り付けた痕をナデ消している	口縁 1/24	138
175	5区	瓦器塊	灰色シルト	口径(14.2)	密	黒灰色	内: 細密なヘラ磨き 口縁部内面沈線あり 外: 摩滅がひどく詳細不明だが口縁部に緻密なヘラ磨き	口縁 1/12	304
176	5区	瓦器塊	灰色シルト	口径(14.0)	密	黒灰色	内: 簡素なヘラ磨き 外: 体部に指サエの痕	口縁 1/6	305
177	4区 東	灰釉陶器皿	灰色砂質土	底径(7.0)	密	素地: 灰白色 釉色: 淡緑色	ロクロナデ 貼り付け高台 外: 底部ヘラ削り後ナデ	底部 1/6	50

表10 灰色シルト層ほか出土土器観察表

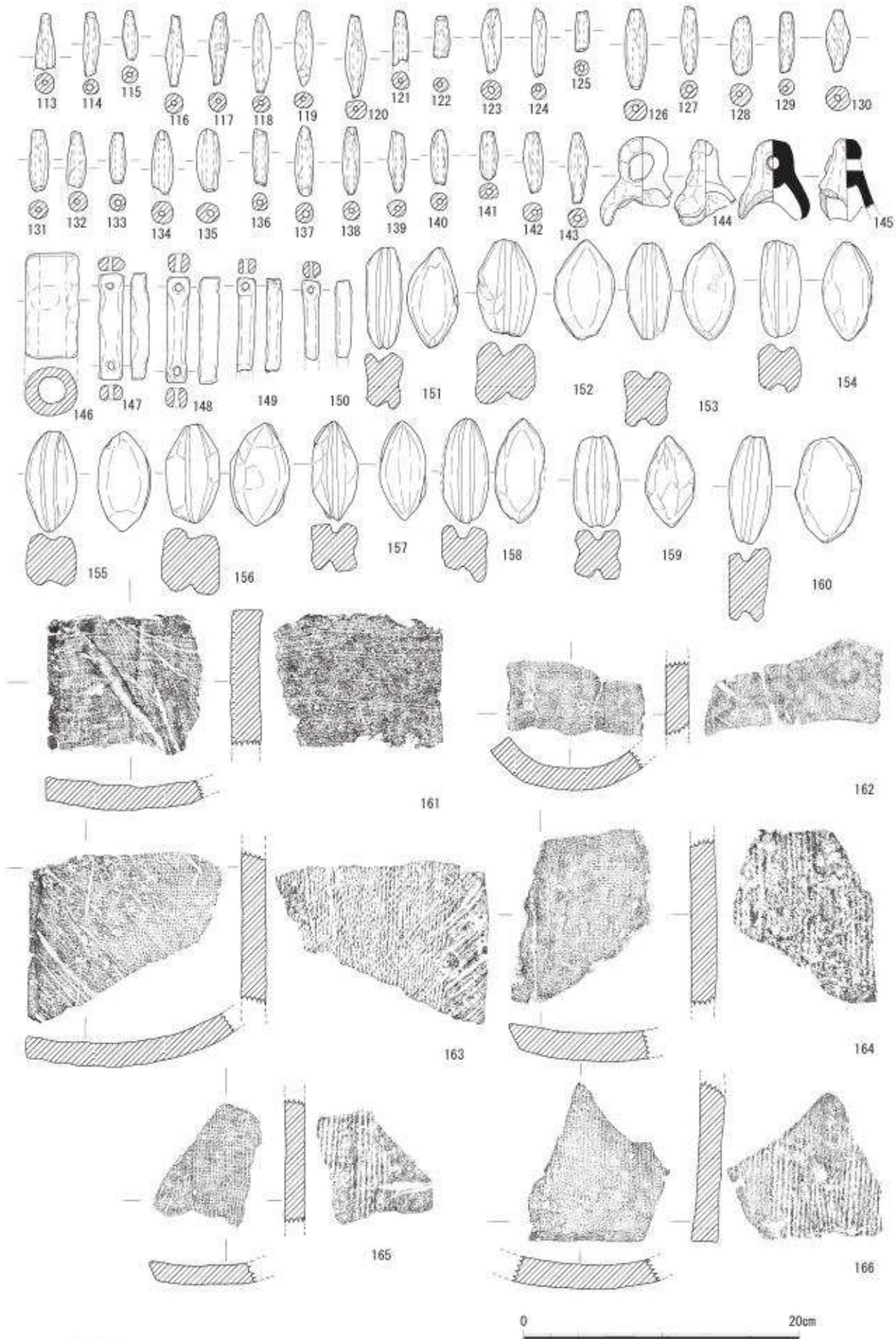


図 16 漁撈具・瓦

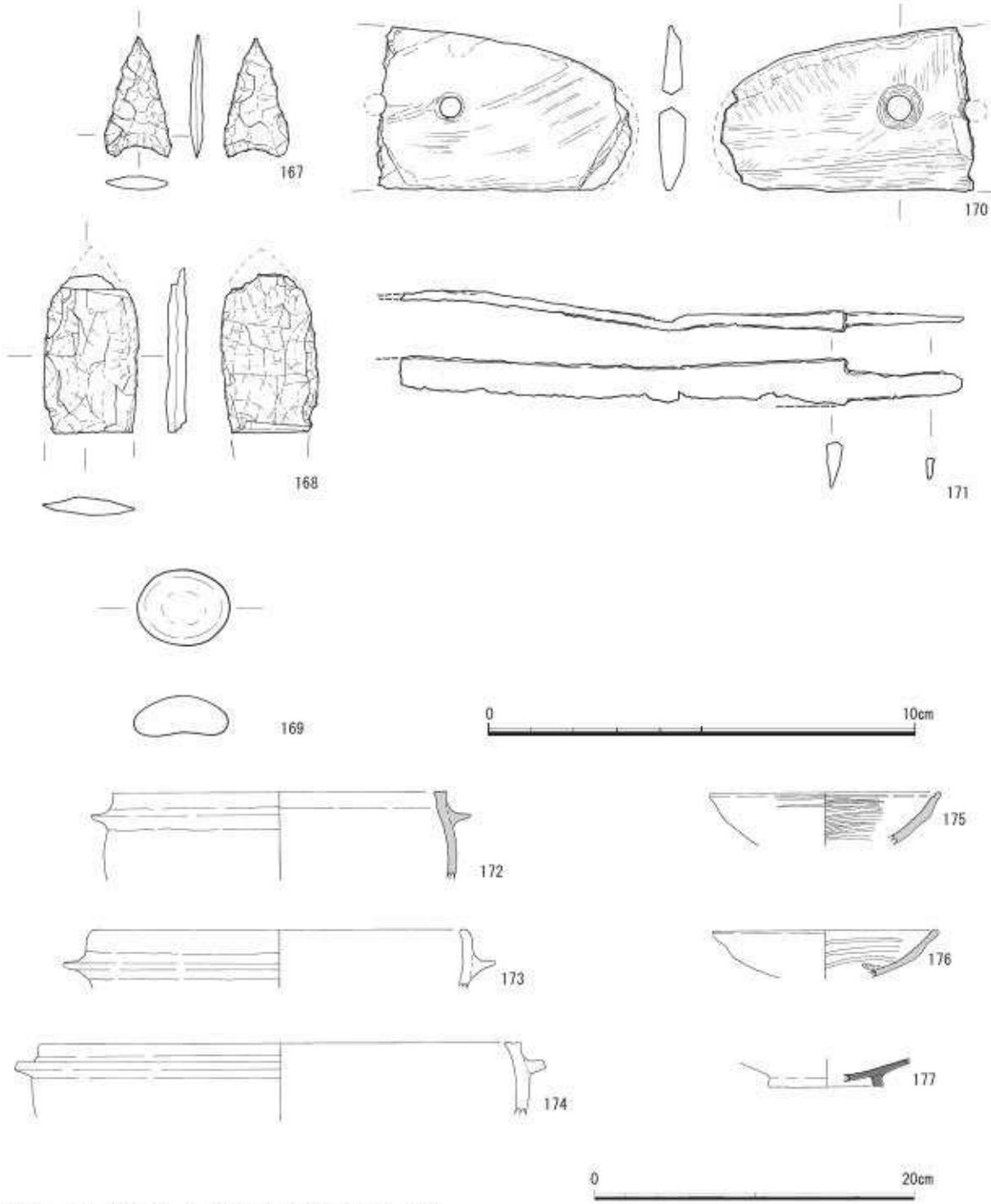


図17 石・鉄製品、灰色シルト層ほか出土土器

(9) 木製品

今回の調査では497点の木製品が出土した。器種が明確なものは42点で、その他は大半が用途不明品、または割材や残材といった加工材である。本節では、このうち50点を図示した。

器種分類にあたっては、概ね伊藤・山田編2012にならったが、器種があいまいなものについては表11に基づき、機能を連想させない名称を付与した。

大半が湿地層（暗灰色シルト・黒灰色シルト）からの出土であり、弥生時代～平安時代前期の土器を供伴するため詳細な時期比定は難しい。残材や破損品が大半であることから流入や投棄の可能性も考えられるが、湿地層出土土器の主体的な時期は平安時代前期である。

なお、図示した木製品を含む100点を樹種同定に供した。本文中および表12、13の木製品観察表に記載した樹種は、古代の森研究舎の分析結果による。樹種同定の詳細については、第3章第2節を参照されたい。

分類基準		分類群	器種名称の与え方
1	施設の構成材と考えられるもの	施設材	板材／角材／丸材
2	器具の構成材と考えられるもの（組み合わせ部材）	器具材	細部加工の有無 (孔／段／溝など) + 形状 (板／棒など)
3.	1～2にあてはまらない木製品	用途不明品	※上記になじまないものは「～木製品」とした。
4	1～3にあてはまらず削肌を残さない木材	加工材	板材／角材／丸材
5	1～3にあてはまらず削肌を残す木材		削材／削板材
6	1～5にあてはまらない不定形の木材		残材
7	薄片、細片		削りかす

表11 器種があいまいな木製品の分類基準

1区出土木製品

1～3は器具材である。1は削出の丸棒で、折損部近くにアタリがあり、柄と考えられる。径2.3cm。樹種はヒノキ。2は角棒で、端部にアタリとみられる線状痕があり、方形孔に挿入する器具材と考えられる。樹種はヒノキ。3は方形孔をもつ器具材の破片と考えられる。樹種はヒノキ。

4、5は高足型田下駄の粹歯で、2枚の粹歯を2本の支軸によって結合し、その上に踏み板を固定するものである。4は下半部を欠損するが、5と類似した形状が想定される。上面に木釘孔が5ヶ所、側面上端に円形孔が2ヶ所穿たれ、うち1ヶ所の木釘孔には木釘が残る。踏み板との結合には木釘および紐を併用したものと考えられる。厚さ2.6cmで、ヒノキの板目材。5は完形品で、木釘孔はみられず、側面上端に円形孔が2ヶ所穿たれる。踏み板との結合には紐を用いたものと考えられる。両下端部には支軸を挿入するための方形孔が穿たれ、うち1ヶ所の方形孔には支軸材が一部残る。高さ14.0cm、幅34.9cm、厚さ2.8cmで、ヒノキの板目材。

6、7は小円孔をもつ棒である。魚網用の浮木等の機能を考えられるが、用途不明品とした。いずれもスギの板目材。近接する深江北町遺跡に類例がある。

8～11は曲物である。8は底板（蓋板）で、両面に漆が塗布される。復元径12.1cm、厚さ0.7cm。ヒノキの追柾目材。9～11は側板で、厚さ0.4～0.6cm。ヒノキの追柾目～板目材。

12～15は祭祀具である。12～14は斎串で、厚さ0.2～0.3cmと非常に薄い。いずれもヒノキの板目材。15は舟形の欠損品と考えられる。全形は窺い得ないが、底部が船底状を呈す。樹種はヒノキ。

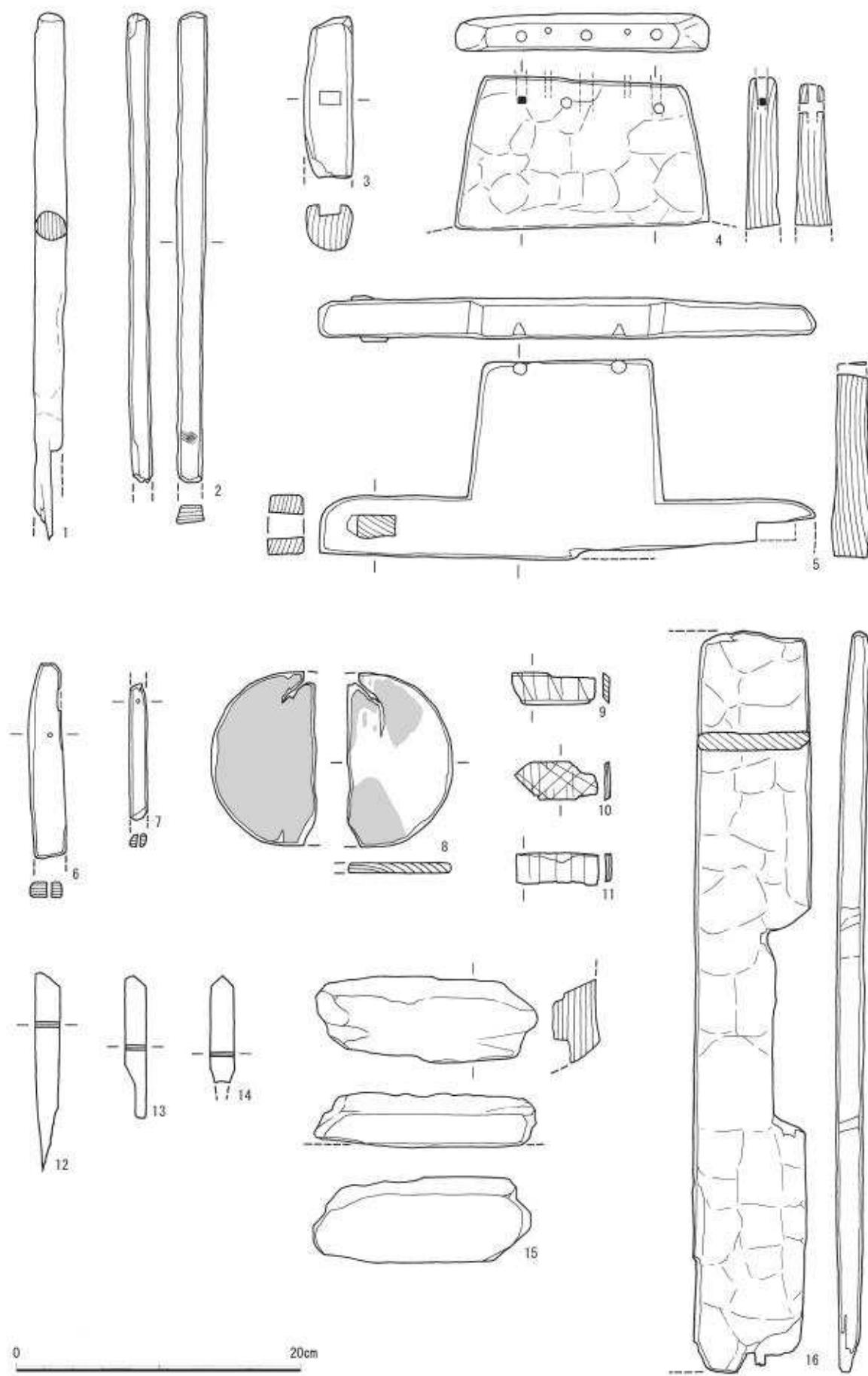


図 18 1区出土木製品 (1)

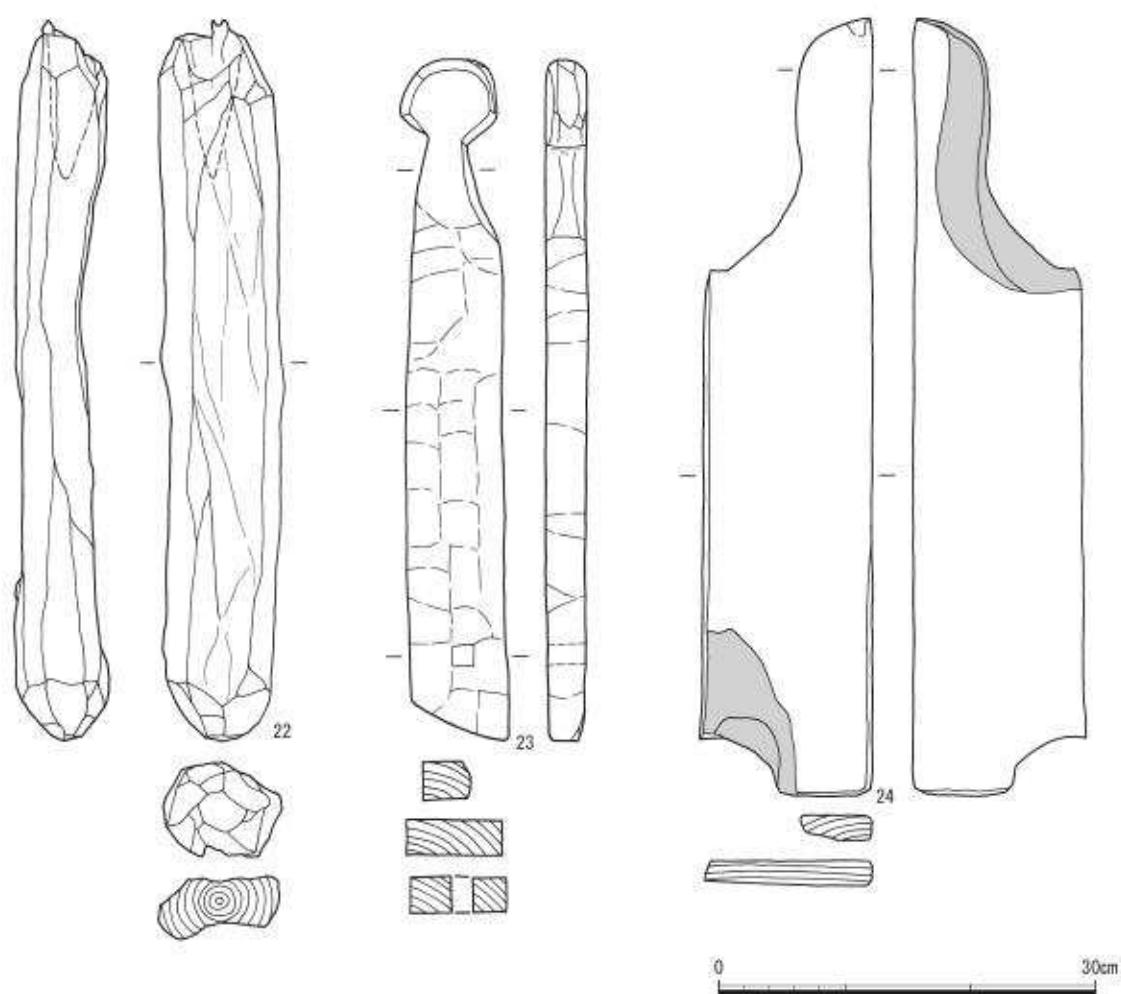
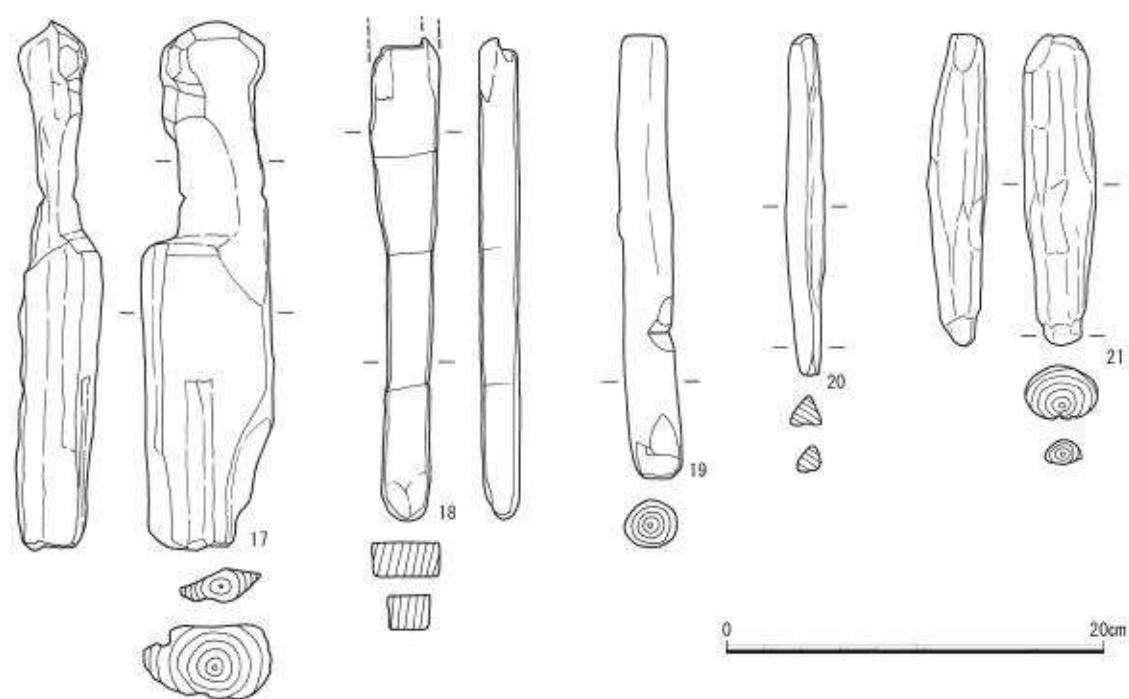


図19 1区出土木製品 (2)

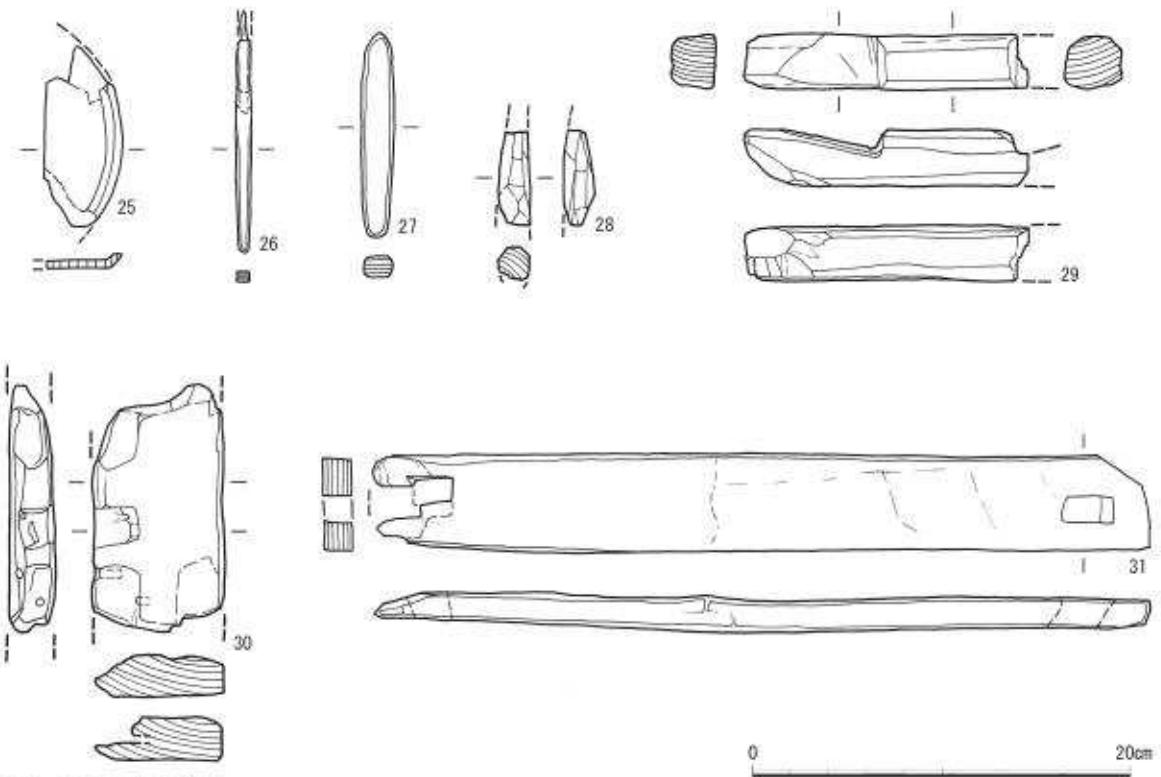


図20 2区出土木製品

16は側面に切欠きをもつ板で、板下駄の欠損品の可能性がある。長さ51.6cm、厚さ1.6cm。ヒノキの追柾目材。

17～22は用途不明品である。端部に加工を施したもの、切込みをもつものなどがある。

23、24は施設材とした。23は一端に円頭形の削出を、もう一端に方形孔をもつ板材。表裏面および側面にはチョウナ痕が明瞭に残る。長さ54.0cm、幅8.6cm、厚さ3.2cm。スギまたはヒノキ科の追柾目材。24は板材で、両面が部分的に炭化している。厚さ2.2cm。ヒノキの板目材。

2区出土木製品

25は挽物皿の破片である。厚さ0.5cm。ヒノキの征目材。

26は箸と考えられる。断面は概ね方形を呈し、先端部を残して欠損する。幅0.7cm、厚さ0.5cm。樹種はモミ属。

27、28は用途不明品である。樹種は27がスギ、28がヒノキ。

29は上部構造を表現した舟形で、ヒノキの芯去材を削り出してつくられている。高さ3.0cm、幅3.0cm。近接する深江北町遺跡に類例がある。

30は溝状の仕口と木釘穴をもち、器具材もしくは施設材の破片と考えられる。樹種はヒノキ。

31は両端部に2.5cm×1.5cmの方形孔をもつ板で、田下駄の部材と考えられる。残存長41.0cm、幅5.2cm、厚さ1.6cm。ヒノキの板目材。

3区出土木製品

32～35は器具材である。32は削出の丸棒で、柄等の機能が考えられる。径2.6cm。樹種はヒノキ。33は芯持の丸棒で、長軸4.1cm、短軸3.1cmの断面楕円形を呈する。一端部が尖り、全面的に炭化している。樹種はオニグルミ。34は中央に方形孔を、一端部に凸状の仕口をも

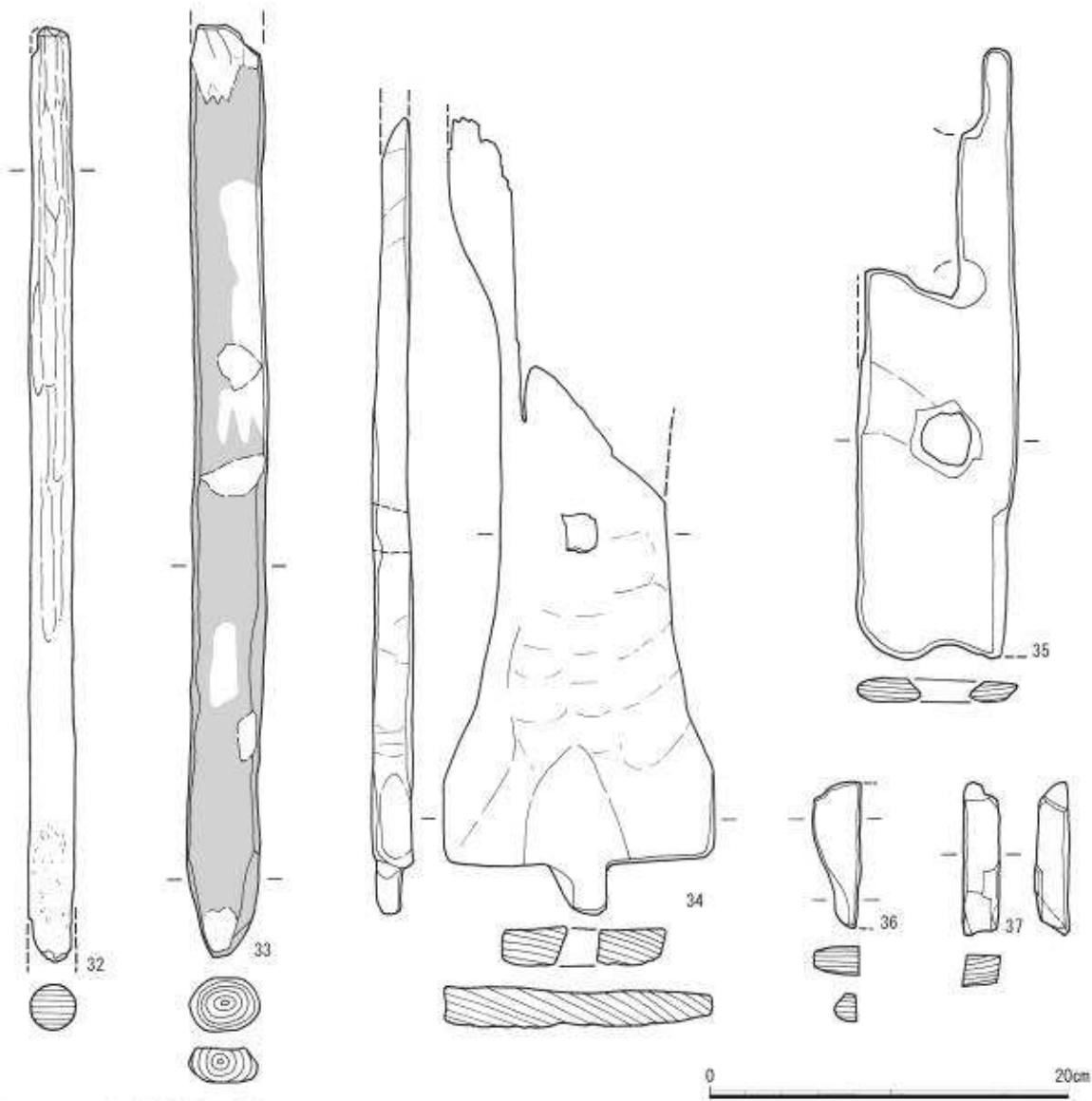


図21 3区出土木製品（1）

つ板である。欠損品だが、本来は両対称形であったと考えられる。幅15.1cm、厚さ2.3cm。ヒノキの追柾目～板目材であることから鋤や鍬とは考えにくい。35は円形孔をもつ板である。欠損品だが、本来は複数個所の円形孔が存在したものと考えられる。ヒノキの板目材。

36、37は用途不明品である。いずれも欠損品で、樹種はヒノキ。残材とも考えられる。

38～42はやや大型で建築部材の可能性があるが、今回の調査では建物を構成する遺構が確認されていないため、分類群は施設材に含めた。38は長方形孔を計5ヶ所もつ板材で、側面の1ヶ所には結合材が残る。折損しているが、材端に仕口が施される。残存長88.9cm、幅10.6cm、厚さ3.6cm。スギの板目材。39は両端部に方形孔をもつ板材で、方形孔から材端にかけて浅い溝状の凹部があり、紐かけの痕跡の可能性がある。表面にはチョウナ痕が微かに残る。残存長89.2cm、幅13.6cm、厚さ4.2cm。ヒノキの板目材。40は一端の両側縁に浅い欠込みをもつ板材の完形品。長さ85.0cm、幅10.5cm、厚さ2.5cm。スギの板目材。41は方形孔をもつ断面半円形の丸材で、平坦面を中心に炭化している。残存長87.2cm、幅9.1cm、厚さ7.2cm。モミ属の芯持材。42は削出の丸材で、表面はヤリガンナで仕上げられている。残存長126.8cm、径8.8cm。樹種はヒノキ。

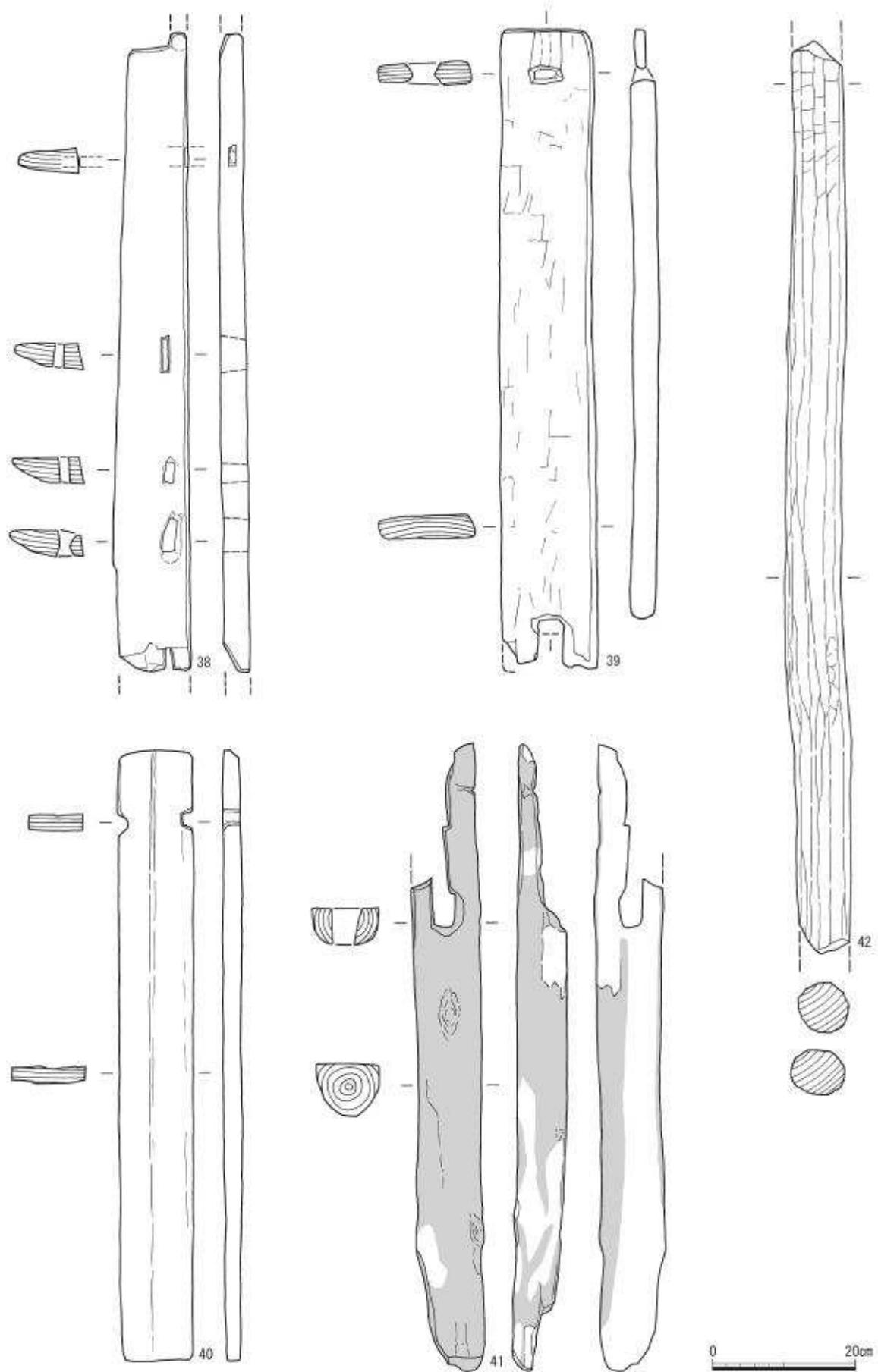


図22 3区出土木製品 (2)

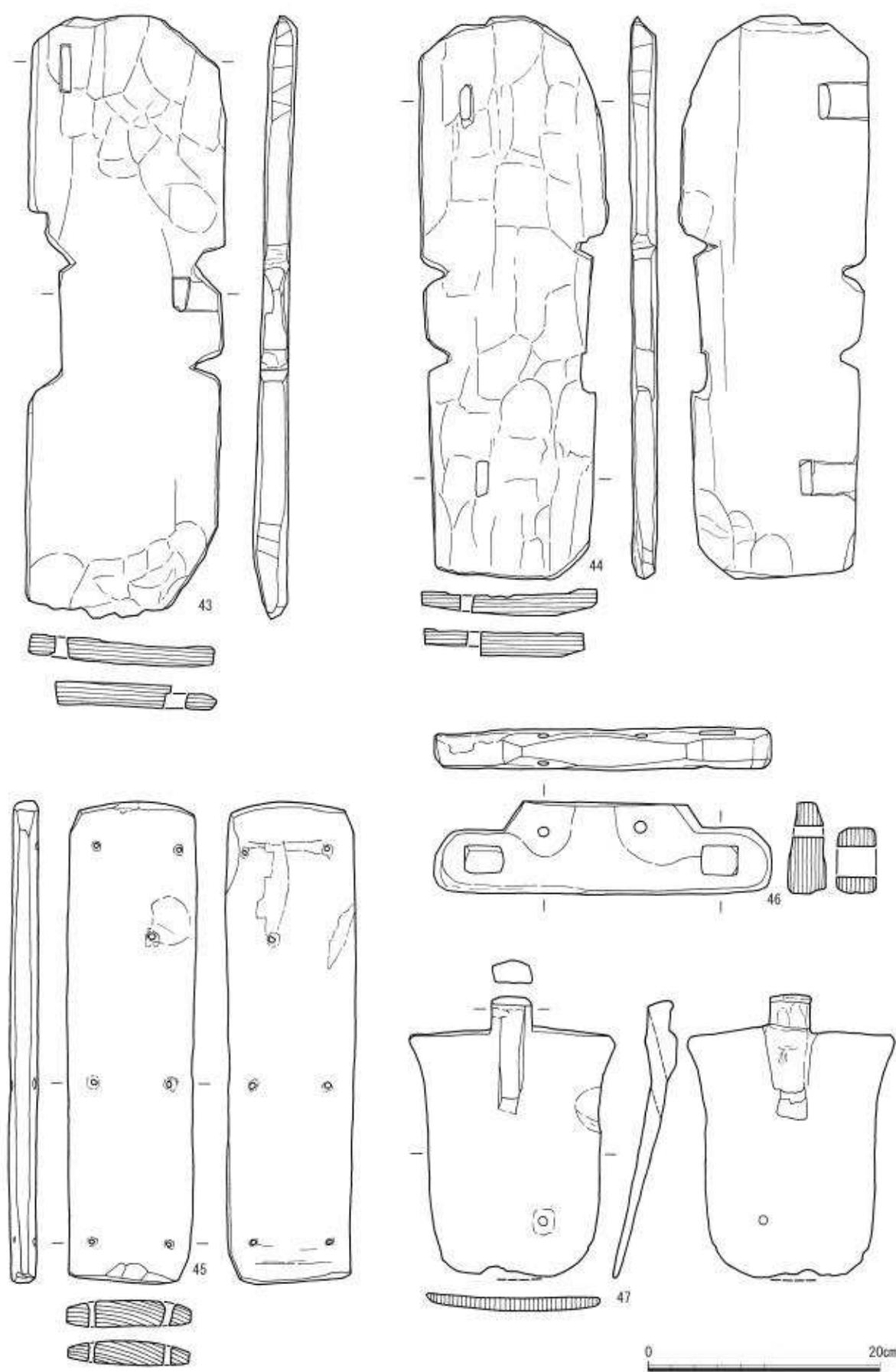


図23 5区出土木製品 (1)

43、44は側面にV字状の切欠きをもつ板田下駄である。いずれも表面はチョウナで粗く仕上げられており、不規則な位置に方形孔をもつ。**43**は長さ52.0cm、幅17.0cm、厚さ3.0cmで、ヒノキ科の板目材。**44**は長さ48.5cm、幅16.0cm、厚さ2.2cmで、モミ属の板目材。田下駄の機能上、不要とも考えられる位置に方形孔が穿たれていることから、板状の器具材や施設材を転用した可能性がある。

45は円柱型田下駄の踏み板である。表面は平滑で、中央に緒孔が3ヶ所穿たれている。前壺はやや右側に寄り、周囲に左足拇指の圧痕がある。上下端付近には枠材緊縛用の円形孔がそれぞれ2ヶ所ずつ穿たれ、裏面には枠材の圧痕とみられる溝状凹部がある。長さ41.6cm、幅11.2cm、厚さ2.5cm。ヒノキの板目材。

46は高足型田下駄の枠歯である。木釘孔はみられず、側面上端に円形孔が2ヶ所穿たれることから、踏み板との結合には紐を用いたものと考えられる。両下端部には支軸を挿入するための方形孔が2ヶ所穿たれる。完形品で、高さ7.9cm、幅29.0cm、厚さ3.4cm。ヒノキ科の板目材。踏み板の位置が水田面に近く、高さは**4**や**5**の半分程度である。

47は組み合わせ平鋤の身である。刃部長21.5cm、身幅17.6cm、刃部厚さ1.1cm。アカガシ亜属の柾目材。弥生時代から存在する形態である。

5区出土木製品

48は挽物皿である。内外面に刃痕を、外面に轆轤の爪痕を残し、中央には方形孔が穿たれている。復元径約20.0cm、器高1.5cm、厚さ0.8cm。ヒノキの柾目材。

49は一端部を尖らせた削出の棒で、径約1.0cm。樹種はヒノキ。

50は用途不明品で、幅2.6cm、厚さ0.6cm。ヒノキの追柾目～板目材。

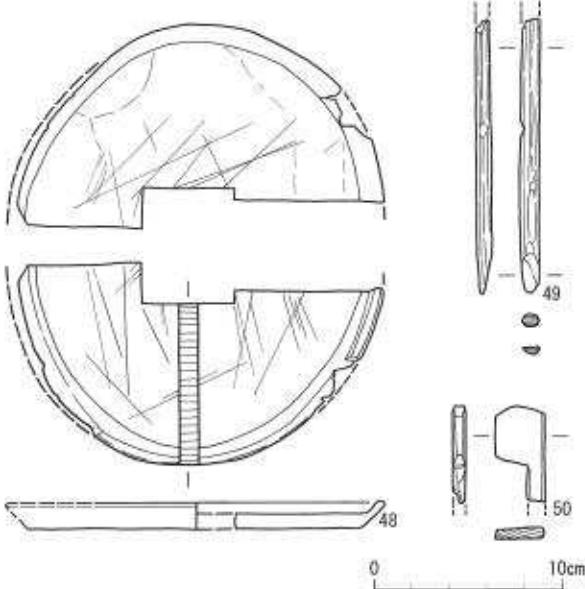


図24 5区出土木製品(2)

番号	分類群	器種	出土地区	遺構/層位	法量(㎜)			木取り	所見	樹種同定結果	台帳番号	樹同番号
					長/高	幅/径	厚さ					
1	器具材	丸棒(柄)	1区	②暗灰色シルト	(37.1)	2.3	—	芯去削出		ヒノキ	W1-10430	31
2	器具材	角棒	1区	②暗灰色シルト	(32.8)	2.0	1.3	板目	組み合わせ部材	ヒノキ	W1-10417	18
3	器具材	有孔木製品	1区西	近世井戸	(11.2)	3.3	3.3	柾目	組み合わせ部材片 方形孔。	ヒノキ	W1-10443	44
4	農耕土木具	高堤型田下駄 檜脚	1区南	②暗灰色シルト	(10.7)	(17.7)	2.6	板目	木釘孔5ヶ所 円形孔2ヶ所	ヒノキ	W1-10435	36
5	農耕土木具	高足型田下駄 檜脚	1区	②暗灰色シルト	14.0	34.9	2.8	板目	円形孔2ヶ所 方形孔2ヶ所	ヒノキ	W1-10431	32
6	用途不明品	有孔棒	1区	③褐色砂質シルト	(13.6)	2.4	1.1	板目	穿孔	スギ	W1-10416	17
7	用途不明品	有孔棒	1区西 南半部	②暗灰色シルト	(9.4)	1.1	0.9	板目	穿孔	スギ	W1-10424	25
8	容器	曲物底板	1区	②暗灰色シルト	12.1	(7.8)	0.7	追柾目	漆塗布	ヒノキ	W1-10412	13
9	容器	曲物側板	1区	②暗灰色シルト	(5.7)	(2.3)	0.6	追柾目	ケビキ(緯/斜)	ヒノキ	W1-10404	5
10	容器	曲物側板	1区	②暗灰色シルト	(5.6)	(2.6)	0.4	板目	ケビキ(斜/斜)	ヒノキ	W1-10405	6
11	容器	曲物側板	1区	②暗灰色シルト	(5.7)	(2.0)	0.5	板目	ケビキ(緯)	ヒノキ	W1-10415	16
12	祭祀具	簀串	1区	②暗灰色シルト	(13.8)	1.8	0.3	板目		ヒノキ	W1-10427	28
13	祭祀具	簀串	1区	②暗灰色シルト	(9.9)	1.5	0.2	板目		ヒノキ	W1-10428	29
14	祭祀具	簀串	1区	②暗灰色シルト	(7.5)	1.7	0.2	板目		ヒノキ	W1-10429	30
15	祭祀具	舟形	1区	②暗灰色シルト	(15.3)	(5.7)	(3.6)	板目	底部のみ1/2残	ヒノキ	W1-10401	2
16	農耕土木具	板下駄	1区	②暗灰色シルト	51.6	(8.1)	1.6	追柾目	切欠き、1/2残	ヒノキ	W1-10418	19
17	用途不明品	不明木製品	1区南	②暗灰色シルト	(27.8)	7.0	4.0	芯持削出	端部円形削出	コナラ節	W1-10437	38
18	用途不明品	不明木製品	1区西 北半部	②暗灰色シルト	(25.5)	(3.5)	2.0	柾目	切込み3ヶ所	ヒノキ	W1-10421	22
19	用途不明品	丸棒	1区	③黒灰色シルト	23.3	2.8	—	心持	切込み1ヶ所	イスノキ	W1-10460	1
20	用途不明品	多角棒	1区南	③黒灰色シルト	18.0	2.0	1.6	—	断面三角形	コウヤマキ	W1-10442	43
21	用途不明品	不明木製品	1区南	②暗灰色シルト	16.5	3.7	—	芯持削出	端部有段	サカキ	W1-10438	39
22	用途不明品	不明木製品	1区南	②暗灰色シルト	57.0	10.0	7.4	芯持削出	両端削出、円形孔	スギまたは ヒノキ科	W1-10432	33
23	施設材	板材	1区南	②暗灰色シルト	54.0	8.6	3.2	追柾目	方形孔 端部円形削出	スギまたは ヒノキ科	W1-10434	35
24	施設材	板材	1区南	②暗灰色シルト	(61.5)	13.6	2.2	板目	一部炭化	ヒノキ	W1-10436	37
25	容器	皿(挽物)	2区	①褐色砂質シルト	(9.6)	(4.0)	0.5	柾目		ヒノキ	W1-10470	71
26	食事具	箸	2区	③褐色砂質シルト	(12.8)	0.7	0.5	板目		モミ属	W1-10469	70
27	用途不明品	棒	2区東	近世井戸	10.6	1.6	1.1	板目	断面四角形	スギ	W1-10466	67
28	用途不明品	不明木製品	2区	③黒灰色シルト	(5.0)	1.7	(1.7)	追柾目	小片	ヒノキ	W1-10474	75
29	祭祀具	舟形	2区	②黒灰色シルト	(15.0)	3.0	3.0	芯去削出	2/3残	ヒノキ	W1-10473	74
30	器具材	有溝木製品	2区	①褐色砂質シルト	(13.0)	(6.8)	2.4	板目	組み合わせ部材片 仕口、鉤穴	ヒノキ	W1-10468	69
31	農耕土木具	田下駄部材	2区	①褐色砂質シルト	(41.0)	5.2	1.6	板目	両端部方形孔	ヒノキ	W1-10467	68
32	器具材	丸棒	3区	②暗灰色シルト	(51.8)	2.6	—	芯去削出		ヒノキ	W1-10479	80
33	器具材	丸棒	3区東	②暗灰色シルト	(51.8)	4.1	3.1	芯持削出	炭化、端部尖る	オニグルミ	W1-10455	56
34	器具材	有孔板	3区	③黒灰色シルト	(44.2)	15.1	2.3	追柾目～板目	中段方形孔 端部仕口	ヒノキ	W1-10465	66
35	器具材	有孔板	3区	②暗灰色シルト	(34.4)	(8.9)	1.3	板目	円形孔3ヶ所	ヒノキ	W1-10463	64
36	用途不明品	不明木製品	3区東	②暗灰色シルト	8.0	(2.6)	1.5	板目	欠損 残材の可能性有	ヒノキ	W1-10460	61
37	用途不明品	不明木製品	3区東	②暗灰色シルト	(8.5)	(2.0)	1.8	板目	欠損 残材の可能性有	ヒノキ	W1-10462	63
38	施設材	板材	3区東	②暗灰色シルト	(88.9)	10.6	3.6	板目	方形孔、材端仕口	スギ	W1-10447	48
39	施設材	板材	3区	②暗灰色シルト	(89.2)	13.6	4.2	板目	方形孔	ヒノキ	W1-10480	81
40	施設材	板材	3区東	②暗灰色シルト	85.0	10.5	2.5	板目	欠込み	スギ	W1-10449	50
41	施設材	丸材	3区東	②暗灰色シルト	(87.2)	9.1	7.2	芯持削出	平坦面炭化、方形孔	モミ属	W1-10458	59
42	施設材	丸材	3区東	②暗灰色シルト	(126.8)	8.8	—	芯去削出	ヤリガシナ刃痕	ヒノキ	W1-10448	49
43	農耕土木具	板下駄	3区東	②暗灰色シルト	52.0	17.0	3.0	板目	切欠き、方形孔	ヒノキ科	W1-10451	52
44	農耕土木具	板下駄	3区東	②暗灰色シルト	48.5	16.0	2.2	板目	切欠き、方形孔	モミ属	W1-10452	53
45	農耕土木具	内松型田下駄 踏み板	3区	②暗灰色シルト	41.6	11.2	2.5	板目	縫孔3ヶ所、円形孔4ヶ所。 拘指圧痕、棒材圧痕	ヒノキ	W1-10477	78
46	農耕土木具	高足型田下駄 檜脚	3区	③黒灰色シルト	7.9	29.0	3.4	板目	円形孔2ヶ所、方形孔 2ヶ所	ヒノキ科	W1-10464	65
47	農耕土木具	組み合わせ平頭 檜脚	3区	③黒灰色シルト	24.4	17.6	1.1	柾目	円形孔	アカガシ亞属	W1-10485	86
48	容器	皿(挽物)	5区	黒灰色シルト上面	1.5	(20.0)	0.8	柾目	方形孔、輻輪山痕 刃痕	ヒノキ	W1-10492	93
49	用途不明品	棒	5区	暗灰色シルト	(14.5)	1.0	0.9	—	端部尖る	ヒノキ	W1-10488	89
50	用途不明品	不明木製品	5区	黒灰色シルト上面	(5.1)	2.6	0.6	追柾目～板目		ヒノキ	W1-10493	94

表12 木製品観察表(1)

番号	分類群	器種	出土地区	遺構/層位	法量 (cm)			本取り	所見	樹種同定結果	台帳番号	樹同番号
					長/高	幅/径	厚さ					
—	用途不明品	丸棒	1区	②暗灰色シルト	(10.3)	(3.9)	—	心持		サカキ	W1-10402	3
—	加工材	残材	1区	②暗灰色シルト	10.4	1.1	1.1	追査目	棒状	ヒノキ	W1-10403	4
—	用途不明品	薄板	1区	②暗灰色シルト	(5.1)	(1.4)	0.3	板目		モミ属	W1-10406	7
—	加工材	残材	1区	②暗灰色シルト	12.6	4.6	2.0	板目	角棒状	サワラ	W1-10407	8
—	用途不明品	薄板	1区	②暗灰色シルト	(9.4)	(1.6)	0.5	板目		ヒノキ	W1-10408	9
—	用途不明品	薄板	1区	②暗灰色シルト	(8.5)	(5.8)	0.3	板目		ヒノキ	W1-10409	10
—	用途不明品	薄板	1区	②暗灰色シルト	(8.6)	(4.9)	0.4	板目		ヒノキ	W1-10410	11
—	用途不明品	薄板	1区	①褐色砂質シルト	(6.7)	(1.4)	0.5	板目		ヒノキ	W1-10411	12
—	加工材	残材	1区	②暗灰色シルト	22.7	4.4	1.2	柾目	炭化、切断	ヒノキ	W1-10413	14
—	加工材	板材	1区	②暗灰色シルト	49.3	4.8	2.0	追査目		ヒノキ	W1-10414	15
—	加工材	板材	1区	②暗灰色シルト	43.1	4.5	1.7	柾目		ヒノキ	W1-10419	20
—	加工材	残材	1区	①褐色砂質シルト	8.7	2.1	0.8	板目	板棒状	ヒノキ	W1-10420	21
—	加工材	削板材	1区西南半部	②暗灰色シルト	77.3	10.6	2.8	板目		ヒノキ	W1-10422	23
—	容器	曲物側板	1区西南半部	②暗灰色シルト	(2.2)	(1.1)	0.6	板目	ケビキ(縦/斜)	サワラ	W1-10423	24
—	用途不明品	箆状木製品	1区西南半部	②暗灰色シルト	22.3	2.4	1.2	柾目	残材の可能性有	スギ	W1-10425	26
—	用途不明品	角棒	1区南	③褐色砂質シルト	(8.9)	2.6	2.2	柾目	部材片か	アカガシ亜属	W1-10426	27
—	加工材	削板材	1区南	②暗灰色シルト	108.6	11.3	4.2	板目		ヒノキ	W1-10433	34
—	用途不明品	薄板	1区南	②暗灰色シルト	(11.3)	3.9	0.5	追査目	刀痕	ヒノキ	W1-10439	40
—	加工材	削板材	1区南	③黒灰色シルト	60.7	12.8	1.5	板目	一部炭化	ヒノキ	W1-10440	41
—	加工材	残材	1区南	③黒灰色シルト	12.4	2.3	0.8	柾目		ヒノキ	W1-10441	42
—	用途不明品	薄板	1区西	近世井戸	11.0	4.0	0.4	板目	線状痕	ヒノキ	W1-10444	45
—	用途不明品	有段棒	3区	③褐色砂質シルト	(27.3)	(3.1)	1.2	板目	長辺に段	ヒノキ	W1-10445	46
—	加工材	分割材	3区東	②暗灰色シルト	106.8	12.9	5.8	—	半割材、木皮残	ヒノキ	W1-10446	47
—	加工材	角材	3区東	②暗灰色シルト	(48.5)	4.2	2.0	板目	組み合ひせ部材の可能性有	ヒノキ	W1-10450	51
—	加工材	板材	3区東	②暗灰色シルト	26.4	5.1	1.3	板目		ヒノキ	W1-10453	54
—	加工材	角材	3区東	②暗灰色シルト	(35.5)	3.2	2.1	板目	組み合ひせ部材の可能性有	ヒノキ	W1-10454	55
—	加工材	板材	3区東	②暗灰色シルト	31.0	5.8	1.2	板目		ヒノキ	W1-10456	57
—	施設材	板材	3区東	②暗灰色シルト	(119.3)	6.2	1.1	板目	小方形孔に結合材残	ヒノキ	W1-10457	58
—	加工材	削板材	3区東	②暗灰色シルト	137.8	11.3	5.3	板目	施設材の可能性有	ヒノキ	W1-10459	60
—	加工材	残材	3区東	②暗灰色シルト	8.2	3.4	1.4	柾目		ヒノキ	W1-10461	62
—	用途不明品	有孔板	2区	③黒灰色シルト	(14.8)	(7.2)	1.7	追査目	中央方形孔	ヒノキ	W1-10471	72
—	用途不明品	不明木製品	2区	灰色シルト	4.4	2.0	1.8	追査目		ヒノキ科	W1-10472	73
—	非加工材	箆	2区西	③黒灰色シルト	3.9	1.9	1.5	—		針葉樹	W1-10475	76
—	用途不明品	不明木製品	3区	④濃灰褐色砂質シルト	(4.8)	1.7	0.8	柾目	小片	マツ属複雜管束亞属	W1-10476	77
—	用途不明品	不明木製品	3区	②暗灰色シルト	(15.5)	(5.2)	1.3	柾目	炭化	ヒノキ	W1-10478	79
—	加工材	削板材	3区	③黒灰色シルト	49.4	8.1	1.4	柾目		ヒノキ	W1-10481	82
—	加工材	削板材	3区	③黒灰色シルト	57.6	10.6	3.2	板目		コウヤマキ	W1-10482	83
—	加工材	削板材	3区	③黒灰色シルト	63.0	7.2	1.2	板目		ヒノキ	W1-10483	84
—	加工材	削板材	3区	③黒灰色シルト	84.3	16.8	4.5	板目	チヨウナ痕	ヒノキ	W1-10484	85
—	加工材	角材	5区	褐色粗砂混砂質土	(8.9)	(2.4)	(2.3)	芯持削出	組み合ひせ部材の可能性有	マツ属複雜管束亞属	W1-10486	87
—	加工材	残材	5区	濃褐色シルト	14.7	2.5	2.0	板目		ヒノキ科	W1-10487	88
—	加工材	削りかす(棒)	5区	暗灰色シルト	15.8	0.6	0.5	—		ヒノキ	W1-10489	90
—	加工材	削りかす(棒)	5区	暗灰色シルト	12.5	0.6	0.6	—	端部炭化	ヒノキ	W1-10490	91
—	加工材	削りかす(棒)	5区	暗灰色シルト	12.7	0.6	0.5	—	端部炭化(2個体)	ヒノキ	W1-10491	92
—	土木材	丸杭	1区南	②暗灰色シルト	(34.8)	7.0	5.7	芯持		オニグルミ	W1-10494	95
—	土木材	丸杭	3区東	②暗灰色シルト	82.0	5.0	4.3	芯持	両端部加工	マツ属複雜管束亞属	W1-10495	96
—	土木材	丸杭	3区東	②暗灰色シルト	(60.8)	8.5	6.4	芯持		マツ属複雜管束亞属	W1-10496	97
—	土木材	丸杭	3区東	②暗灰色シルト	(78.0)	3.9	2.4	芯持		マツ属複雜管束亞属	W1-10497	98
—	非加工材	木片	5区	黒灰色シルト	—	—	—	—		マツ属複雜管束亞属	W1-10498	99
—	非加工材	木片	5区	黒灰色シルト	—	—	—	—	炭化	トネリコ属(炭化材)	W1-10499	100

表13 木製品観察表(2)

註

- [1] 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- [2] 石井清司 1995「篠嶽須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

参考文献

- 中居さやか 2003『本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 谷正俊編 2014『深江北町遺跡 第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 谷正俊編 2018『深江北町遺跡 第17次調査 埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 出土遺物については下記を参考にした。
- 古代學協會研究部編 1988『伊丹市口酒井遺跡発掘調査報告書』伊丹市教育委員会
- 森田克行 1990『摂津』『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
- 森岡秀人・竹村忠洋『摂津地域』『古式土師器の年代学』財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター 2006
- 古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成I』古代の土器研究会 1992
- 古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成II』古代の土器研究会 1993
- 古代の土器研究会編『古代の土器3 都城の土器集成III』古代の土器研究会 1994
- 小森俊寛監修 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
- 鶴柄俊夫 1997『中世食器の地域性 6-畿内周辺』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 森隆 1995『黒色土器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 高橋照彦 1995『緑釉陶器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995『瓦器椀』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 森田稔 1995『中世須恵器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 土橋理子 1995『初期貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 真鍋篤行 1993『瀬戸内地方出土土錘の変遷』『瀬戸内地方出土土錘調査報告書』瀬戸内海歴史民俗資料館
- 中山正典ほか 1994『瀬名遺跡III(遺物編Ⅰ)』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 國下多美樹編 1992『向日市埋蔵文化財調査報告書』第34集(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学』海青社
- 町田章・上原真人編 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所
- 山田昌久編 2003『考古資料大観 第8巻』小学館

第3章 本庄町遺跡第10次調査における自然科学分析

第1節 本庄町遺跡発掘調査に伴う古環境分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、神戸市教育委員会 文化財課からの委託を受け、本庄町遺跡内及び周辺地域での古環境（古植生、堆積環境）の変遷を明らかにする目的で、花粉分析、珪藻分析を実施した報告書である。

今回分析調査を実施した、本庄町遺跡は神戸市東部に位置し、北を六甲山地及び甲山丘陵、東を芦屋川自然堤防、西を住吉川自然堤防、南を大阪湾と隔てる砂丘に囲まれた凹地内に立地する。

試料について

神戸市教育委員会により採取・保管中の試料を、分析試料として御提供を受けた。試料採取調査区の平面図（図25）及び試料採取地点断面図（図26）を、以下に示す。また、これらの図面は、神戸市教育委員会より御提供を受けた原図をもとに、作成した。試料採取地点断面図（図26）中に、試料採取層準（A～C）を示す。試料Cについて、上：9層上部と、下：9層下部に分割して処理を行った。



図25 調査トレンチ平面図

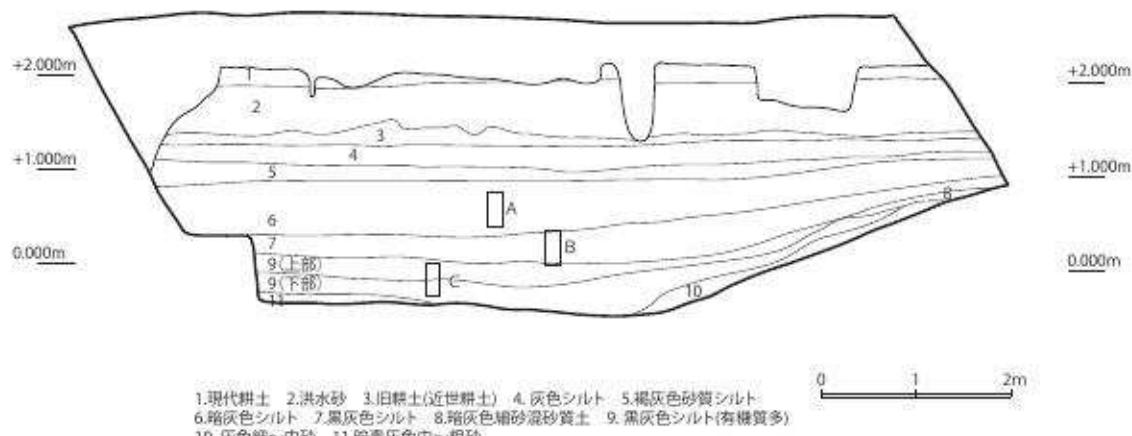


図26 試料採取地点断面図

分析方法

(1) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を観察し、花粉（胞子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観し、5段階で示した。

(2) 花粉分析

渡辺（2010a）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

(3) 珪藻分析

渡辺（2010b）に従って実施した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡下で400～1000倍を用いて実施した。同定・計数は、原則的に計数個体が200以上になるまで行った。

分析結果

(1) 微化石概査

微化石概査結果を表14に示す。

いずれの試料でも、花粉、珪藻が多量に検出された。また、植物珪酸体も多量に検出されたが、C

上、C下ではやや少なかった。微粒炭、植物片の含有量はやや少なかった。火山ガラスが、C下でやや多く検出された。

(2) 花粉分析

分析結果を図27の花粉ダイアグラム及び表15の花粉組成表に示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本（針葉樹）花粉、木本（広葉樹）花粉、草本・藤本花粉、胞子の区分でスペクトルの色を変えて示した。また、花粉総合ダイアグラムとして区分ごとの累積百分率を示したほか、1g当たりの花粉と胞子の含有量を含有量グラフとして、対数目盛りで示した。

試料No.	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
A	○	△	△	○	○	○
B	○	○	△	○	○	○
C上	○	△	○	○	○	○
C下	○	△	○	○	○	○

凡例 ○：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる △：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

表14 微化石概査結果

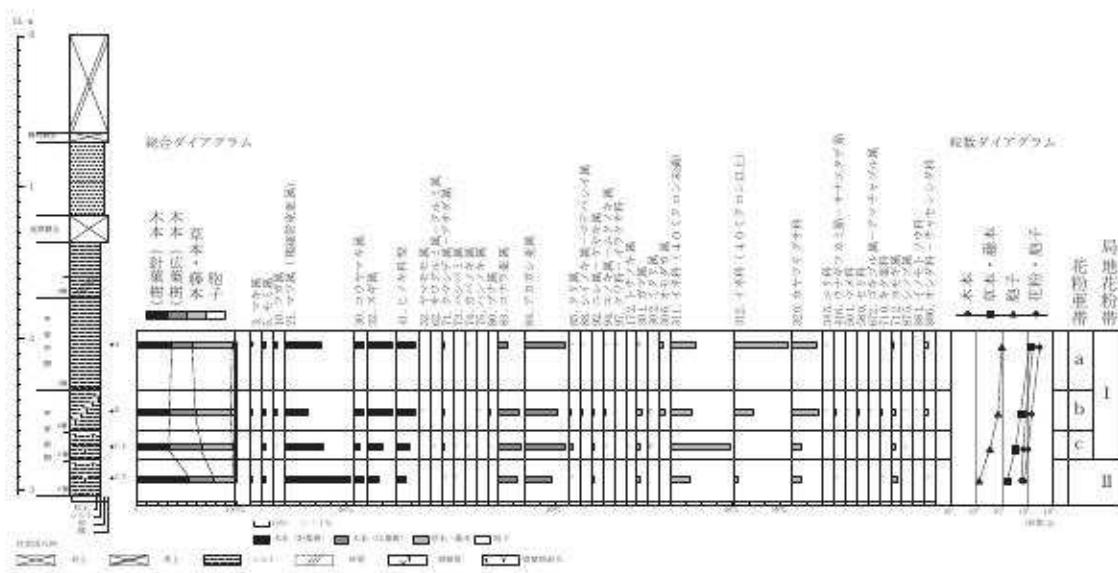


図27 花粉ダイアグラム

(3) 珪藻分析

分析結果を珪藻ダイアグラム(図28)及び珪藻総合ダイアグラム(図29)、珪藻組成表(表16)に示す。珪藻ダイアグラムでは、分類群ごとに検出総数を基準とした百分率を算出し、千葉・澤井(2014)に従った環境指標種群ごとにハッチを変えたスペクトルで示している。さらに、環境指標種群ごとの【累積グラフ】、【完形率グラフ】、【含有量グラフ】: 1g当たりの換算含有量を算出]を付けており、珪藻総合ダイアグラムのうち、左端の「生息域別グラフ」は同定したすべての種類を対象にそれぞれの要因(生息域)ごとに累積百分率で示している。そのほかの4つのグラフは、淡水種について要因ごとに累積百分率として示している。

属科番号		A	B	C	D
3 Pseudoergo	サホ属	3 0.9%	3 1.2%	3 1.3%	3 2.1%
5 Abo	セミ属	8 2.5%	6 2.4%	4 1.6%	5 2.1%
10 Trigia	ブガ属	7 2.2%	6 2.4%	2 0.8%	
21 Prasi (Diplotrichia)	マツ属(改進古生群属)	75 23.7%	79 15.4%	61 34.4%	101 43.2%
30 Scenedesmus	コウヤマキ属	19 6.0%	15 5.9%	10 4.0%	13 5.6%
32 Cryptomonas	スチ属	50 15.8%	43 16.3%	25 10.0%	15 8.1%
41 Cyprinaceae-type	ヒノキ科型	37 11.7%	31 12.2%	22 8.8%	15 6.8%
42 Myrica	ヤマモチ属		1 0.4%		
43 Pseudocyathulopsis	サワグルミ属—クルミ属			1 0.4%	
71 Cupressus-Ostrya	クランゲ属—アザダ属	4 1.3%	4 1.6%	5 2.0%	2 0.9%
73 Cupressus	ハクイシモ属			1 0.4%	1 0.4%
74 Betula	ガリバモ属	3 11.8%		1 0.4%	
75 Alnus	ハンノキ属		1 0.4%		
80 Fagus	ブナ属		4 1.6%	2 0.8%	
83 Quercus	コナラ属	18 5.7%	33 13.0%	36 14.4%	28 12.0%
84 Cyclospadixopsis	アカガシ属	83 26.7%	56 22.0%	57 26.8%	42 17.9%
85 Castanea	クリ属	3 0.9%	3 1.2%	6 2.4%	2 0.9%
88 Cistangogia-Pisonia	シイノキ属—マテバシイ属	3 0.9%	3 1.2%	3 1.2%	1 0.4%
92 Ulmus-Zelkova	ニレ属—ケヤキ属			3 1.2%	
94 Celtis-Aphananthe	エノキ属—ムクノキ属	2 0.6%	3 1.2%	2 0.8%	
97 Moraceae-Urticaceae	クワ科—イラクサ科	1 0.3%			
172 Juncaceae	トクモ属			2 0.8%	
201 Typha	ガマ属	1 0.1%	9 3.3%	4 1.6%	1 0.4%
302 Sporangiaceae	ミクリ属		2 0.8%	1 0.4%	
306 Sagittaria	オモダカ属	6 1.9%	30 3.2%		
311 Gramineae (<40)	イネ科(40ミクロン未満)	50 15.8%	34 13.4%	98 39.2%	28 12.0%
312 Gramineae (>40)	イネ科(40ミクロン以上)	113 35.8%	32 12.6%		2 2.1%
313 Cyperaceae	カヤツリグサ科	51 16.1%	44 17.3%	14 5.8%	15 6.4%
345 Liliaceae	ユリ科	3 0.3%	2 0.8%		
416 Echinocaulon-Pteridaria	ウツボヅカミ属—サエタケ属		3 1.2%		E 0.4%
501 Leguminosae	マメ科		1 0.4%		
508 Umbelliferae	セリ科		3 1.2%		
672 Acanthoceraspis-Gymnospermae	ゴキブリ属—アマチャヅル属		1 0.4%		
712 Caricaceae	ヨクゼ科		6 2.4%		
712-Artemisia	ヨモギ属	6 1.9%	8 3.1%	7 2.8%	9 3.8%
875 Desmids	シノブ属	2 0.6%	1 0.4%	1 0.4%	
881 Peridiotaceae	シノモトソウ科		2 0.8%		
887 Aspid.-Aspl.	オシダ科—チセンジダ科	3 1.6%	6 2.4%		E 0.4%
888 MUNIQUE-TYPE-SPORE	单系孢子	4 1.3%	3 1.2%	21 14.4%	E 0.3%
889 TRILATE-TYPE-SPORE	三系孢子	7 2.5%	8 3.1%		E 0.3%
日本化石地図		356 56.2%	251 59.2%	250 64.8%	234 77.2%
草木・藤本花粉密度		226 40.6%	155 36.3%	124 32.1%	64 21.1%
花粉濃度		18 3.2%	20 4.7%	19 5.1%	5 1.7%
花粉率		162	129	89	102
珪藻組成(換算%)		31.9%	13.4%	13.3%	13.8%

表15 花粉組成表

左よりサンプル枚数、百分率、花粉率

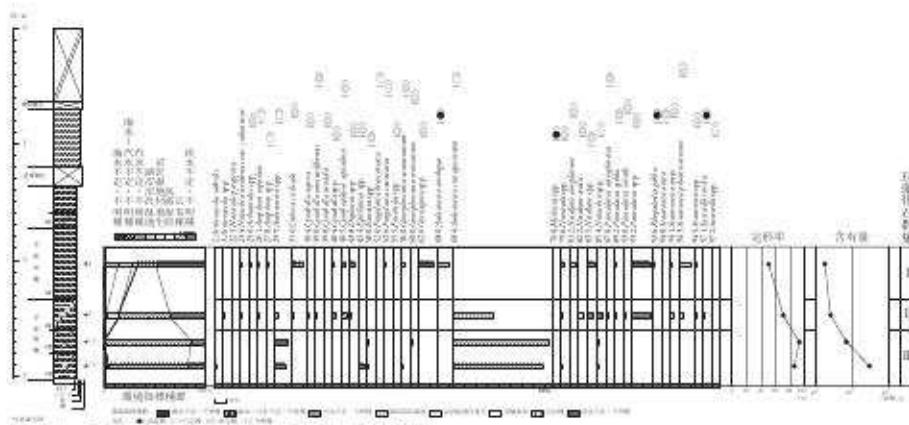


図28 珪藻ダイアグラム

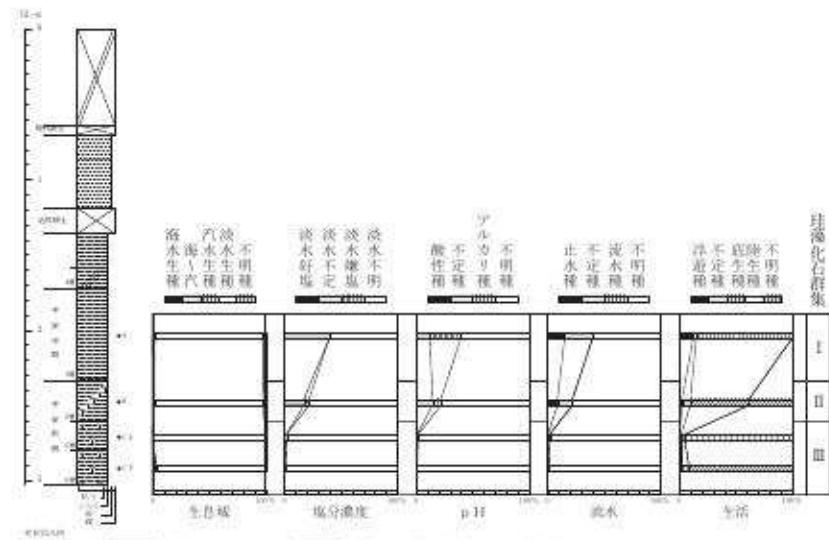


図29 珪藻総合ダイアグラム

コード	学名	生境				A		B		C上		C下		
		水陸	塩分濃度	P石	淡水	干肉		1	0.3%	1	0.3%	1	0.3%	
2	<i>Actinocyclus subtilis</i>	海水						1	0.3%					
3	<i>Actinocyclus</i> spp	海水						1	0.3%					
225	<i>Navicula</i> <i>peregrina</i>	淡水					4	1.9%	1	0.3%			1	0.3%
234	<i>Nitzschia</i> <i>recondita</i> var. <i>salinum</i>	淡水												
236	<i>Achnanthidium</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	3	1.4%			1	0.3%		
261	<i>Asperula</i> <i>capillaris</i>	淡水	不明	不明	不明	不定	2	0.9%	2	1.0%				
278	<i>Asplenium</i> spp	淡水	不明	不明	不明	不定	3	1.4%			1	0.3%		
299	<i>Asterozolla</i> spp	淡水	不明	不明	不明	不定					21	9.5%		
316	<i>Calowea</i> <i>siliqua</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生	24	11.4%	6	3.0%	23	11.3%	21	9.5%
354	<i>Cymbella</i> <i>aspera</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生			2	1.0%	1	0.3%		
390	<i>Cymbella</i> <i>nativiformis</i>	淡水	不定	不定	不定	底生			2	1.0%				
398	<i>Cymbella</i> <i>ovata</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生			1	0.3%				
424	<i>Cymbella</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	3	1.4%	5	2.3%				
425	<i>Cymbosphaera</i> <i>apiculata</i>	淡水	不明	不明	不明	底生	9	4.2%	10	5.0%				
438	<i>Diploma</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	8	3.8%	2	1.0%				
454	<i>Epihornia</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生					16	4.5%		
500	<i>Eunotia</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生			2	1.0%	1	0.3%		
520	<i>Fragilaria</i> <i>inversa</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	不定	3	0.3%			4	0.5%		
526	<i>Fragilaria</i> <i>constricta</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	不定								
535	<i>Frastralia</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	1	0.5%						
580	<i>Gomphonema</i> <i>acuminatum</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生	7	3.2%			2	1.0%	1	0.3%
600	<i>Gomphonema</i> <i>cavatum</i>	淡水	不定	不定	不定	底生								
628	<i>Gyrosigma</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	27	12.8%	2	1.0%				
630	<i>Aulacoseira</i> <i>ambigua</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生	24	11.4%						
684	<i>Actinoseira</i> <i>crassipunctata</i>	淡水	不明	不明	不明	底生	1	0.5%	71	35.7%	170	81.7%	174	79.1%
700	<i>Mesotaenia</i> spp	淡水	不明	不明	不明	浮遊			5	0.5%				
736	<i>Navicula</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	3	2.3%	1	0.5%			1	0.3%
812	<i>Neidium</i> <i>ampullum</i>	淡水	不明	不明	不明	底生	11	5.2%						
822	<i>Neidium</i> <i>tridens</i>	淡水	不明	不明	不明	底生								
835	<i>Neidium</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	13	6.2%	11	5.2%				
854	<i>Nitzschia</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生			11	5.5%	3	1.5%	3	1.4%
879	<i>Pinularia</i> <i>acerosphaera</i>	淡水	不定	不定	止水	底生			3	1.5%				
892	<i>Pinularia</i> <i>gibba</i>	淡水	不定	酸性	不定	底生	4	1.8%	4	0.5%				
930	<i>Pinularia</i> <i>viridis</i>	淡水	不定	不定	不定	底生			2	1.8%				
932	<i>Pinularia</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	23	15.6%	31	15.6%				
936	<i>Rheopseudos</i> <i>gibba</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊	1	0.2%						
940	<i>Staurosira</i> <i>arcta</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生			1	0.5%				
941	<i>Staurosira</i> <i>uncinata</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生	2	0.9%	4	2.0%				
943	<i>Staurosira</i> <i>phoenicenteron</i>	淡水	不定	不定	不定	底生	22	10.4%	6	4.0%				
945	<i>Staurosira</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生	8	2.8%	3	1.5%				
971	<i>Sivellia</i> <i>terrena</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	浮遊			2	1.0%				
972	<i>Sivellia</i> spp	淡水	不明	不明	不明	底生			1	0.5%				
							2	1.0%			6	2.7%		
											1	0.3%		
							4	1.9%	1	0.5%				
							207	98.1%	196	98.0%	203	100.0%	233	96.8%
							211	100	199	100	202	100	230	100
							178401	2570829	1929745	338854				
							108	142	190	191				
							31.2%	71.4%	31.6%	31.3%				

表16 珪藻組成表

花粉分帯

花粉分析結果を基に、花粉分帯を行った。

以下に、各（局地）花粉帯の特徴を記載する。また、時間的な推移が明らかになるよう、下位から上位に向かって記載を行った。

(1) II帯（試料No.C下）

マツ属（複維管束亜属）が高率を占め、アカガシ亜属、コナラ亜属が続く。草本・藤本花粉、胞子ではイネ科（40ミクロ未満）がその他の分類群に比べ高率を示す。

(2) I帯（試料No.C上,B,A）

アカガシ亜属が高率を占め、マツ属（複維管束亜属）、スギ属、コナラ亜属、ヒノキ科型が続く。マツ属（複維管束亜属）、スギ属、コナラ亜属、ヒノキ科型や、草本花粉の出現傾向からc亜帯（試料No.C上）、b亜帯（試料No.B）、a亜帯（試料No.A）に細分した。

珪藻化石群集の設定

珪藻分析結果を基に、珪藻化石群集の設定を行った。

以下に、珪藻化石群集の特徴を記載する。また、時間的な推移が明らかになるよう、下位から上位に向かって記載を行った。

(1) III帯（試料No.C下、C上）

淡水・不明種（広布種）の*Aulacoseira crassipunctata* がほとんどを占める。一方で、C下では海水種の*Actinocyclus subtilis*および、海水～汽水種の*Navicula peregrine*がわずかに検出された。

(2) II帯（試料No.B）

淡水・底生種が半数以上を占める。検出された淡水・底生種では、アルカリ・不定（広布

種) の *Caloneis silicula*、不定・止水(沼澤湿地付着生)の *Neidium iridis*などが検出される。一方で、海水種の *Actinocyclus subtilis*、*Actinocyclus spp.*および、汽水種の *Nitzschia levidensis var. salinarum* がごくわずかに検出された。

③ I 帯(試料No.A)

淡水・底生種が83%まで増加する。底生種ではアルカリ・不定(広布種)の *Caloneis silicula*、不定・不定(沼澤湿地付着生)の *Stauroneis phoenicenteron* が特徴的に検出されるほか、アルカリ・止水・浮遊種(湖沼沼澤湿地)の *Aulacoseira ambigua* も、これらと同定度の出現率を示す。一方で、汽水不定・不明種の *Nitzschia levidensis var. salinarum* がわずかに検出された。

古環境変遷

局地花粉帯の変遷に沿って、堆積環境及び遺跡周辺地域での古植生について考察を行う。

(1) 平安時代前期(試料No.C下):局地花粉帯Ⅱ帯、珪藻化石群集Ⅲ帯

①: 堆積環境

Aulacoseira crassipunctata が高率で検出されるが、淡水生種であること以外生態が特定されていない。*Aulacoseira* 属の多くが浮遊種であることから、*Aulacoseira crassipunctata* も浮遊種と仮定すると、淡水湖沼での堆積が推定できる。田中ほか(1998)によると、調査地は砂丘と扇状地、芦屋川と住吉川の自然堤防に囲まれた氾濫平野内に位置する。これらのことから調査地近辺が滞水し、湖沼が形成されたものと考えられる。ごく少量ではあるが海水生種が検出されるが、原因として、一般的に高潮や波浪などによる突発的な塩水の流入や、海(汽水)成層からの二次堆積が考えられる。隣接する深江北町遺跡での珪藻分析で古墳時代以前の層準が内湾域で堆積したとされること(古環境研究所, 2014)や、土壤堆積学的調査において古墳時代以降の海水準上昇(現標高80cm以下から+1mへ)により潟や海水生湿地の形成が指摘されている(増田, 2014)ことを踏まえると、当調査地でも平安時代前期よりも前に、海水の影響を受ける時期が存在したことが示唆される。

②: 古植生

ガマ属やイネ科(40ミロン未満)、カヤツリグサ科などの湿性草本由来の花粉が検出され、汀線付近の湿地に生育していたと考えられる。また、イネに由来する可能性が高いイネ科(40ミロン以上)も低率であるが検出され、やや離れた場所で稻作が行われていたことが示唆される。木本花粉ではマツ属(複維管束亞属)が高率を示し、扇状地や砂丘上にマツ林が分布し、芦屋川や住吉川の自然堤防上にはニレ類やケヤキが自然堤防林を形成していたと考えられる。また、背後の六甲山地から甲山周辺丘陵(田中ほか, 1998)にはカシ類を主とし、マキ類、モミ、コウヤマキ、スギ、ヒノキなどの針葉樹を混交する照葉樹林で覆われていたと考えられる。

また、スギ属花粉の出現率がⅡ帯からⅠ帯a亜帯に向かい增加傾向が認められる。このことから、湖沼周辺の湿地にスギ林が分布し、(後述のように)水位の低下に伴い湿地が拡大し、スギ林が拡大したものと考えられる。

(2) 平安時代前期(試料No.C上):局地花粉帯Ⅰ帯c亜帯、珪藻化石群集Ⅲ帯

①: 堆積環境

前の時期同様に、珪藻化石群集はⅢ帯が続き、砂丘と扇状地、芦屋川と住吉川の自然堤防に

埋まれた氾濫平野内の湖沼内で堆積したと考えられる。

②：古植生

ガマ属やミクリ属、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科などの湿性草本由来の花粉が検出され、汀線付近の湿地に生育していたと考えられる。特にイネ科（40ミクロン未満）の増加が著しく、汀線付近にヨシ原が形成されたものと考えられる。木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）が減少し、アカガシ亜属が急増する。扇状地上のマツ林が伐採されたことにより、アカガシ亜属を初めとするそのほかの樹種が相対的に増加したと考えられる。また、アカガシ亜属の増加割合がそのほかの樹種の増加割合より高いことから、一部の地域では（極相林である）カシ類主体の照葉樹林への遷移が進んだものと考えられる。

また前述のように水域の縮小と湿地拡大に伴い、スギ林が拡大した可能性が指摘できる。

(3) 平安時代前期（試料No.B）：局地花粉帯 I 帯b亜帯、珪藻化石群集 II帯

①：堆積環境

*Aulacoseira crassipunctata*が急減し、淡水・底生種の割合が増える。調査地近辺の水位が下がり、汀線からの距離が近くなったと考えられる。花粉化石では移動距離の短い草本・藤本花粉が36%と更に高率になり、汀線からの距離が近くなったことが示唆される。このことは、珪藻分析結果と整合する。また試料No.C下同様に、ごく少量であるが海（汽水）生種が検出される。前述の様に、高潮や波浪などによる突発的な塩水の流入や、海（汽水）成層からの二次堆積が考えられる。

②：古植生

イネ科（40ミクロン以上）が急増することから、拡大した湿地が開墾され、稲作が行われるようになったと考えられる。また、汀線近辺には引き続きガマ属やミクリ属、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科などが生育していたと考えられる。このほか草本・藤本花粉種数も検出量も増加し、湿地内で生育していたと考えられる。木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）が引き続き減少するが、そのほかの針葉樹種は増加する。特にスギ属の増加が顕著で、前述のように湿地拡大による影響と考えられる。一方で、扇状地や甲山丘陵上、六甲山地山麓の照葉樹林や残存していたマツ林が伐採され、六甲山地中腹から山頂を分布の主とした針葉樹種が相対的に増加したと考えられる。

I帯b亜帯を中心とするスギなど針葉樹種の増加とアカガシ亜属の減少を、気候変化と結び付け、多雨化や気温の低下に起因すると考えることもできる。一方で、気候変化に起因するすれば、広域的な分析結果にも現れるはずである。今後、同時期の他地域でのデータへの注視が必要である。

(4) 平安時代中期（試料No.A）：局地花粉帯 I 帯a亜帯、珪藻化石群集 I帯

①：堆積環境

淡水・底生種が更に増加する一方で、アルカリ・止水・浮遊種（湖沼沼沢湿地）の*Aulacoseira ambigua*も増加する。調査地近辺の水位は更に下がり、汀線からの距離も近くなったと考えられる。花粉化石では草本・藤本花粉が41%と更に増加し、珪藻分析結果と整合する。また、ここでも汽水生種がごく少量検出されており、高潮や波浪などによる突発的な塩水の流入や、海（汽水）成層からの二次堆積が考えられる。

②：古植生

イネ科（40ミクロン以上）が更に増加し、拡大した湿地の開墾が進み、水田が拡大したと考えられる。また、水田の拡大に伴い湿地内の植生が破壊され、検出できた草本・藤本花粉種類数が減少したと考えられる。一方汀線付近には、引き続きヨシ原が広がり、ガマ類やカヤツリグサ類も生育していたと考えられる。

木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属が増加に転じ、マツ属（複維管束亜属）を除く針葉樹種とコナラ亜属が減少する。マツ属（複維管束亜属）の増加は、里山（薪炭林）の拡大を示唆する。また、マツ属（複維管束亜属）の増加に伴い同じく薪炭林要素のコナラ亜属が減少する傾向は、中世末頃以降、近畿地方で認められる現象である（例えば、古谷（1979）のF6亜帯。古谷（1979）によれば「落葉樹二次林の破壊が進むとアカマツ林となる」とある。）。また、マツ材が、ナラ材より必要とされていたとも考えられる。一方で、扇状地や甲山丘陵上、六甲山地山麓の照葉樹林が萌芽等により復活するとともに、前述のようにマツ林が拡大したことにより、六甲山地中腹から山頂を分布の主とした針葉樹種が相対的に減少したと考えられる。

まとめ

神戸市東灘区本庄町に所在する本庄町遺跡で実施した花粉分析、珪藻分析の結果から、以下の事柄を推定した。

- 1) 花粉分析結果を基に、I、II帯の局地花粉帯を設定した。更に I 帯を a～c 亜帯に細分した。
- 2) 珪藻分析結果を基に、I～III帯の珪藻化石群集を設定した。
- 3) 珪藻分析結果を基に、珪藻化石群集ごとに堆積環境を推定した。この結果、湖沼内での堆積環境の変化が明らかになった。また、草本・藤本花粉組成の変化とも矛盾ない結果であった。ごく少量ではあるが海水生種が検出される原因として、高潮や波浪などによる突発的な塩水の流入や、海（汽水）成層からの二次堆積が考えられる。隣接する深江北町遺跡の諸分析結果を踏まえると、当調査地でも今回分析対象とした平安時代前期より前に、海水の影響を受ける時期が存在したことが示唆される。
- 4) 遺跡周辺での、およそ平安時代前期から中期にかけての古植生（変遷）を推定した。遺跡北側に続く扇状地、六甲山地から甲山周辺丘陵での森林植生の変化が推定できた。
- 5) I 帯 b 亜帯を中心とするスギなど針葉樹種の増加とアカガシ亜属の減少を、気候変化と結び付けることも可能である。気候変化に起因するとすれば、広域的な分析結果にも現れるはずであり、同時期の他地域でのデータの注視が必要である。

参考文献

- (株) 古環境研究所 (2014) 深江北町遺跡第12次調査における古環境分析。深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書, 163-170
- 田中真吾・井上 茂 (1998) 地形分類図・同説明書。土地分類基本調査「大阪西北部」5万分の1, 13-36, 兵庫県。
- 千葉 崇・澤井祐紀 (2014) 環境指標種群の再検討と更新。Diatom, 30, 17-30.
- 中村 純 (1974) イネ科花粉について、特にイネを中心として。第四紀研究, 13, 187-197.
- 古谷正和 (1979) 大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷。第四紀研究, 18 (3), 121-141.
- 増田富士雄 (2014) 神戸市東灘区深江北町遺跡第12次調査での自然堆積層。深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書, 171-182
- 渡辺正巳 (2010a) 花粉分析法。必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177, ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳 (2010b) 珪藻分析法。必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177, ニュー・サイエンス社.

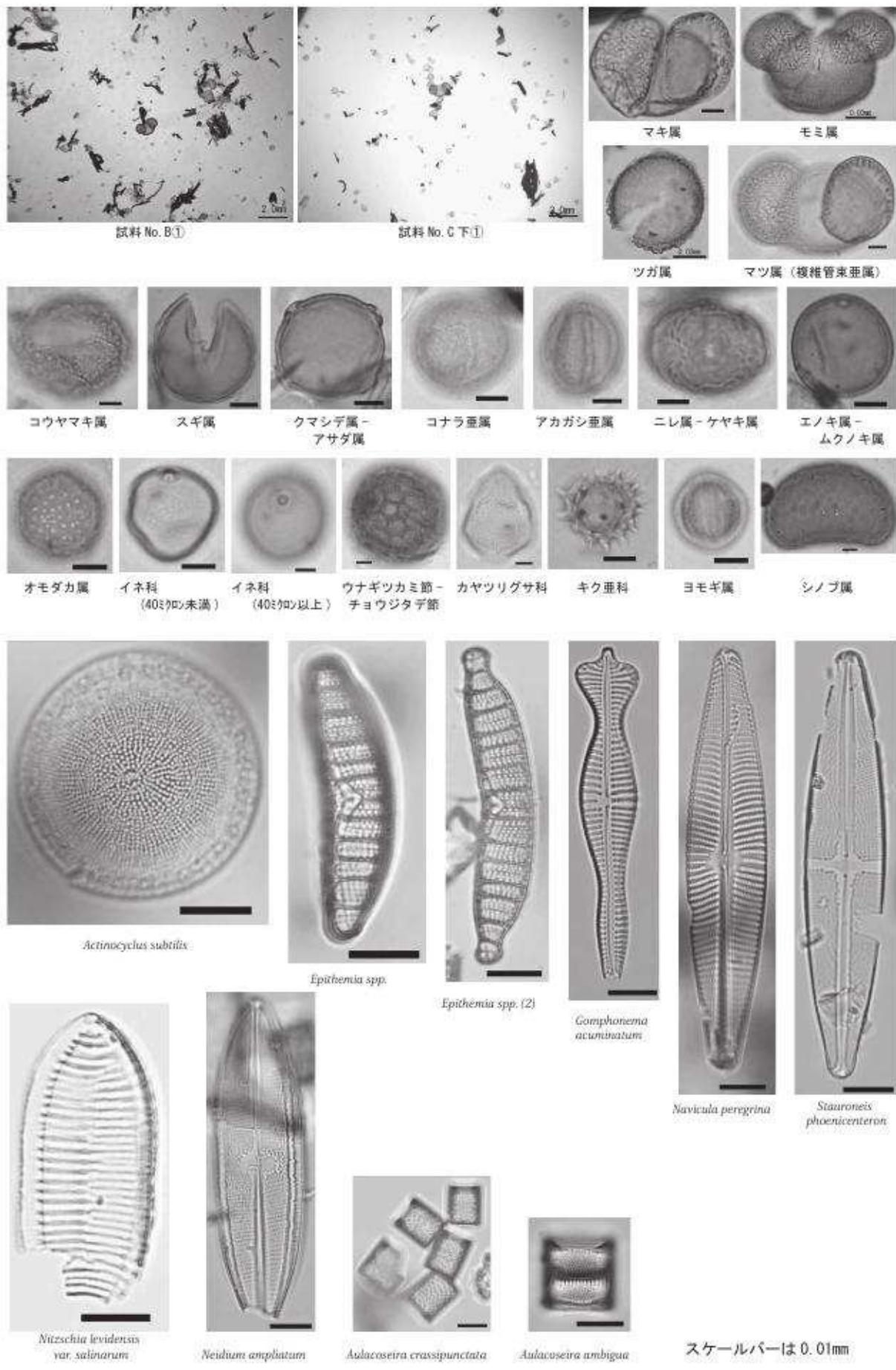


写真1 花粉・珪藻写真

第2節 本庄町遺跡第10次調査で出土した木製品の樹種

吉川純子（古代の森研究舎）

1. はじめに

本庄町遺跡第10次調査において出土した木製品100点について樹種同定を実施した。木製品からは直接薄片を採取、あるいは小片を採取し、小片からステンレス剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の3方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。なお、樹同番号100は炭化材片であったため横断面、接線断面、放射断面の3方向に割り、プレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察・同定した。

2. 同定結果及び考察

出土した樹種は、モミ属、マツ属複維管束亞属、コウヤマキ、スギ、ヒノキ、サワラ、針葉樹、オニグルミ、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亞属、サカキ、イスノキ、トネリコ属の計13分類群であった。以下に同定された分類群の記載を行う。各木製品の樹種については、第2章第3節の表12、13を参照されたい。

モミ属 (*Abies*)：早材から晩材への移行は比較的緩やかな針葉樹で、放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個である。放射組織の上下縁に不規則な形状の放射柔細胞がありじゅず状末端壁を有する。

マツ属複維管束亞属 (*Pinus subgen. Diploxyylon*)：晩材部がやや厚く水平樹脂道と垂直樹脂道がある針葉樹。放射仮道管の内壁は内腔に向かって著しく鋸歯状に突出して、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

スギ (*Cryptomeria japonica* (Linn. Fil.) D.Don)：早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い楕円形となり、1分野に2～3個ある。

コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc.)：晩材部がかなり薄く早材から晩材への移行は比較的緩やかで、放射組織は放射柔細胞のみからなり単列で比較的短く、分野壁孔は窓状でマツ属よりやや小さい。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endl.)：早材から晩材の移行は急で晩材部が薄い針葉樹で晩材部に樹脂細胞が点在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型で1分野に2個存在する。

サワラ (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl.)：晩材部が薄く年輪界が比較的明瞭なヒノキに似た針葉樹。晩材部付近に樹脂細胞がある。分野壁孔はスギないしヒノキ型で小さく1分野に3～4個存在する。

針葉樹：放射組織は柔細胞のみからなるようであるが、分野壁孔が溶けて確認できず、細胞壁も薄く組織が失われている可能性があるものを針葉樹とした。

オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* Kitamura)：やや大きな道管が単独ないし2～4個放射方向に複合して年輪内に均一に分布する散孔材。柔細胞は短接線状に並び網状柔組織をつくる傾向がある。放射組織は1～3細胞幅でほぼ同性。

コナラ属コナラ節 (*Quercus sect. Prinus*)：年輪のはじめに大きい道管が数個配列し、その後急に径を減じて薄壁のやや角張った管孔が波状に配列する環孔材、道管は單穿孔。放射細胞は同性で単列と広放射組織がある。

コナラ属アカガシ亞属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*)：やや大きい道管が放射方向に配列する放射孔材、道管は單穿孔。放射細胞は同性で単列と広放射組織がある。

サカキ (*Cleyera japonica* Thunb.)：ごく小さな道管が均等に分布する散孔材で段数が多い階段穿孔、放射組織は異性単列時々2列。

イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)：小さい道管が均一に分布する散孔材、道管は段数が少ない階段穿孔を有する。軸方向柔細胞に結晶が多く細胞が丸く膨れる。放射組織は異性で幅は1～3列で数個の単列部を介して軸方向に長く連なる。放射柔細胞にも丸い結晶細胞が見られる。

トネリコ属 (*Fraxinus*)：厚壁の大きい管孔が2、3列配列しその後厚壁の小管孔が単独ないし数個複合して散在する環孔材。木部柔組織は周囲状および翼状で道管の穿孔板は单一である。放射組織は同性で2列である。

樹種＼器種	農耕 土木具	容器	食事具	祭祀具	器具材	施設材	土木材	用途 不明品	加工材	非加工材	樹種別計
モミ属	1		1			1		1			4
マツ属複維管束亜属							3	1	1	1	6
コウヤマキ								1	1		2
スギ						2		4			6
スギまたはヒノキ科						1		1			2
ヒノキ	5	6		5	7	4		15	22		64
サワラ		1							1		2
ヒノキ科	2							1	1		4
針葉樹										1	1
オニグルミ					1		1				2
コナラ属コナラ節								1			1
コナラ属アカガシ亜属	1							1			2
サカキ								2			2
イスノキ								1			1
トネリコ属										1	1
器種別計	9	7	1	5	8	8	4	29	26	3	100

表17 器種分類ごとの樹種同定結果

表17は全試料の樹種別・器種別集計である。ヒノキが圧倒的に多く64点で全体の64%と6割以上を占めている。次いでスギとマツ属複維管束亜属が各々6%、モミ属とヒノキ科4%で針葉樹分類群が全体の91%を占める。広葉樹はオニグルミ、コナラ属アカガシ亜属、サカキが2%、コナラ属コナラ節、イスノキ、トネリコ属が1%と低率であった。器種別樹種使用状況では、農耕土木具や容器、祭祀具をはじめ、性格の分からぬ器具材や施設材にもヒノキが多く用いられており、きわめてヒノキの利用率が高いことがわかった。なお、土木材である杭にはマツ属複維管束亜属が用いられていた。

古代以降の用材傾向としてヒノキの利用率が増加することは近畿地方北部の特徴であり（藤田・阿刀2012）、深江北町遺跡第12・14次調査ではヒノキが72.9%を占め（神戸市教育委員会2014）、同遺跡第17次調査でもヒノキが76%と高い比率で（神戸市教育委員会2018）、次いでマツ属複維管束亜属やコナラ属が5%程度と本遺跡と同様な傾向にある。

引用文献

- 伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学』海青社
- 株式会社古環境研究所 2014「深江北町遺跡第12次調査における古環境分析」『深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 谷正俊編 2014『深江北町遺跡 第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 藤田淳・阿刀弘史 2012「V遺跡出土木製品の種類と地域性 18章 北近畿」『木の考古学』海青社

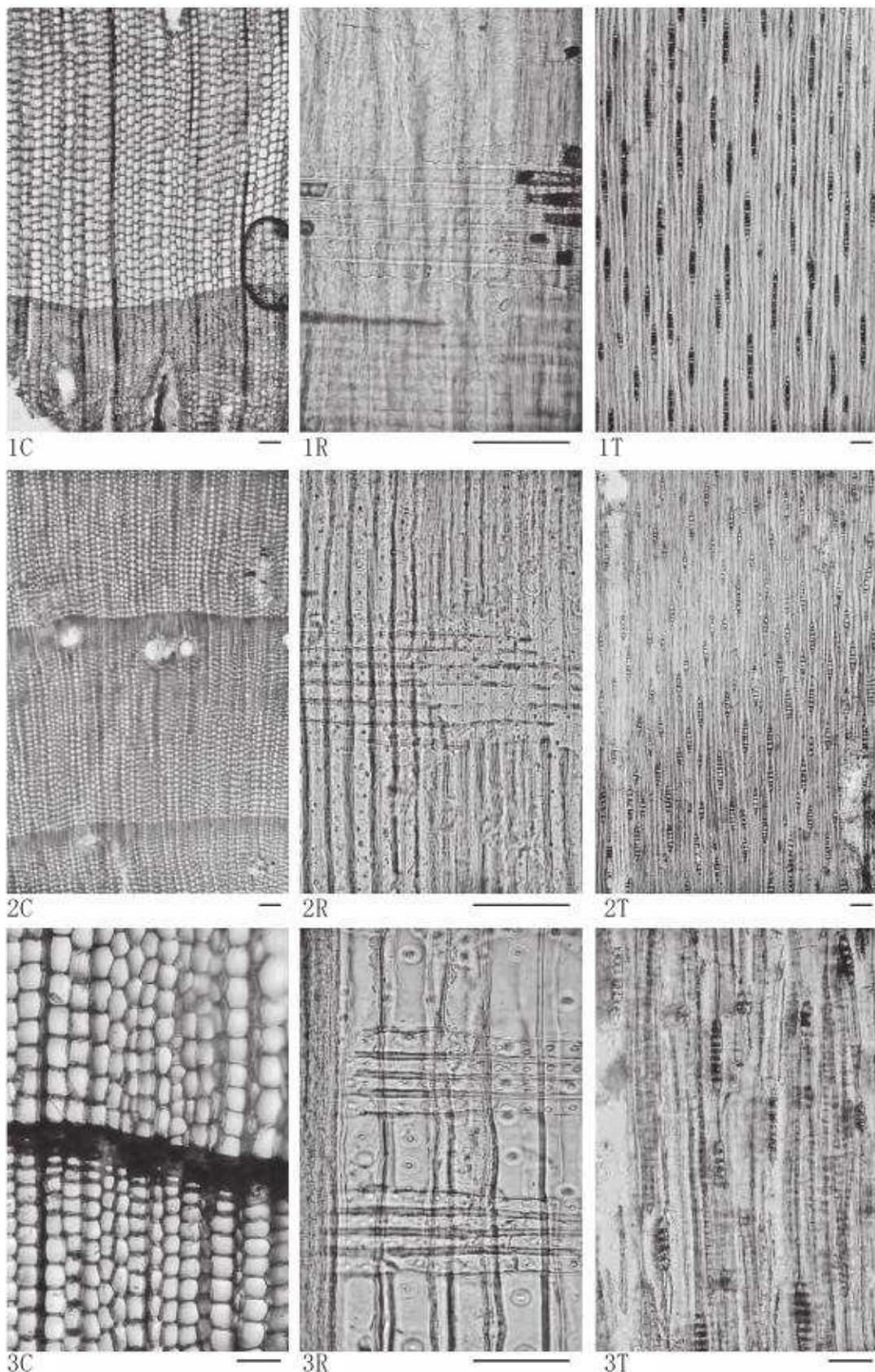


写真2 本庄町遺跡出土木製品の顕微鏡写真1

1.モミ属 (No.7) 2.マツ属複維管束亞属 (No.97) 3.スギ (No.25)
(C:横断面, R:放射断面, T:接線断面, スケールは0.01mm, No.は樹同番号を示す)

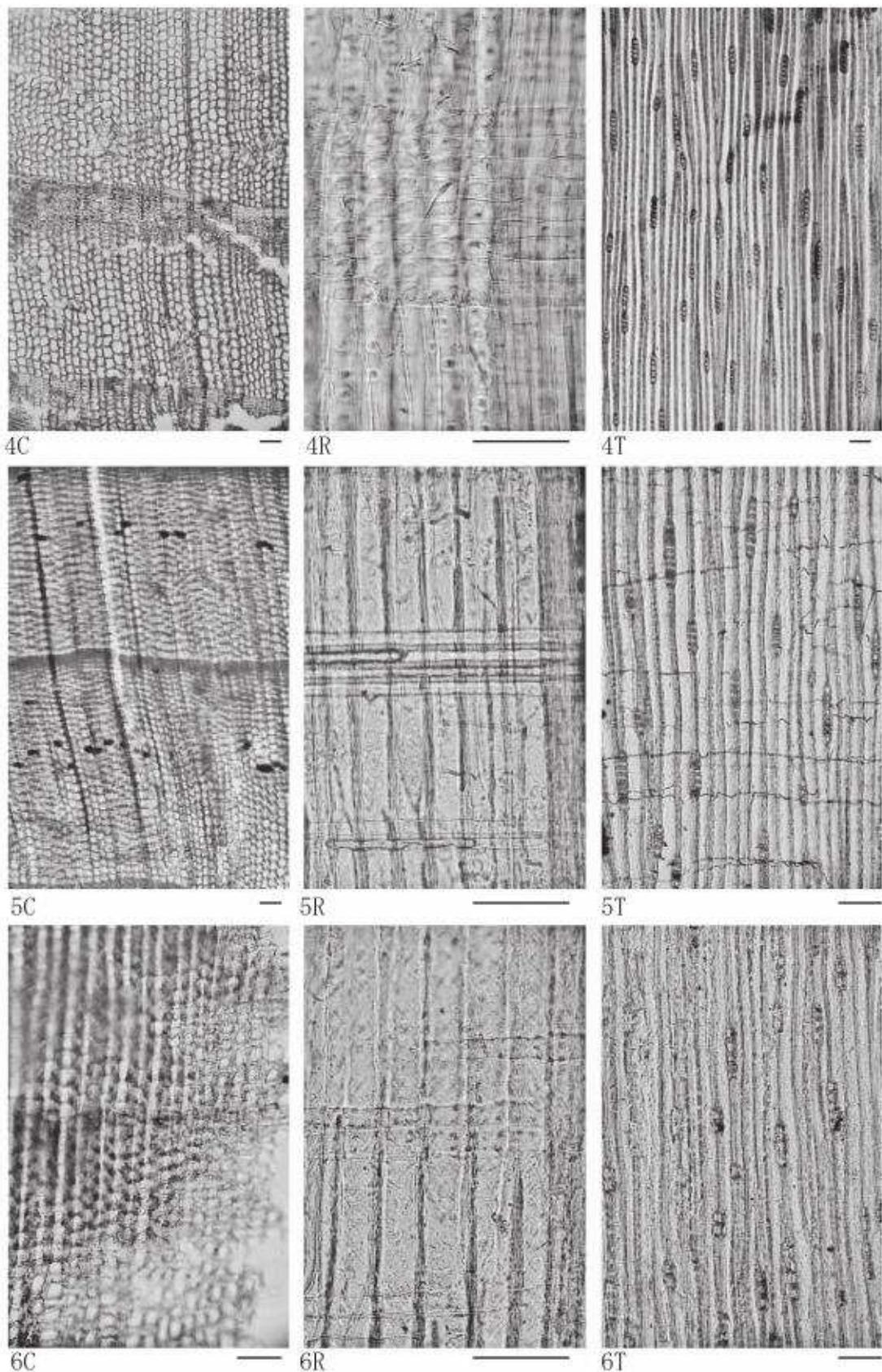


写真3 本庄町遺跡出土木製品の顕微鏡写真2
4.コウヤマキ (No.83) 5.ヒノキ (No.14) 6.サワラ (No.8)
(C:横断面, R:放射断面, T:接線断面, スケールは0.01mm, No.は樹同番号を示す)

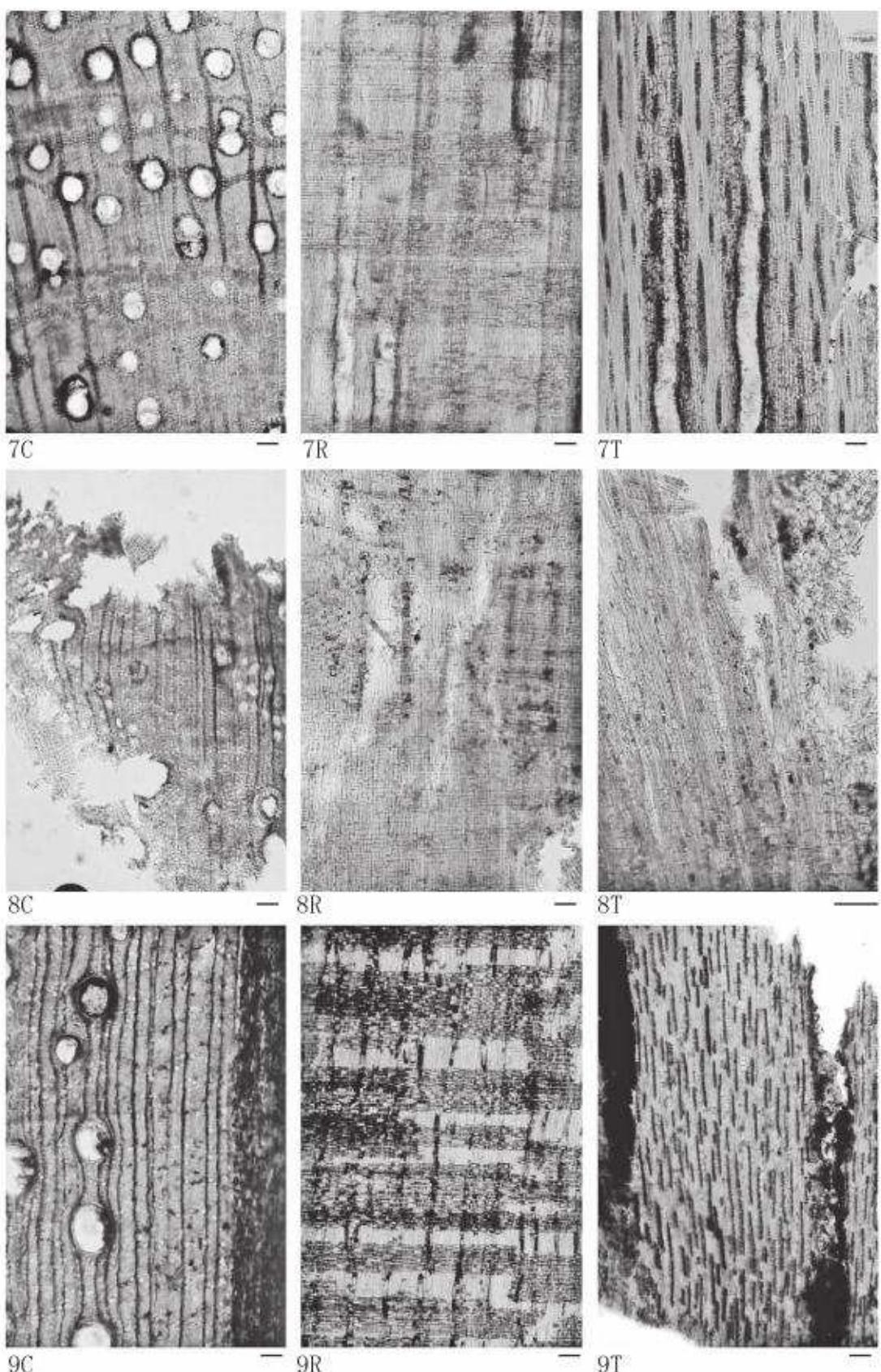


写真4 本庄町遺跡出土木製品の顕微鏡写真3
 7. オニグルミ (No.95) 8. コナラ属コナラ節 (No.38) 9. コナラ属アカガシ亞属 (No.86)
 (C:横断面, R:放射断面, T:接線断面, スケールは0.01mm, No.は樹同番号を示す)

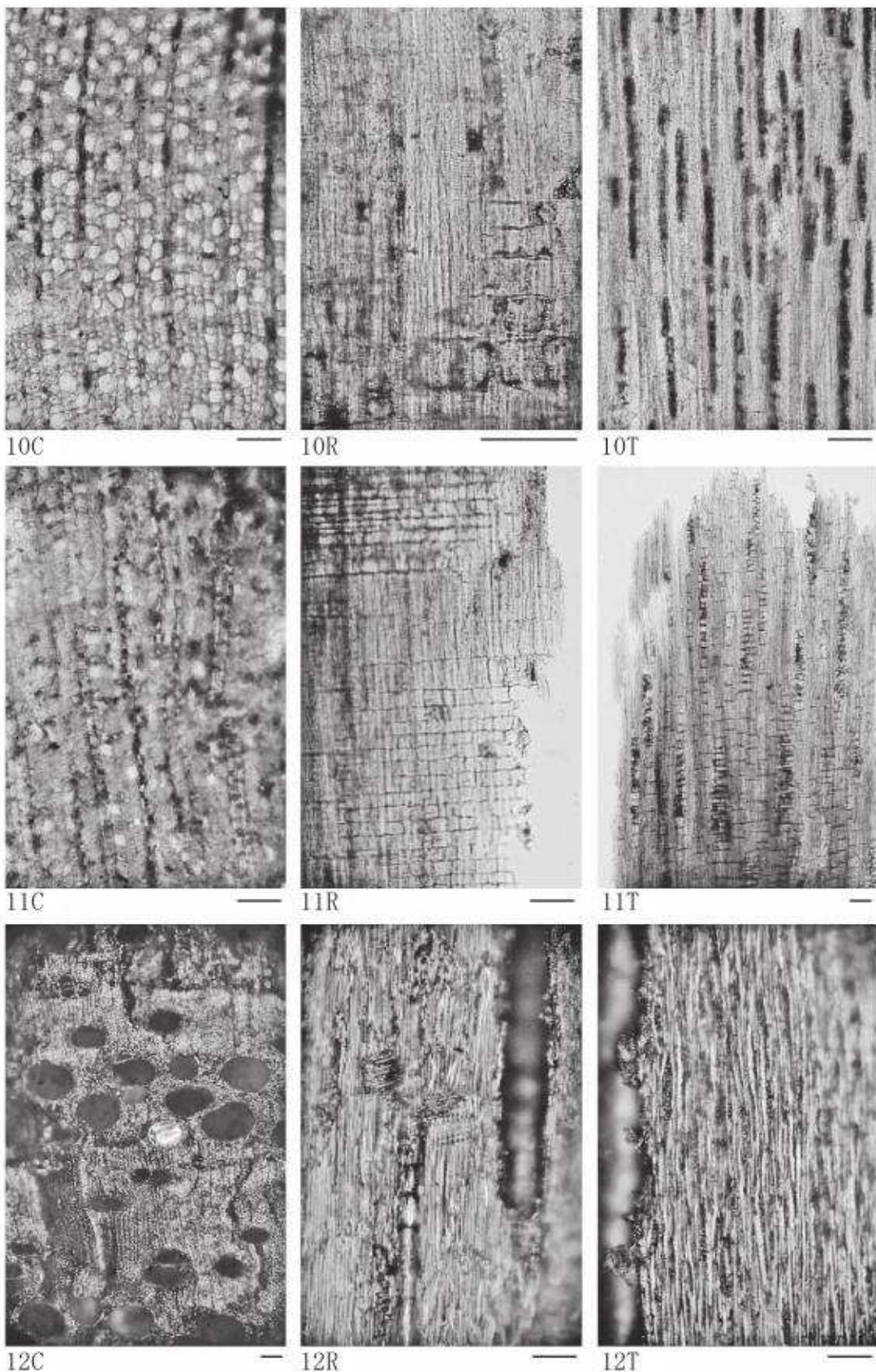


写真5 本庄町遺跡出土木製品の顕微鏡写真4

10. サカキ (No.3) 11. イスノキ (No.1) 12. トネリコ属 (No.100)
(C:横断面, R:放射断面, T:接線断面, スケールは0.01mm, No.は樹同番号を示す)

第4章 まとめ

1. 集落遺跡としての様相

今回の調査地は、浜堤上と考えられる4、5区と、その北側から1、2区の南半部、3区にかけての堤間湿地によって、概ね構成される。

堤間湿地については、その層位の状況から、平安時代前期（第2遺構面の中心時期）の段階において、湿地として認識でき、その後、その範囲は徐々に少なくなるものの、鎌倉時代段階（第1遺構面）にいたるまで低湿な状況を呈していたと考えられる。

浜堤上にあたると考えられる4、5区については、北側（1～3区側）に向かって地形的に低くなることから、堤間湿地の南端にあたり、集落（さらに南に所在する集落）の北側の縁辺部の可能性が高い。

2. 出土遺物の諸相

①木製品について

堤間湿地内の堆積層から数多く出土しており、出土箇所の性格上、時期の特定はやや難しいが、共伴する土器資料に基づくと、平安時代前期が主体的な時期と凡そ捉えている。

確認できた木製品の種類としては、田下駄、鋤などの農耕土木具、曲物、挽物皿などの日常雑器類、斎串などの祭祀具などで、その他、施設材（板材、角材、丸材）、器具材の破片も多くみられる。

特筆すべきは、高足型田下駄〔枠歯部分〕（5、46）で、本庄町遺跡においては、今回の調査地の西方約50mの地点で行われた第3次調査において、黒色シルト層（古墳時代後期）より一体型のタイプのものが1点出土している。^[1]

その他の高足型田下駄の事例として、兵庫県内では、豊岡市砂入遺跡^[2]や袴狭遺跡^[3]〔飛鳥時代～平安時代前期頃〕、また、（46）に近い事例として、鳥取県池ノ内遺跡〔古墳時代後期～奈良時代〕^[4]や島根県原の前遺跡〔古墳時代後期河道〕^[5]などがある。

この高足型田下駄は、各地の事例から、概ね古墳時代後期～平安時代前期に属するものと考えられることから、本調査の資料と齟齬は無く、稀少な事例と言える。

②土器について

今回の調査においては、縄文時代晩期～江戸時代の遺物が確認されているが、最も古いものと考えられるのが、5区の浜堤面の下層確認において出土した縄文時代晩期深鉢（72）である。

特筆される資料として、弥生時代末期～古墳時代初頭に属すると考える特殊壺（14）があげられ、神戸市内においては、住吉宮町遺跡^[6]、池上北遺跡^[7]などで類例が確認できる。

平安時代前期に属する資料の中では、墨書土器、転用硯、綠釉陶器、灰釉陶器等、一般的な集落ではみられない資料も確認でき、同遺跡の南側に隣接し、「草屋驛屋」の推定地の遺跡として周知されている深江北町遺跡との関連性がうかがえる。

③その他の遺物について

少量ながら瓦片（平瓦および丸瓦・162～166が平安時代前期）が確認されており、この点からも一般的な集落遺跡とはやや異なった様相がうかがえことができ、深江北町遺跡の様相とも類似する。

また、海浜部に位置する集落であることから、土錘や飯蛸壺などの漁撈具も数多く確認されている。南側に隣接する深江北町遺跡やその西側に位置する北青木遺跡においても、数多く確認されており、同地域の主要な生業のひとつであったことがうかがえる。

3. 今回の調査成果からみた周辺遺跡との関連

本庄町遺跡は、過去の調査成果から、縄文時代後期以降において連綿と集落が営まれていたことが周知されており、縄文時代後期、古墳時代初頭、古墳時代後期、平安時代前期の集落、弥生時代前期、古墳時代後期、鎌倉時代の水田が確認されている。

今回の調査においては、平安時代前期、鎌倉時代の集落、湿地状の落ち込み（堤間湿地）が確認されたが、その成果から、隣接する深江北町遺跡に近い様相を示しており、今後の調査の進展によって、周辺地域の空間構成がさらに明らかになっていくものと期待される。

註

- [1] 斎木巖 1992「本庄町遺跡第3次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- [2] 藤田淳ほか 1997『砂入遺跡 兵庫県文化財調査報告 第161冊』兵庫県教育委員会
- [3] 鈴木敬二編 2000『袴窓遺跡 兵庫県文化財調査報告 第197冊』兵庫県教育委員会
- [4] 加茂川改良工事関係埋蔵文化財発掘調査団編 1986『池ノ内遺跡』米子市教育委員会・鳥取県河川課
- [5] 佐伯徳哉ほか 1995『原の前遺跡』島根県教育委員会
- [6] 丸山潔ほか 1990『住吉宮町遺跡第11次調査』神戸市教育委員会
- [7] 菅本宏明 1986『池上北遺跡』『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』

参考文献

- 山下史朗編 1988『神戸市東灘区深江北町遺跡 兵庫県文化財調査報告 第54冊』兵庫県教育委員会
- 村上賢治編 1991『神戸市東灘区深江北町遺跡（Ⅱ） 兵庫県文化財調査報告 第88冊』兵庫県教育委員会
- 山本雅和編 2002『深江北町遺跡第9次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 中居さやか 2003『本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 増田富士雄 2003『神戸市本庄町遺跡で観察された浜堤の形成過程を記録した地層』『本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 田中眞吾 2004『大地の成り立ち』『本庄町村史 地理編・民俗編・神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ-』
- 川上厚志・井上麻子編 2014『北青木遺跡第7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 谷正俊編 2014『深江北町遺跡 第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 谷正俊編 2018『深江北町遺跡 第17次調査 埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 増田富士雄・谷口圭輔・佐藤喜英 2018『神戸市東灘区北青木遺跡第7次調査地における堆積物と地層』『北青木遺跡第8次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 藤井太郎編 2018『北青木遺跡第8次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

写真図版

図版1



4、5区空中写真（俯瞰モザイク）



1区第2遺構面（南から）



2区第1遺構面（東から）

図版2



2区第2遺構面（東から）



2区西第2遺構面（東から）

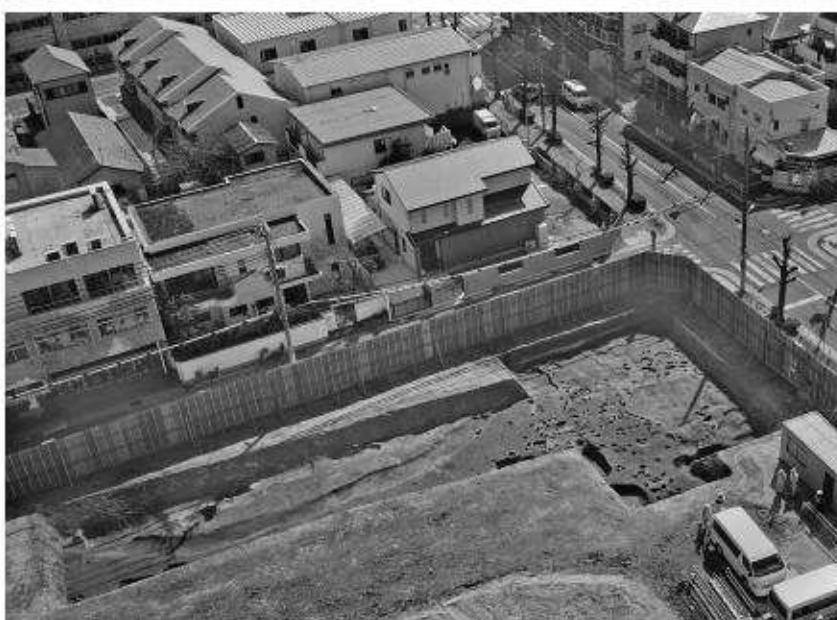


4区、4区東
第2遺構面（北東から）

図版3



4区第2遺構面（東から）



4、5区東第2遺構面
空中写真（北から）



5区第2遺構面空中写真
(西から)

図版4



4区第2遺構面（北東から）



4区第2遺構面（南東から）



4区東SK403（南から）

図版5



4区東、5区第2遺構面
(北東から)

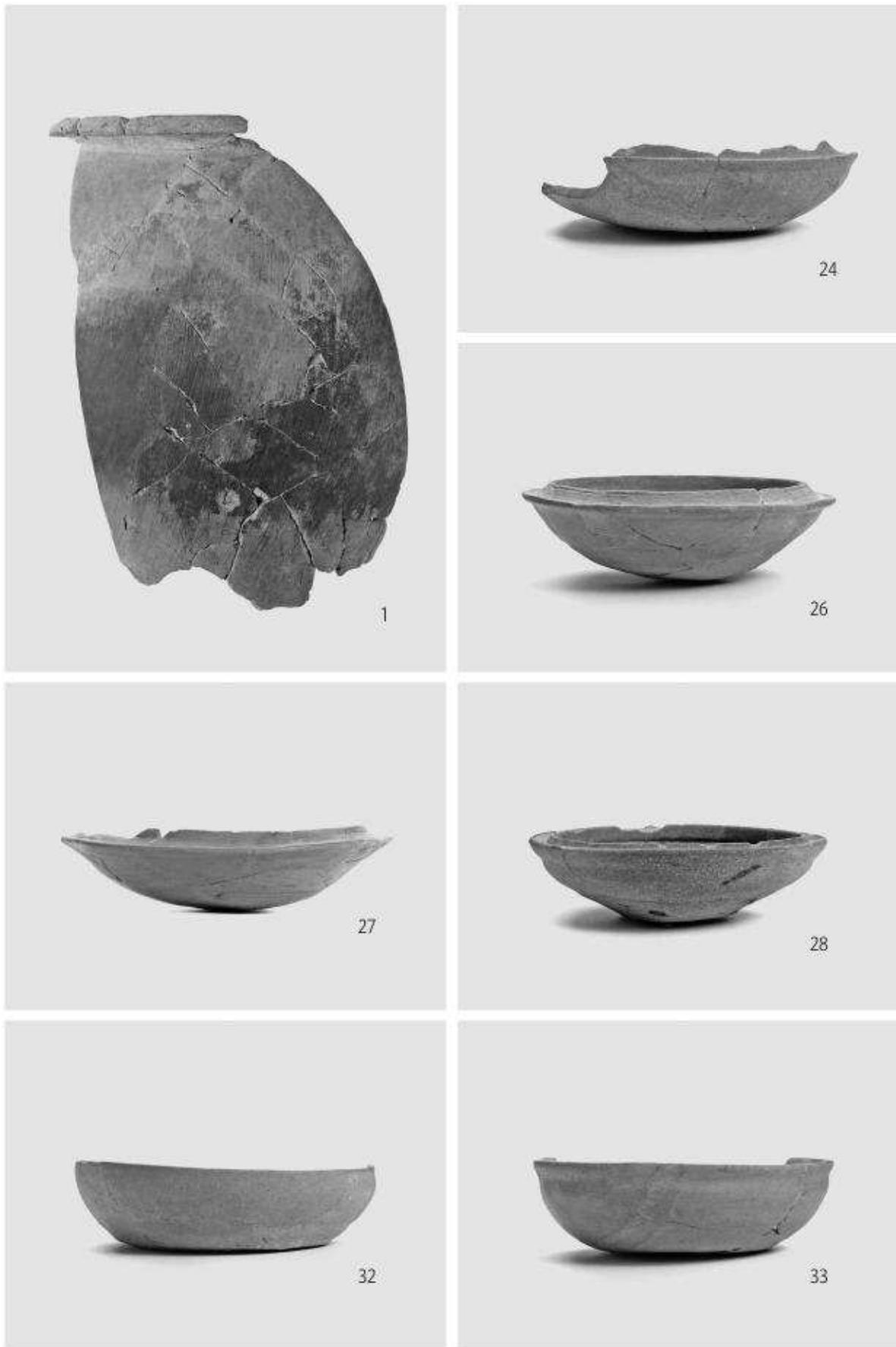


5区第2遺構面 (西から)



5区西端部浜堤面断ち割り状況
(北西から)

図版6



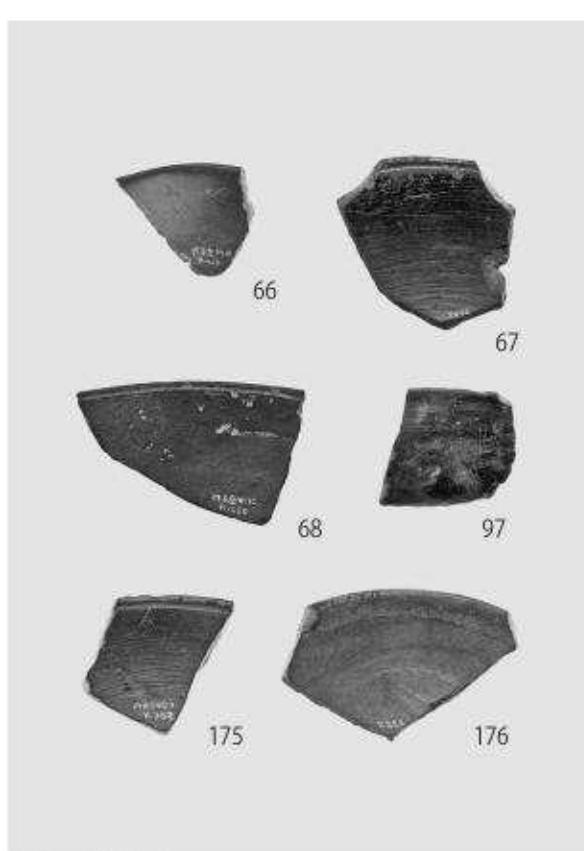
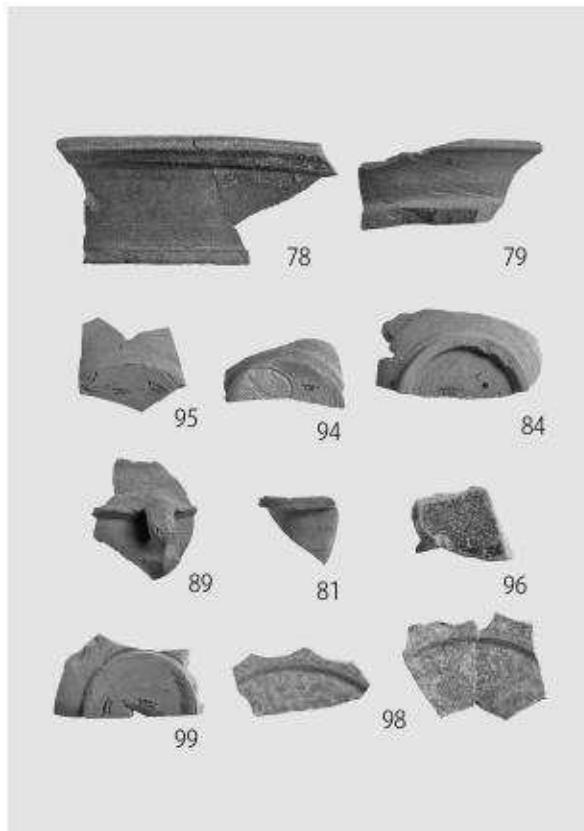
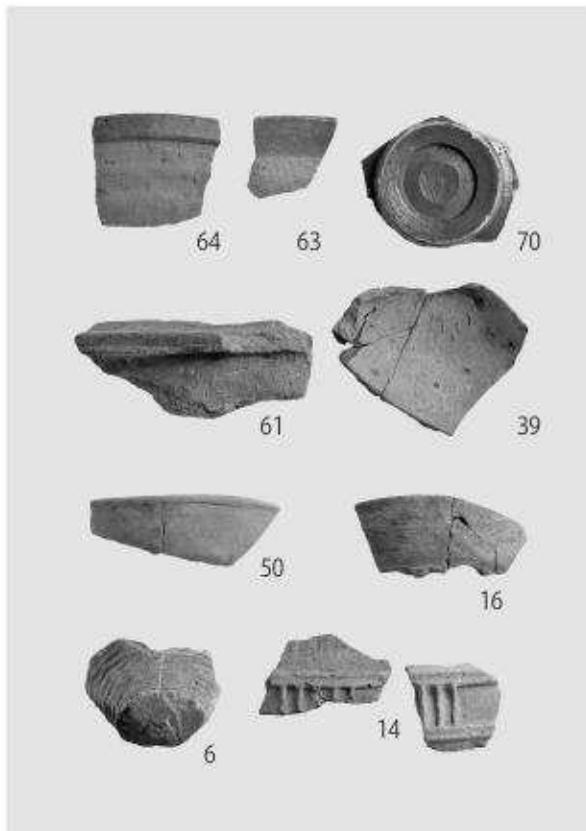
1~3区出土土器 (1)

図版7

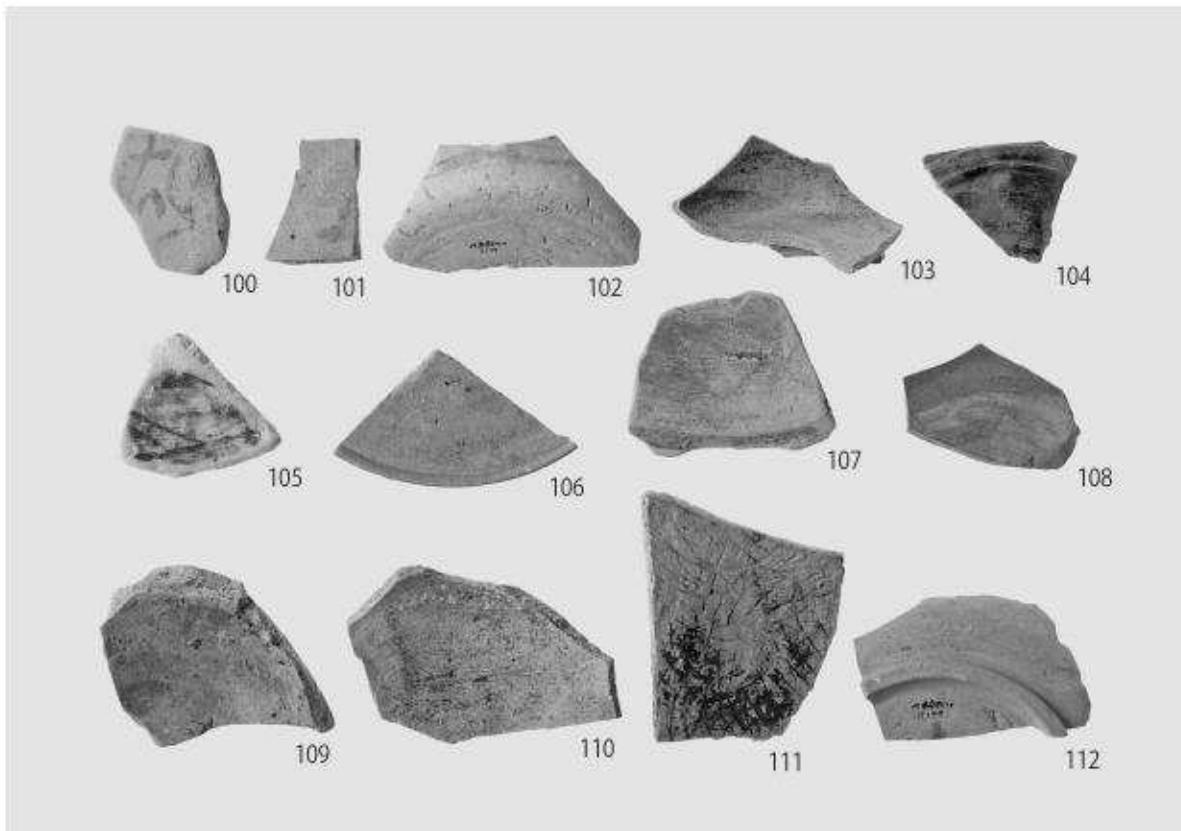


1~3区出土土器 (2)

図版8



図版9

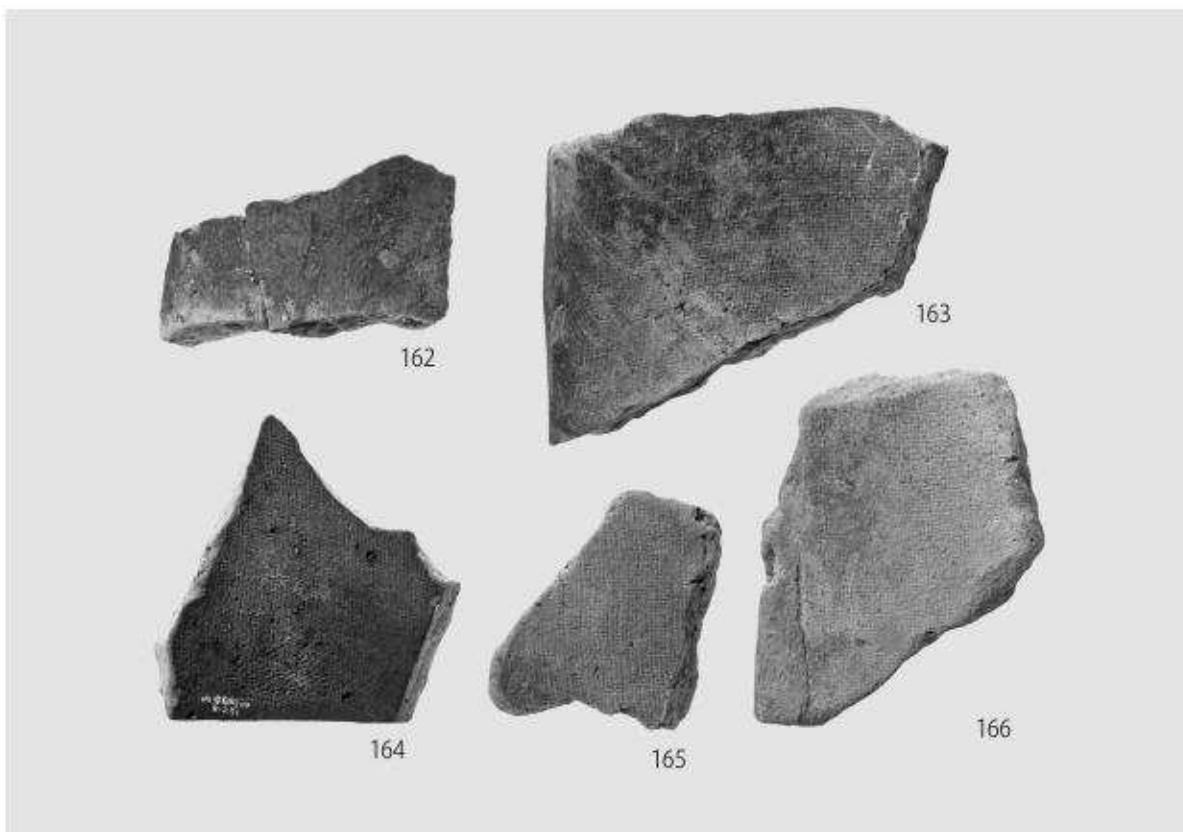


墨書き土器・転用硯

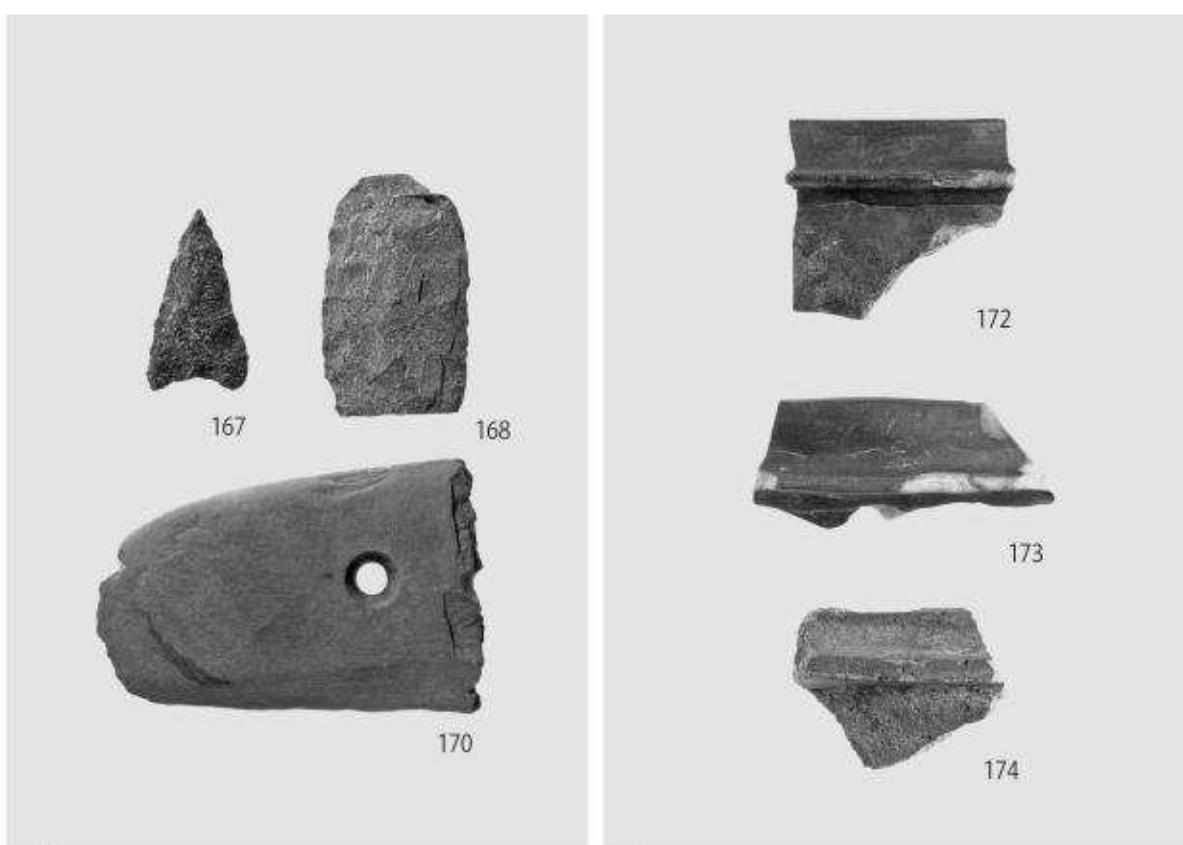


漁撈具

図版 10



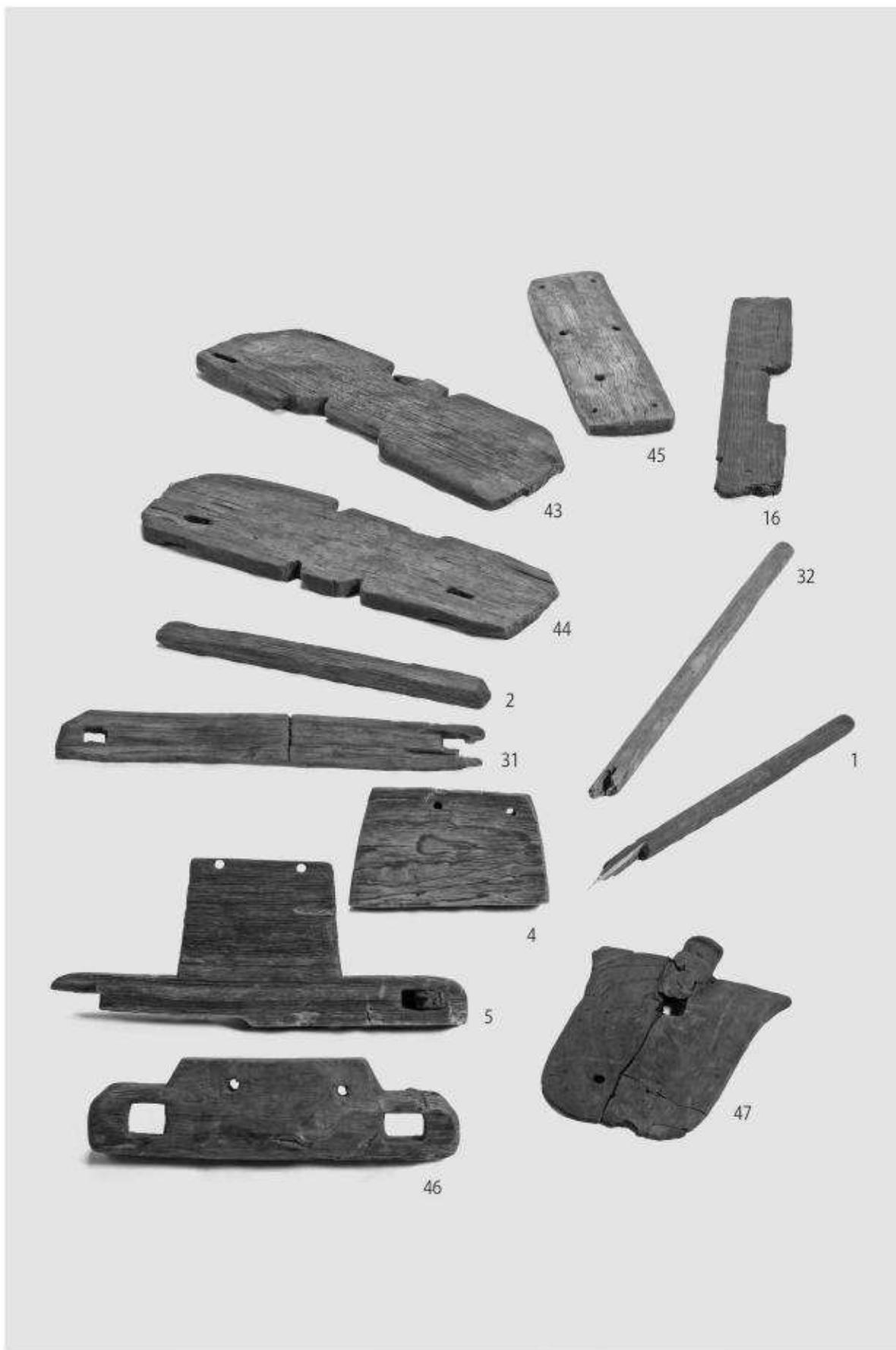
瓦



石製品

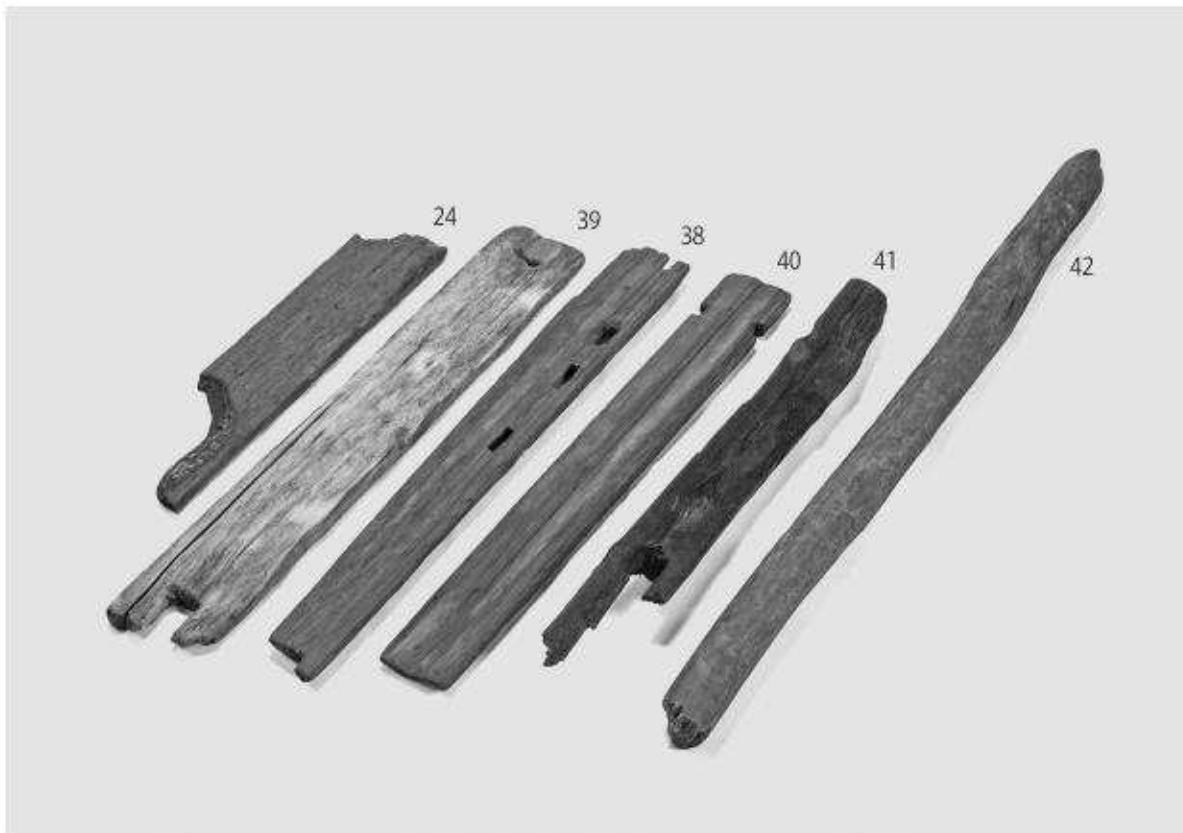
羽釜

図版11

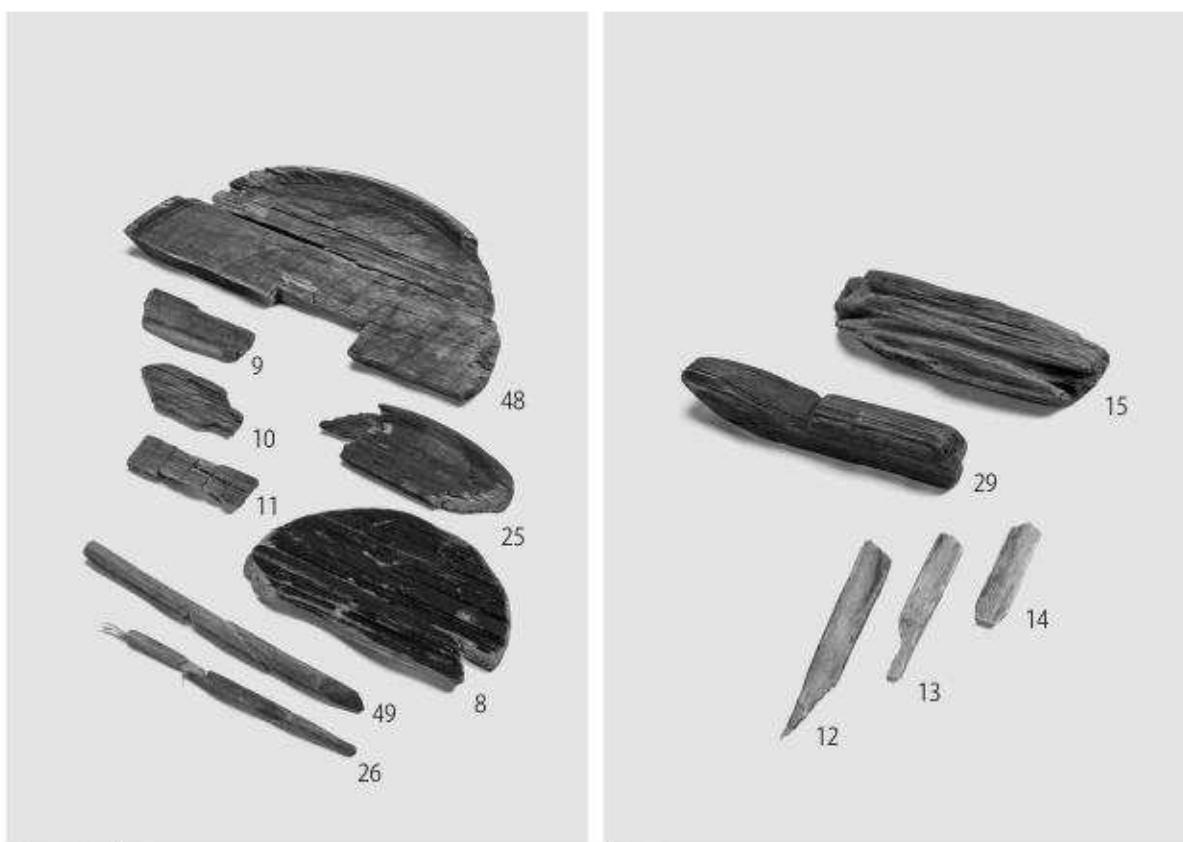


農耕土木具

図版12

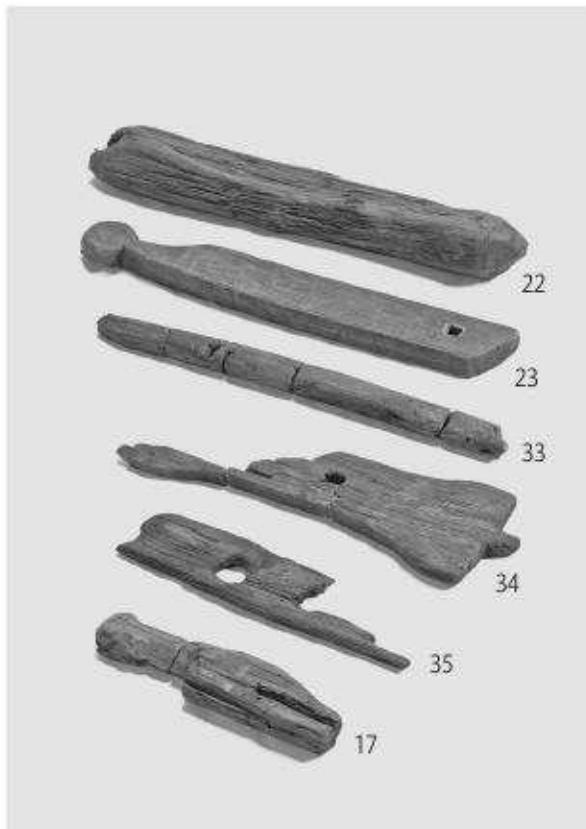


施設材

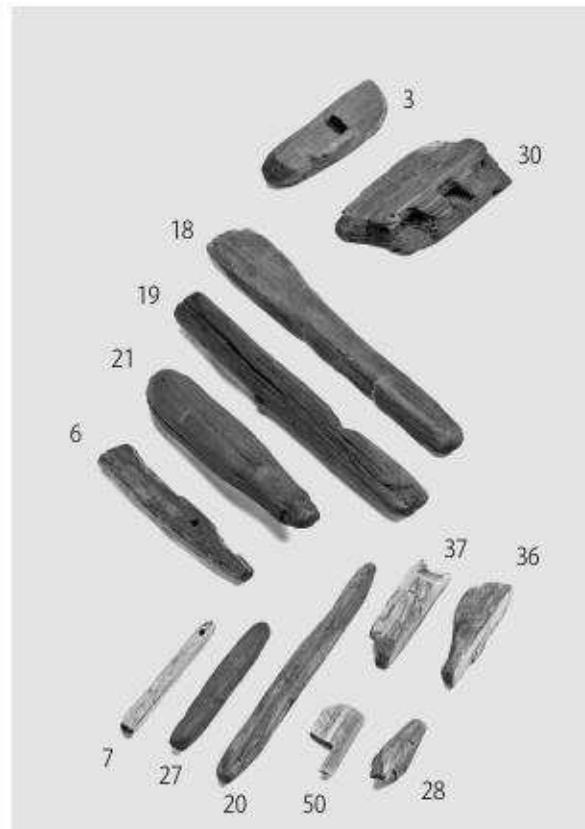


容器・食事具

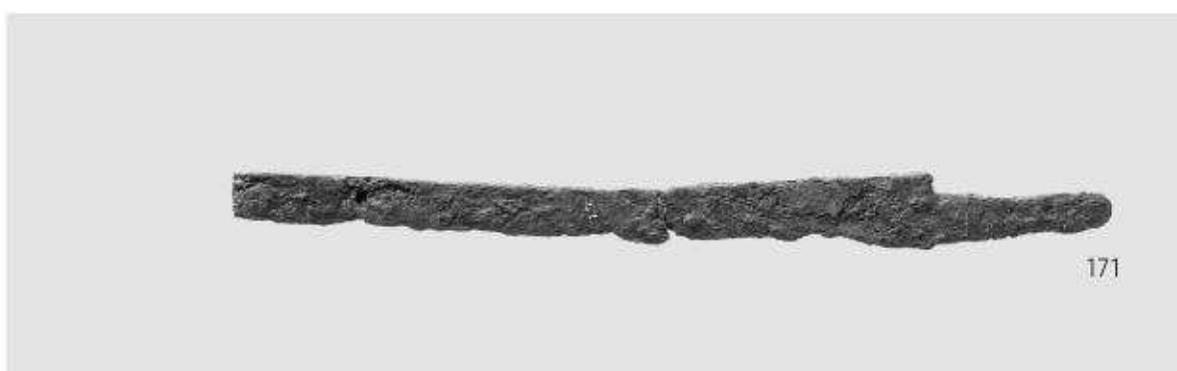
祭祀具



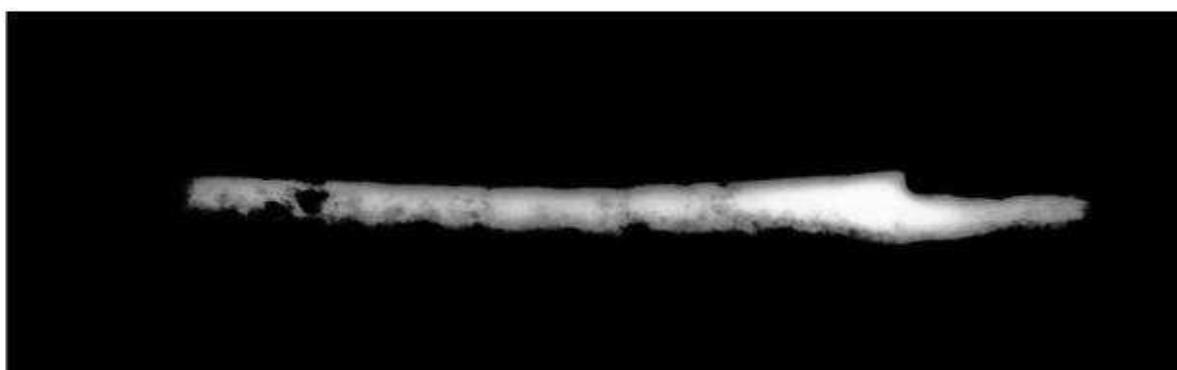
その他木製品 (1)



その他木製品 (2)



鉄製小刀



鉄製小刀 X 線透過像 (60kVp, 3mA, 40sec : IX100)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ほんじょうちょういせき だい10じちょうさ まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	本庄町遺跡 第10次調査 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	中井菜加（編）池田穀 中村大介 山田侑生 渡辺正巳 吉川純子							
編集機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-6480							
発行年月日	西暦2019年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
本庄町 遺跡	兵庫県神戸市 東灘区深江北町 2丁目10-12	市町村	遺跡番号	34° 43' 32"	135° 17' 38"	20171107 ～ 20180330	1700m ²	社員寮 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				特記事項
本庄町遺跡	集落	平安時代	ピット、溝 落ち込み	縄文土器(船橋式)、弥生土器、土師器、 須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器、 瓦器、黒色土器、転用硯、墨書き土器、 石製器、土錘、瓦、鉄製小刀、木製品				
要約								
平安時代前期と鎌倉時代のピット、溝、落ち込みなどの遺構と、縄文時代晩期から江戸時代の遺物、堤間湿地と考えられる湿地状の落ち込みを確認した。土器類は土師器、須恵器の他に官衙的様相を示す綠釉陶器、灰釉陶器などの施釉陶器や墨書き土器、転用硯等もみられた。他に鋤や田下駄等の木製品も出土した。今回の調査区に隣接する深江北町遺跡との関連が伺える。								

本庄町遺跡 第10次調査 埋蔵文化財発掘調査報告書

2019.3.29

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-5799

印 刷 福田印刷工業
神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
TEL 078-811-3131

